原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第40集

原（はる）の辻（つじ）遺跡

原の辻遺跡調査研究事業調査報告書

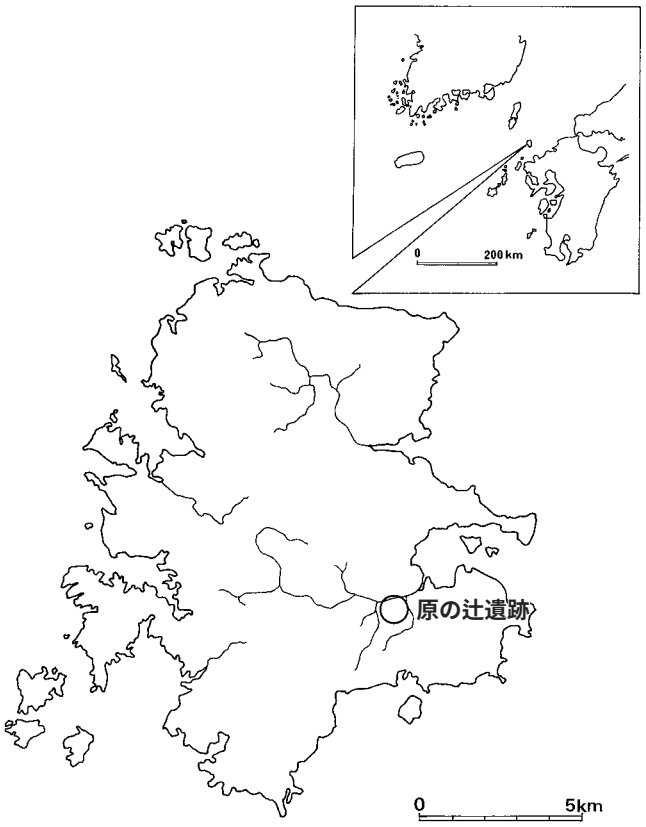
2009

長崎県教育委員会

原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第40集

原の辻遺跡

原の辻遺跡調査研究事業調査報告書



遺跡遠景　西から内海湾方面を望む

石田高原地区（下が北）

八反地区　（下が北）

発刊にあたって

本書は，国庫補助を受けて実施した，平成20年度原の辻遺跡調査研究事業の報告書です。

原の辻遺跡は，これまでの調査で，多重の環濠や日本最古の船着き場跡などが確認され，中国や朝鮮半島との盛んな交流を物語る数多くの遺物と合わせ，弥生時代を代表する遺跡として広く知られていますが，壱岐島内の同時代の遺跡の中でも卓越していることから，中国の歴史書「魏志倭人伝」に記載された「一支国」の王都と特定されました。「魏志倭人伝」の中には30余りの国の名前が記されていますが，国の王都が特定されたのは原の辻遺跡だけで，当時の国の規模や構造を解明できる非常に学術的な価値の高い遺跡といえます。このため，平成12年11月には国特別史跡の指定を受けました。

本年度の範囲確認調査は，これまでの調査で確認されていた主要な遺構をさらに詳しく解明することを目的として，石田高原地区・八反地区で実施しました。

その結果，石田高原地区では，北－南に主軸を持つ新たな環濠を，微高地からは建物の柱跡と考えられる多数の小穴を検出しました。また，弥生時代後期初めには，環濠周辺の整地等が環濠の掘り直しに伴い行われたことが確認できました。八反地区では，過去の調査で田の畔の跡が確認されていましたが，今回の調査では，河川跡や溝状遺構などを検出しました。

これらの調査成果が学術的な資料として広く活用されるとともに，地域の方々の郷土を理解する資料として役立てていただければ幸いです。

最後に，発掘調査の実施に当たり，御理解と御協力をいただきました地元関係者の方々に深く感謝申し上げます。

2009年３月31日

長崎県教育委員会教育長　**寺　田　隆　士**

例　　言

1．本書は，原の辻遺跡調査研究事業に伴って実施した，平成20年度の原の辻遺跡発掘調査報告書である。

2．本事業は，遺跡範囲内の環濠や河川等の状況調査を目的として，平成14年度から実施している。

3．本書に収録した調査区の所在地は，長崎県壱岐市石田町西触字高原，芦辺町深江鶴亀触字八反である。

4．調査は長崎県教育委員会が主体となり，原の辻遺跡調査事務所が担当した。

調査組織

調査指導委員会	委員長	西谷　正	（九州大学名誉教授）
	委員	小田　富士雄	（福岡大学名誉教授）
	委員	金関　恕	（大阪府立弥生文化博物館館長）
	委員	工楽　善通	（大阪府立狭山池博物館館長）
	委員	沢田　正昭	（国士舘大学21世紀アジア学部教授）
	委員	日野　尚志	（佐賀大学名誉教授）
	委員	松井　章	（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所埋蔵文化財センター遺物調査技術研究室長）
	委員	宮本　長二郎	（別府大学客員教授）

［委員記載は50音順］

原の辻遺跡調査事務所

所長	安楽　勉	
課長	宮﨑　貴夫	
係長	四辻　義仁	
文化財保護主事	川畑　敏則	（調査担当）
文化財保護主事	林　隆広	（調査担当）

5．本書で使用した遺構・遺物の実測，製図，および写真撮影は，原の辻遺跡調査事務所が行った。

6．本書に収録した遺物・図面・写真類は，原の辻遺跡調査事務所で保管している。

7．本書で用いた座標は旧日本測地形である。

> 遺跡内に設置された既存の基準点について，平成14年４月１日の測量法の改正に伴い壱岐地区に高さの基準である国家水準点が設置され，標高の観測を再度実施したところ，0.417mの比高差があったことが判明した。したがって，平成17年度の調査および報告書から－0.417mの修正をおこなった新しい標高値を採用するものとする。

8．検出したピットについては，調査指導委員会の宮本委員に検討を依頼し，原の辻遺跡発掘調査報告書に掲載する予定である。

9．本書の執筆担当者は，本文目次に（　）で示している。

10．本書の編集は各担当の協力を受けて，川畑が行った。

本 文 目 次

Ⅰ　遺跡の立地する環境……（川畑）
　１．地理的環境……1
　２．歴史的環境……2

Ⅱ　調査に至る経緯……7（川畑）

Ⅲ　調　査
　１．石田高原地区の調査……（川畑）
　　⑴　調査概要……10
　　⑵　土層……10
　　⑶　遺構……14
　　⑷　遺物……43
　　⑸　小結……75
　２．八反地区の調査……（林）
　　⑴　調査概要……83
　　⑵　土層……83
　　⑶　遺構……85
　　⑷　まとめ……89

付　編
　・原の辻遺跡における放射性炭素年代（AMS）測定　……91
　・原の辻遺跡の自然化学分析……94

挿 図 目 次

第１図　壱岐島位置図……1
第２図　壱岐島内遺跡・史跡分布図……6
第３図　2008年度調査研究事業調査区位置図（１/6,000）……9
第４図　石田高原地区　過去の調査区と今年度の調査区配置図（１/500）……11
第５図　石田高原地区　今年度調査区周辺の弥生時代遺構（１/500）……12
第６図　石田高原地区　遺構配置図（１/250）……13
第７図　石田高原地区　１区土層図（１/40）……15・16
第８図　石田高原地区　２区土層図（１/40）……17・18
第９図　石田高原地区　３区土層図（１/40）……19・20
第10図　石田高原地区　４区土層図（１/40）……21・22
第11図　石田高原地区　５区土層図（１/40）……23・24
第12図　石田高原地区　６区土層図（１/40）……25・26
第13図　石田高原地区　１区遺構配置図（１/50）……27・28
第14図　石田高原地区　２区遺構配置図（１/50）……29・30
第15図　石田高原地区　３区遺構配置図（１/50）……31・32
第16図　石田高原地区　４区遺構配置図（１/50）……33・34
第17図　石田高原地区　５区遺構配置図（１/50）……35・36
第18図　石田高原地区　６区遺構配置図（１/50）……37・38
第19図　石田高原地区　検出ピット（抽出）（１/30）……39
第20図　石田高原地区　６区濠（08－ＳＤ１）平面図・断面図（１/50）……41
第21図　石田高原地区　２区検出箱式石棺墓（08－ＳＣ１）（１/20）……42
第22図　箱式石棺墓（08－ＳＣ１）出土管玉および掘り方出土土器……42
第23図　石田高原地区　５区　埋甕（１/10）……43
第24図　５区　出土埋甕（１／４）……43
第25図　濠（93－ＳＤ１）最上層出土土器（１／４）……44
第26図　ピット内出土土器（１／４）……45
第27図　濠（08－ＳＤ１）出土土器①（１／４）……47
第28図　濠（08－ＳＤ１）出土土器②（１／４）……48
第29図　濠（08－ＳＤ１）出土土器③（１／４）……49
第30図　落ち込み（08－落ち込み）５区出土土器①（１／４）……51
第31図　落ち込み（08－落ち込み）５区出土土器②（１／４）……53
第32図　落ち込み（08－落ち込み）５区出土土器③（１／４）……54

第33図　落ち込み（08－落ち込み）３区出土土器①（１/４）……55
第34図　落ち込み（08－落ち込み）３区出土土器②（１/６）……56
第35図　造成土（４ｂ層，４ｂ①層）出土土器（１/４）……57
第36図　包含層出土の土器（４ｃ層）（１/４）……59
第37図　包含層出土の土器（４ａ層）（１/４）……60
第38図　半島系土器・楽浪系土器……61
第39図　土製品（１/３）……63
第40図　須恵器・土師器・磁器（１/３）……63
第41図　鉄製品・骨角器（１/２）……63
第42図　石器①（１/４）……65
第43図　石器②（１/４）……66
第44図　石器③（１/４）……67
第45図　石器④（１/４）……68
第46図　石器⑤（１/２）……69
第47図　石田高原地区　濠（93－ＳＤ１）に伴う造成土の範囲……77・78
第48図　八反地区　調査区位置図（１/2,000）……84
第49図　八反地区　平面図（１/400）……85
第50図　八反１区　平面・土層図（１/80）……86
第51図　八反２区　平面・土層図（１/80）……87
第52図　八反３区　平面・土層図（１/80）……88

表　目　次

第１表　壱岐島内遺蹟・史跡一覧表……6
第２表　石田高原地区検出ピット（抽出分）属性表……40
第３表　石田高原地区出土遺物観察表　濠（93－ＳＤ１）最上層出土土器……72
第４表　石田高原地区出土遺物観察表　ピット内出土土器……72
第５表　石田高原地区出土遺物観察表　濠（08－ＳＤ１）出土土器……72
第６表　石田高原地区出土遺物観察表　落ち込み（08－落ち込み）出土土器……72
第７表　石田高原地区出土遺物観察表　造成土（４ｂ層，４ｂ①層）出土土器……73
第８表　石田高原地区出土遺物観察表　箱式石棺墓（08－ＳＣ１）出土土器……73
第９表　石田高原地区出土遺物観察表　５区出土埋甕……73
第10表　石田高原地区出土遺物観察表　包含層出土の土器（４ｃ層）……73
第11表　石田高原地区出土遺物観察表　包含層出土の土器（４ａ層）……73
第12表　石田高原地区出土遺物観察表　半島系土器・楽浪系土器……73
第13表　石田高原地区出土遺物観察表　土製品……74
第14表　石田高原地区出土遺物観察表　須恵器・土師器・磁器……74
第15表　石田高原地区出土遺物観察表　ガラス玉・金属器・骨角器……74
第16表　石田高原地区出土遺物観察表　石器……74

写 真 目 次

写真１　石田高原遺跡遠景／濠（08－ＳＤ１）／濠（08－ＳＤ１）……79
写真２　落ち込み（08－落ち込み）５区／落ち込み（08－落ち込み）３区／
造成土（４ｂ層）の状況……80
写真３　造成土（４ｂ①層）の状況／箱式石棺墓検出状況／箱式石棺墓完掘状況……81
写真４　八反１－Ｅ区河川跡／八反３－Ｅ区溝状遺構／八反３－W区落ち込み……90

Ⅰ．遺跡の立地する環境

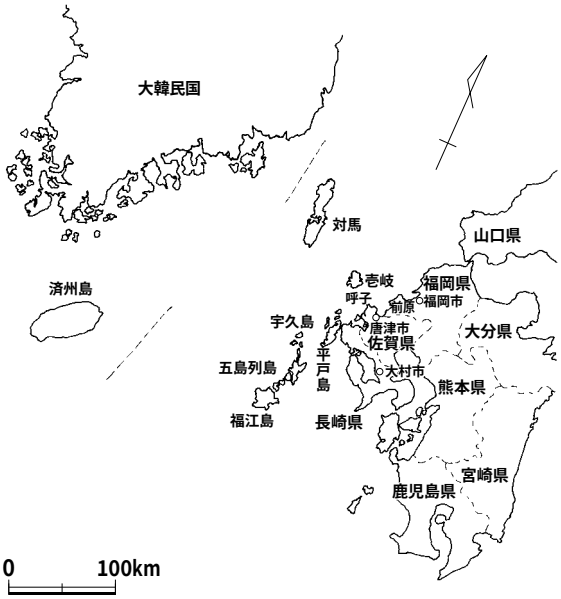
１．地理的環境

原の辻遺跡を有する壱岐は，福岡県と対馬市の間に位置し東西約15㎞，南北約17㎞で有人島４島，無人島17島からなる人口およそ31,000人の島である。2004（平成16）年に４町が合併し壱岐市となった。総面積は138.5㎢で，島が多い長崎県の中でも５番目の広さを持つ。直線で一番近い本土は，佐賀県唐津市鎮西町波戸岬で石田町海豚鼻との距離はおよそ20㎞。対馬市との距離は，厳原町神崎と勝本町タンス浦間でおよそ51㎞を測る。福岡県の前原方面や佐賀県の呼子方面は常に見ることができ，空気が澄んでいる時は北西に対馬を，南西に長崎県平戸島を，その向こうには遠く五島列島の宇久島を望むこともできる。

島の地質は，古第三期に形成された砂岩・頁岩からなる勝本層群の上に，新第三期以降に噴出した玄武岩が主体となる火山岩が覆い，侵食が進んだ溶岩台地を形成している。また，島内で最も高い山は標高213ｍの岳の辻であり，低平な溶岩台地と併せ起伏に乏しい地形を形成している。このことは，平地が少ない長崎県の島にしては珍しく，水産業と並び農業が重要な産業である要因となっている。全面積に対する耕地面積の割合は，壱岐島は28.4%に対し県平均が12.4%，壱岐島と同じように平地が多い福江島を有する五島市が12.3%，急峻な山が連なる対馬の場合は1.3%である。

他地域への往来は福岡県福岡市，佐賀県唐津市，対馬市間に船便が通っているが，長崎県本土と直接結ぶ航路は無く，航路を利用する場合は同じ県でありながら他県を通過しなければならない。この他に長崎県大村市にある長崎空港と結ぶ空路もあるが，交通手段の中心は航路であり，経済的にも文化的にも福岡市との結びつきが深い。

原の辻遺跡は，「深江田原」と呼ばれる県内第一の広さを持つ沖積平野の中に舌状に張り出した標高６ｍ～18ｍの台地を中心に，100haの広さを持つ。また，台地の北には島内最長の流路を持つ幡鉾川が流れ，1.5㎞下ると内海（うちめ）湾に至る。



第１図　壱岐島位置図

２．歴史的環境

壱岐島の歴史について概観したい。壱岐島において，人間が活動した痕跡は後期旧石器時代にさかのぼる。原の辻遺跡を主として興触遺跡，カラカミ遺跡，名切遺跡など島内の数ヶ所で，ナイフ型石器・台形石器・細石刃等が出土しているが，いずれも姶良丹沢火山灰（AT）降灰以降のものである。原の辻遺跡から出土した台形石器は，AT 降灰直後のものであることが分かり，当時の石器組成の中でも重要な器種であることから「原の辻型台形石器」の名称が付けられている。また，原の辻遺跡からはナウマン象の臼歯が数点出土しているが，旧石器との共伴は確認されていない。

縄文時代の遺跡は24ヶ所が確認されているが，内容が詳しく分かっている遺跡は少ない。代表的な遺跡としては，鎌崎遺跡，名切遺跡，松崎遺跡が挙げられる。いずれも島の西海岸の潮間帯に立地する。鎌崎遺跡は，1977（昭和52）年に壱岐郷土館が中心となり継続的に表採が続けられ整理が行われた。その結果，逆刺を持つ10㎝を超える玄武岩製の大形の石銛や，同じ玄武岩製でこれも10㎝はある大形のスクレイパーを多数確認した。大形のスクレイパーは，全体を直角三角形状に整形して斜辺にあたる一方の側辺をわずかに内湾させ，底辺にゆるい弧状の刃部を作り出す特徴的な形をしており，「鎌崎型スクレイパー」と呼ばれている。これらの大形石器は大型の海獣を捕獲し解体するための道具と考えられ，西北九州や朝鮮半島の海岸遺跡から出土している。名切遺跡は壱岐島において初めて発掘調査が行われた縄文時代の遺跡である。鎌崎遺跡の傍300ｍに位置する。調査では縄文時代中期から晩期に造られた貯蔵穴30基が確認され，底面からカシの実など堅果類が出土した。遺跡内に湧水があることから，これらの貯蔵穴は堅果類のアク抜きとして利用されたものと思われる。松崎遺跡では，それまで壱岐では確認されていなかった縄文時代早期の押型文土器片が出土した。この他に幾何学的細線刻文を持つ櫛目文土器も出土し，縄文時代前期の段階からすでに朝鮮半島との交流が行われていたことが明らかになった。

弥生時代の遺跡は約60ヶ所が知られているが，その中でも遺跡の規模や遺物の量・内容において卓越している遺跡が原の辻遺跡である。原の辻遺跡の概要については「Ⅱ．調査に至る経緯」をご覧頂きたい。東亜考古学会等の調査で，原の辻遺跡と並び古くから知られていた遺跡がカラカミ遺跡である。カラカミ遺跡の集落は，原の辻遺跡が集落を形成する時期とほぼ同じ頃作られている。環濠に囲まれた集落で，出土する土器の多さや金属器・朝鮮半島系の土器・ト骨の出土など原の辻遺跡と似ている様相を呈する面もあるが，漁業に関わる鉄製釣り針や鯨骨製アワビ起こしなど特徴的な遺物が多く出土することから，農業に関係する遺物を多く出土する原の辻遺跡とは古くから対比されてきた。現在は近世の新田開発により埋められて海岸まで約２㎞と離れてしまったが，当時はカラカミ遺跡がある丘陵のすぐ下まで海が入り込んでおり，生産に関わる遺物の違いは，遺跡の立地条件の違いが大きいものと思われる。原の辻遺跡やカラカミ遺跡とほぼ同じ時期に成立した遺跡が車出遺跡である。車出遺跡は，原の辻遺跡から５㎞西に離れた幡鉾川の上流に位置する。この遺跡は，1991（平成３）年の圃場整備に伴う緊急調査により初めて周知された。その後の調査で，土器溜まりの中から出土した土器が完形の丹塗磨研土器であったことや，後漢鏡片が火を受けた状態で出土したこと，近くに祭祀遺跡として知られている鉢形山遺跡があることなどから，祭祀に強く関わる遺跡であることも考えられる。遺跡の性格については今後調査が進むことで明らかになるであろう。この他に護岸工事の際に中広銅鉾３本が出土した天ヶ原セジョウ遺跡が挙げられる。出土状況が明らかでないが，遺跡が島の北端の海岸部に位置することから，結界もしくは航海の安全祈願のために埋納されたものと思われ

る。このように，魏志倭人伝に一大（一支の誤り）國として登場し「・・・南北に市糴す」と記された弥生時代の壱岐の遺跡からは，この短い文に記されたように玄界灘を南に北に繰り出す人々の情景を思い浮かべることができる。

壱岐島には古墳が現在265基確認されている。長崎県内の古墳の総数はおよそ500基であるので，県内の古墳の半数以上が壱岐島に集中していることになる。古墳の数に関しては，江戸時代中期の1742（寛保２）年に編集された『壱岐国続風土記』に338基の古墳の存在が記されていることから，近世以降多くの古墳が破壊されたものと思われる。古墳は島内の全域に分布しているが，集中している箇所もある。中でも島中央部の国分から亀石にかけての半径１㎞の範囲には，大規模古墳を含む90基以上の古墳が築かれている。壱岐における最も古い古墳は，５世紀後半築造と考えられる竪穴系横口式石室を持つ直径14m，高さ２ｍの小型円墳である大塚山古墳で，深江田原を見下ろす丘陵上に位置する。深江田原に位置する原の辻遺跡の集落は４世紀半ばには解体するが，原の辻遺跡を離れた人々が依然として深江田原の周辺で活発に活動をしていたことが窺える。しかし，壱岐島においては古墳時代前期から中期にかけての古墳を含めた遺跡数が少ないためにこの時期の状況は詳しくは分かっていない。古墳が次々に作られるのは６世紀後半からである。中でも前述した島中央部の古墳集中域には県下最大の円墳である兵瀬古墳（直径約53.5m，高さ約13m），県内で最大の前方後円墳である双六古墳（全長約91ｍ）をはじめ，笹塚古墳・鬼の窟古墳・掛木古墳（以上円墳），対馬塚古墳（前方後円墳）などの大型古墳が築かれている。これらの古墳は墳丘や石室の規模が大きいばかりでなく副葬品の質や内容も豊かで，朝鮮半島や中国大陸からもたらされた物も多く含まれている。大型古墳をはじめ壱岐に古墳が集中している理由については，527年に起こった朝廷と筑紫国磐井の戦いと，それに続く663年の白村江の戦い，この２つの争乱における新羅と朝廷とのかかわりにおいて，壱岐島の有力者の存在が重要であると朝廷側が認識したことの結果であると考えられている。

このように，対外的にも重要であると判断された壱岐島は，律令制度下においても下国ではあるが一国として扱われる。そのため，国府が置かれ国分寺が設置された。国府の所在地は大規模古墳が集中する国府や深江田原に隣接する湯岳興触地区が挙げられているが，特定されるまでには至っていない。国分寺については，在地豪族であった壱岐直の氏寺を国分寺として転用し，嶋分寺と呼ぶこと。また，通常国分寺には僧20名が置かれているが壱岐嶋分寺の場合は僧５名を置いたことが『延喜式』（玄蕃寮）に書かれている。壱岐嶋分寺についての研究は，地元の研究家山口麻太郎氏により詳しく進められ，氏は古文献・字図・現存する礎石や採取された古瓦より「国分」の字名が残る一帯を嶋分寺の跡として比定した。その後，この一帯を史跡公園として整備する計画が持ち上がり，範囲確認調査が1987（昭和62）年度から1992（平成４）年度まで実施された。調査の結果，版築基壇を持つ建物３棟を始め僧坊関係と思われる施設跡等が多数確認されたが，通常の国分寺に見られる伽藍配置は見られず，建立時の事情が反映している。壱岐嶋分寺が官寺として機能していた時期は，出土遺物から８世紀後半から11世紀初頭までと考えられ，官寺として機能しなくなる理由として，律令制の崩壊に加え壱岐島に甚大な被害をもたらした11世紀初頭の「刀伊の入寇」が挙げられる。また，嶋分寺の調査では平城様式の軒丸瓦と軒平瓦が出土した。当時九州各国で使用された瓦は太宰府系の瓦であることから，大型古墳築造の頃から引き続き壱岐島の豪族が中央と強い結びつきを持っていたことが窺える。

この他に，古代の遺跡として串山ミルメ浦遺跡と原の辻遺跡大川地区が挙げられる。串山ミルメ浦

遺跡は，壱岐島最北端の串山半島の砂丘上に位置し，現在はイルカパークになっている。この遺跡からは卜占に使用された海亀の亀甲や大量のアワビの殻が出土した。壱岐では，原の辻遺跡とカラカミ遺跡から弥生時代の卜骨は出土しているが亀卜は確認されていない。このことから，壱岐島では卜占が代々引き継がれながらも卜骨から亀卜へと変化した事が考えられる。また，『延喜式』には朝廷に出任した卜部について記されている。それによると「対馬から10人，壱岐から５人，伊豆から５人の卜術有長者を取って卜部の事に任ず」とあり，対馬・壱岐・伊豆の卜部が三国卜部と呼ばれ，朝廷から重用されたことが窺える。この亀卜であるが，対馬では現在も神事として伝承されているが，壱岐島では絶えてしまっている。また，大量に出土したアワビの殻から，この地が調として朝廷に献上するアワビの加工場であったことが考えられる。

原の辻遺跡・大川地区は原の辻遺跡の南側に位置し，ここからは越州窯系青磁，白磁Ⅰ類，長沙窯系水注，初期イスラム陶器などの初期貿易陶磁約100点や国産の灰釉陶器，緑釉陶器など約60点が出土している。また，近くからは古代の道路状遺構が検出され木簡も出土している事から，官衙的な性格を持つ遺跡と位置づけられている。

中世の壱岐島の人々にとって最大の出来事は，元寇と呼ばれる鎌倉時代の文永・弘安の役であろう。島内には戦死者を埋めた「千人塚」，住人が逃げ込んだ「かくれ穴」等，口碑による史跡が多く残されている。対馬も同じように元寇によって被害を受けているが，深い山がない壱岐にあってはさらに多くの住民が被害にあったことが容易に窺える。

室町時代の壱岐の情勢を記した資料に朝鮮王朝の申叔舟が著した『海東諸国記』（1471）がある。この書の「一岐島」の部分には，「郷七。水田六百二十町六段。人居は陸里十三，海浦十四なり。東西は半日程，南北は一日程なり。志佐・佐志・呼子・鴨打・塩津留分治す。市は三所有り。水田と旱田は相半す。土宜は五穀。収税は対馬の如し。」と記されている。この頃壱岐は松浦党五氏（志佐・佐志・呼子・鴨打・塩津留）によって分割統治されており，壱岐島内に13里と14浦の地名があげられ，戸数の総計が2060余戸と記されている。

原の辻遺跡の西約１㎞に位置する中世の遺跡として周知されていた覩城の発掘調査が1996（平成８）年と2005（平成17）年に行われた。『海東諸国記』によると，「唯多只（湯岳）郷，志佐代官源武，之を主（つかさど）る。戊子年（1468），図書を受け，歳遣一，二船を約す。書に，一岐守護代官真弓兵部少輔源武と称す。」とあり，覩城の所在する湯岳郷には志佐氏（長崎県松浦市志佐町を統治）の代官真弓源武氏がいて1468（応仁２）年に図書を受けて，年に１～２船の交易ができたことが記してある。出土した陶磁器には朝鮮産製品が多く含まれていたが，約40点のベトナムやタイ産の陶磁器も認められた。また，大型銭の出土からも活発な交易が行われていたことが窺える。この覩城であるが，1472（文明４）年肥前上松浦（佐賀県唐津市）の岸岳城主である波多氏が壱岐を攻めた際に，松浦党五氏の代官が覩城で防戦し敗北をしている。この戦いの後壱岐島は波多氏の所領となったが，内紛により家臣であった日高氏の所領となったものの後に平戸松浦氏へ差し出したために，幕藩体制が終わるまで平戸松浦氏が統治した。

全国を平定した豊臣秀吉によって松浦氏は壱岐島を含め領地を安堵された。その豊臣秀吉が引き起こしたのが文禄・慶長の役と呼ばれる２度にわたる朝鮮侵略である。朝鮮への出兵が始まる１年前の1951（天正19）年，平戸藩主松浦鎮信は秀吉の命を受け壱岐島の北端の勝本の地に勝本城を作った。この城には1592（文禄元）年から1598（慶長３）年までの７年の間500名の兵士が駐屯し，食料・武

器・軍馬等の兵站基地となった。現在は枡形虎口とその左右の石垣が残っている。前線に近く住む住民にはいつの時代でも他所よりも厳しい生活が強いられた。文禄・慶長の役の壱岐島では，15歳以上60歳以下の男はすべて軍夫としてかり出されている。

江戸時代になると松浦氏による計画的な統治が行われるようになる。壱岐における治世の拠点となった郷の浦の亀尾城には城代を置き，その下には２名の郡代を置きそれぞれが壱岐郡と石田郡を担当した。郡代の下には代官４名がつき24の村を監督した。さらに各村には庄屋が置かれ，その下の触（ふれ）（集落内の小地域）ごとに朸頭（さすがしら）（百姓頭）をつけた。漁業者に対しては，島内各地に散らばっていたのを，郷ノ浦や勝本浦など８浦に集住させ，郷ノ浦には各浦を監督する浦役を置き，浦役の下には各浦に浜使が，さらにその下には浦役人が置かれた。このように，触，浦を小単位として統治が進められたのである。

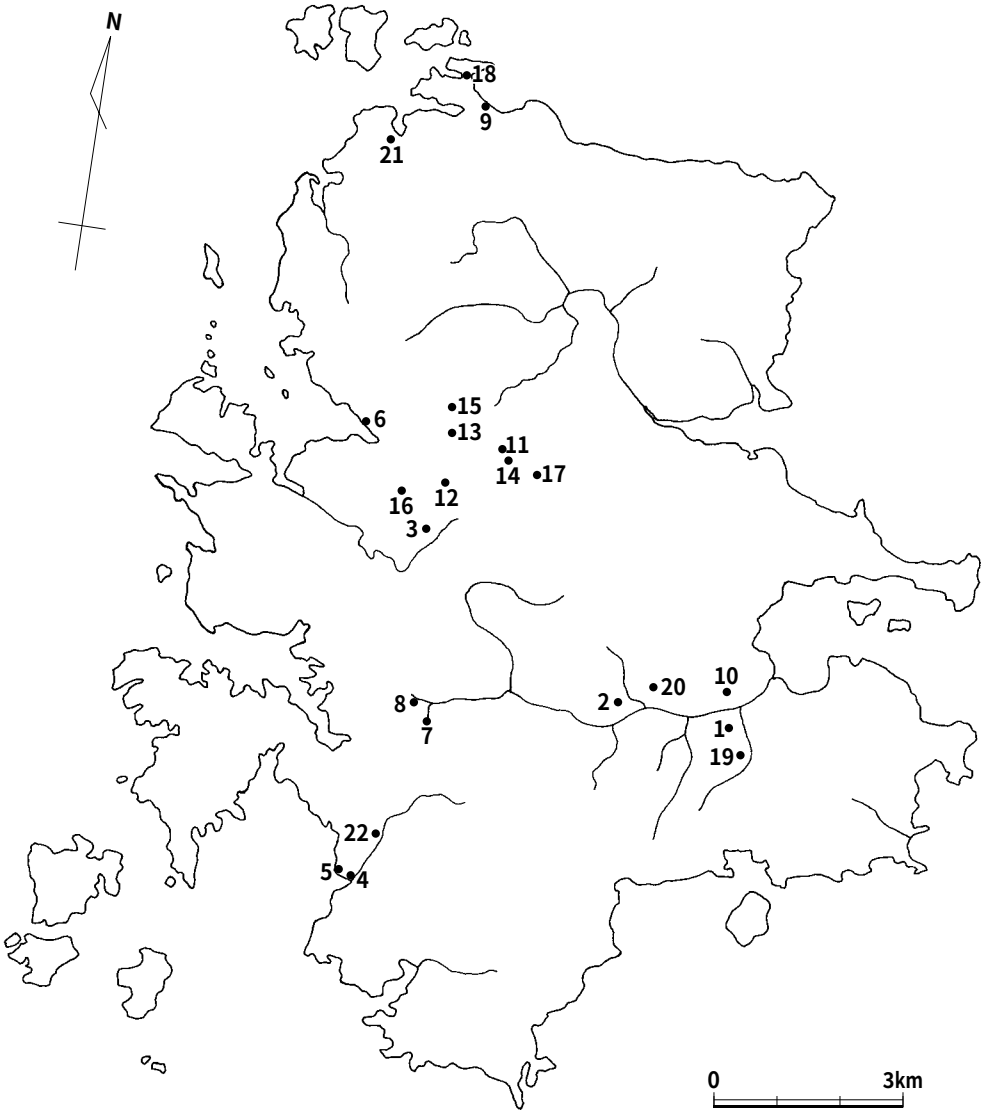
秀吉による朝鮮出兵以来，断絶していた日本と朝鮮の国交は，対馬藩の尽力により1605年（慶長10）には回復した。その後，将軍代替わりなどの慶賀の際に朝鮮国王の国書を奉じた使節が派遣された。これが朝鮮通信使である。朝鮮通信使は1607（慶長12）年に始まり1811（文化８）年までの12回行われた。壱岐における通信使の迎接所は勝本浦に置かれた。現在勝本浦には通信使に関わる跡として対馬藩壱州屋敷跡や通信使迎接所跡がわずかに残るだけである。1719（享保４）年に製述官として随行した申維翰が記録した『海遊録』には，「浦口は，水が浅くて入れない。舟を連ねて陸橋を作り，・・・岸をはさんで見物する男女は，山一面に簇立（ぞくりつ）し，紅衫（こうさん）を着たものが過半で，青や白の斑斕衣（はんらんい）（あや模様の衣）も混じっている。まさに，春林に茂る百花が媚顔を競っているようだ。」と，勝本浦と見物客で賑う様子を記している。また同書では「浦を隔てて民屋わずかに百余戸。黍や豆が疇（はたけ）に満ち，あるいは稲田には穂を出す。・・・倭の言によれば，土地が上々で，民がみな農につとめ，飢える者がないという。海中の孤島とはいえ，形は釜を覆したようなところすら必ず過半は開墾し，新穀がよく繁茂している。」と農業について見聞したことを記している。

江戸時代の壱岐は鯨組の基地がおかれたことでも有名である。壱岐での捕鯨は，1493（明応２）年頃紀州より伝えられたと考えられており，江戸時代を通じて勝本浦を中心に盛んに鯨漁が行われた。鯨組により浦は栄え，運上銀と呼ばれた御用金は平戸藩の重要な税収となった。また，鯨組の組主は島内の海岸部で新田開発を行い島内に多くの新田を残した。

明治になり幕藩体制が終わると平戸藩は平戸県となりその後長崎県となった。そのため，平戸藩の統治にあった壱岐島はそのまま長崎県に属することとなり現在に至っている。1970（昭和45）年に石田村が町政を施行後，勝本町，芦辺町，石田町，郷ノ浦町の４ヶ町となったが2004（平成16）年に４町が合併し壱岐市となった。第２次世界大戦においては本土を守る前線として位置づけられ，対馬と同じように巨砲を据えた砲台跡が今も残る。戦後，1968（昭和43）年には壱岐対馬国定公園に指定され，美しい景観，豊かな海産物，そして弥生時代や古墳時代を中心とした史跡の残る島として注目されている。

【参考文献】

中上史行　1995『壱岐の風土と歴史』
長崎県教育委員会　1998『原始・古代の長崎県』通史編



第２図　壱岐島内遺跡・史跡分布図

第１表　壱岐島内遺跡・史跡一覧表

番号	遺　跡　名	番号	遺　跡　名
1	原の辻遺跡（国指定特別史跡）	12	双六古墳（「壱岐古墳群」で国指定史跡）
2	興触遺跡	13	笹塚古墳（「壱岐古墳群」で国指定史跡）
3	カラカミ遺跡	14	鬼の窟古墳（「壱岐古墳群」で国指定史跡）
4	名切遺跡	15	掛木古墳（「壱岐古墳群」で国指定史跡）
5	鎌崎遺跡	16	対馬塚古墳（「壱岐古墳群」で国指定史跡）
6	松崎遺跡	17	国分寺
7	車出遺跡	18	串山ミルメ浦遺跡
8	鉢形山遺跡	19	原の辻遺跡（大川地区）
9	天ヶ原セジョウ遺跡	20	覩城（とじょう）
10	大塚山古墳	21	勝本城
11	兵瀬古墳（「壱岐古墳群」で国指定史跡）	22	亀丘城（かめのおじょう）

Ⅱ．調査に至る経緯

原の辻遺跡は，壱岐在住の小学校教員松本友雄によって1904～1905（明治37～38）年頃発見された。その後1927（昭和２）年，松本は，これまでの調査成果をまとめる形で原の辻遺跡を中央の学会誌に紹介し，原の辻遺跡の存在が全国に知られることとなった。

1939（昭和14）年，壱岐中学校教員であった鴇田忠正は，耕地整理によって削られた原の辻台地北端の崖面から３層の弥生時代の遺物包含層を確認し，各層の土器を北部九州の弥生式土器編年と比較することで検討を行い，中期から後期へ移行する過程の土器と位置づけ，1944（昭和19）年に「長崎県壹岐郡田河村原の辻遺蹟の研究」としてまとめた。

戦後，1951（昭和26）年から1961（昭和36）年にかけて数度の調査が東亜考古学会によって行われた。その中の成果から，水野清一・岡崎敬氏により「原の辻上層式・下層式」の様式が設定された。この東亜考古学会の調査以来原の辻遺跡の調査は行われていなかった。原の辻遺跡の調査が再び開始されるのは1974（昭和49）年からである。

当時壱岐では，ポンプによる地下水の汲み上げが可能になり，饅頭状に盛り上げた畑（「饅頭畑（まんじゅうばたけ）」と呼ばれ壱岐の名物であった）が水田に変えられていた。この土地基盤整備による削平工事によって，石田大原地区で甕棺片や石棺片が散乱しているという連絡が石田町教育委員会を通して長崎県教育委員会へ報告され，緊急発掘調査が実施された。この調査では，1,000㎡の範囲に甕棺51基，石棺19基以上，溝４条を確認し，副葬品として戦国式銅剣，鉄製品，トンボ玉，ガラス小玉，勾玉，管玉などが出土した。

この緊急調査の結果を受けて長崎県教育委員会は1975（昭和50）年から３年間にわたって範囲確認調査を行った。範囲確認調査では，大川地区，原の久保Ａ・Ｂ地区の新たな墓域やＶ字状の溝を確認し陶質土器や中国鏡，有鉤銅釧が出土した。この範囲確認調査から，遺跡が台地一帯に広がる事が判明し，出土した遺物からは大陸との深い関係が認められた。

1990（平成２）年度からは，幡鉾川流域総合整備事業が計画され，それに伴う発掘調査が台地周辺の低地部を中心に行われた。その結果，遺跡は100haの範囲に及び，台地を多重の環濠で囲む大規模な環濠集落であることが判明した。このことにより，原の辻遺跡が『魏志倭人伝』に記載された「一支国」の国邑であることが判明した。1995（平成７）年には「原の辻遺跡調査指導委員会」により原の辻遺跡が『魏志倭人伝』に記された「一支国」の「王都」であることが確定した。『魏志倭人伝』に記載された国の中で王都が判明した国は初めてであり，その後の船着き場跡などの重要遺構の発見とも併せ，1997（平成９）年に国史跡に指定された。更に，2000（平成12）年には，国の特別史跡に指定され，現在壱岐市により整備が進められている。

2002（平成14）年度からは，これまでに行われた調査を補完する目的で，調査研究事業に伴う発掘調査を継続的に実施している。今年度の調査対象区は，高原地区，八反地区の２地区とした。

丘陵の北東低地部に位置する石田高原地区は，過去の調査から複数の環濠があることが確認されて

おり，平成５年，平成14年，平成15年，平成16年，平成18年，平成19年と６度にわたり調査が実施されている。当地区北側の丘陵際部分については，これまでの調査で環濠間のつながりもほぼ解明できている。そこで今年度の調査は，昨年度に続き当地区南側の丘陵際部分の環濠の様相および，昨年度の調査で確認したピット群の広がりについて解明することを目的として実施した。

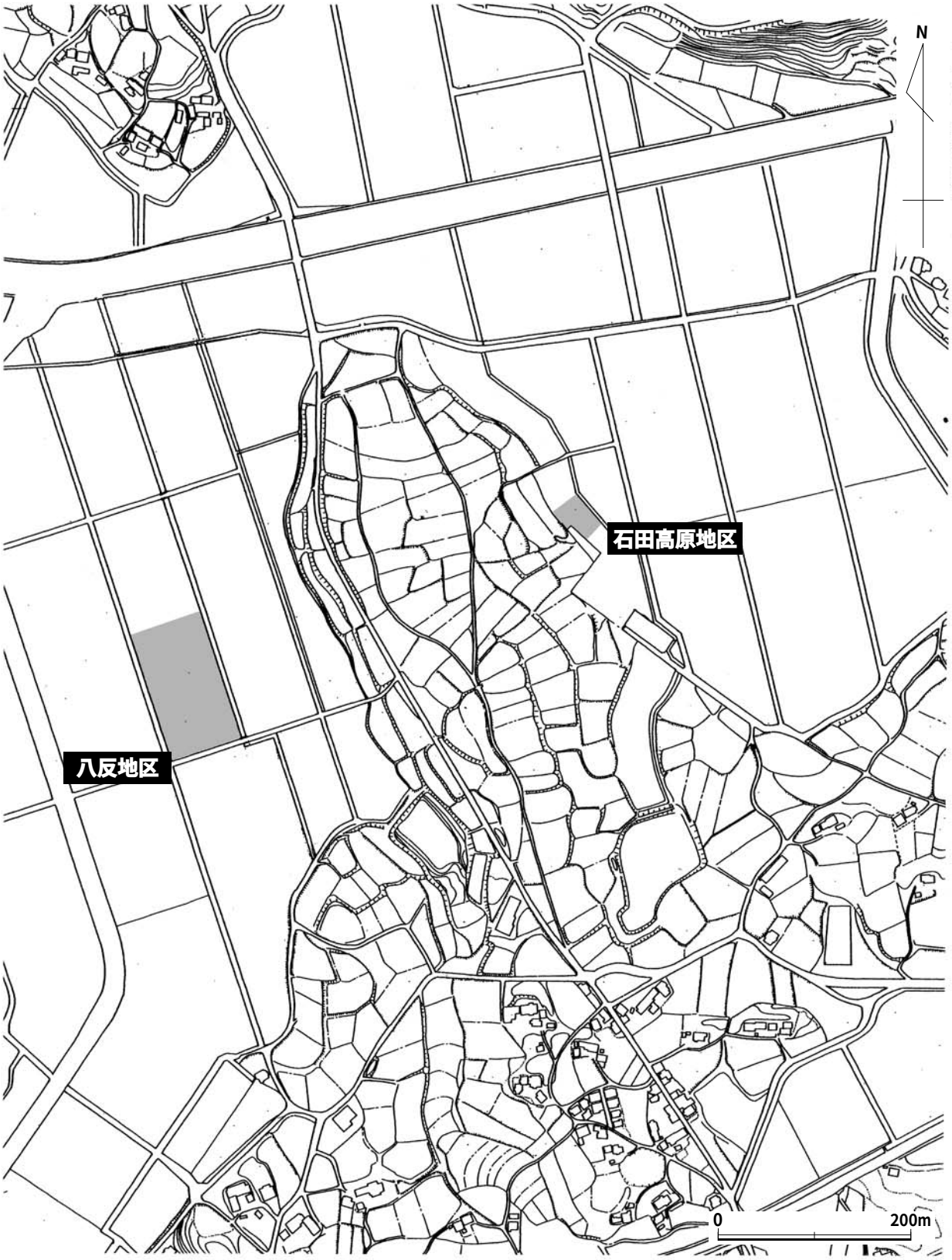
調査は，2008（平成20）年８月25日から12月15日まで実施した。

八反地区では，過去の調査で畦畔や水田跡が検出されており，台地際低地における土地利用の状況を確認することを目的として実施した。

調査は2008（平成20）年10月20日から12月15日まで実施した。

【参考・引用文献】

・塩屋勝利　2005「原の辻遺跡　総集編Ⅰ」『原の辻遺跡調査事務所調査報告書 第30集』長崎県教育委員会
・高野晋司　2005「原の辻遺跡　総集編Ⅰ」『原の辻遺跡調査事務所調査報告書 第30集』長崎県教育委員会
・寺田正剛　2006「原の辻遺跡」『原の辻遺跡調査事務所調査報告書 第31集』長崎県教育委員会
・宮崎貴夫　2008「原の辻遺跡―壱岐に蘇る弥生の海の王都―」『日本の遺跡』32　同成社



第３図　2008年度調査研究事業調査区位置図（１/6,000）

Ⅲ．調　　査

１．石田高原地区の調査

⑴　**調査概要**（第４図～第６図）

調査区は６箇所設定し，北東調査区を１区，北西調査区を２区。北東→北西の順番で１区から６区の番号をつけた。なお，1993（平成５）年の調査時は地形測量に座標を使っておらず，後年の地形図との合成に際し不具合が生じることが多々あった，そこで1993年に検出した遺構の位置を，座標を使い再度取り直すために，1993（平成５）年の調査区とは重複部分を多く取った。

調査は，重機を使い表土を除去した後人力で掘削を行った。１区からは，昨年度の調査で確認したピット群の続きを53基検出した。

２区からは，幼・小児用の箱式石棺墓１基を検出した。また，１区からの続きのピット群も28基検出した。この区は1993（平成５）年の調査区と西側部分で重複しており，当時の調査区外の部分で未確認であった濠（93－ＳＤ１）の東側の立ち上がりを確認した。

１区の南に設定した３区からは，１区から続くピット群79基と，東壁際からは調査区外東側に広がると思われる不整形の落ち込み（08－落ち込み）を検出した。この落ち込みは，３区の南側に設定した５区からも一部確認した。

４区も２区と同じように，1993（平成５）年の調査区と西側部分で重複するように設定し，当時の調査区外にあたり未確認であった濠（93－ＳＤ１）の東側の立ち上がりを確認した。

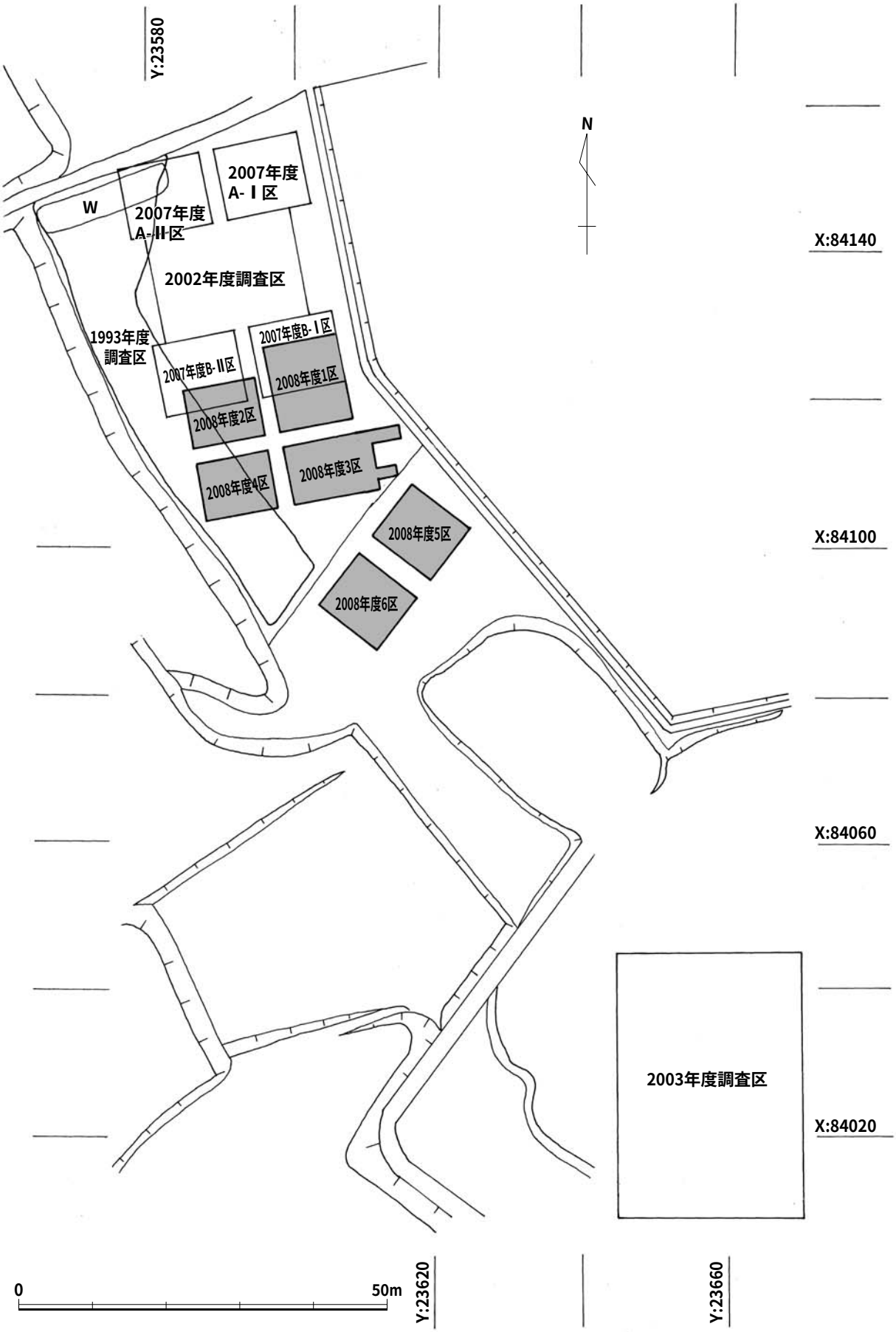
５区では，北壁際から３区から続く不整形の落ち込み（08－落ち込み）を検出した。また，その南からは１～３区ほど密ではないが，ピット群を26基検出した。

６区からは主軸を北－南に持つ濠（08－ＳＤ１）を検出した。６区内に濠の始点（終点）を持ち北へ伸びるが，３区・５区で検出した落ち込み（08－落ち込み）の手前で止まる全長10mほどの短い濠と思われる。調査区の南半分からは整地層を確認した。

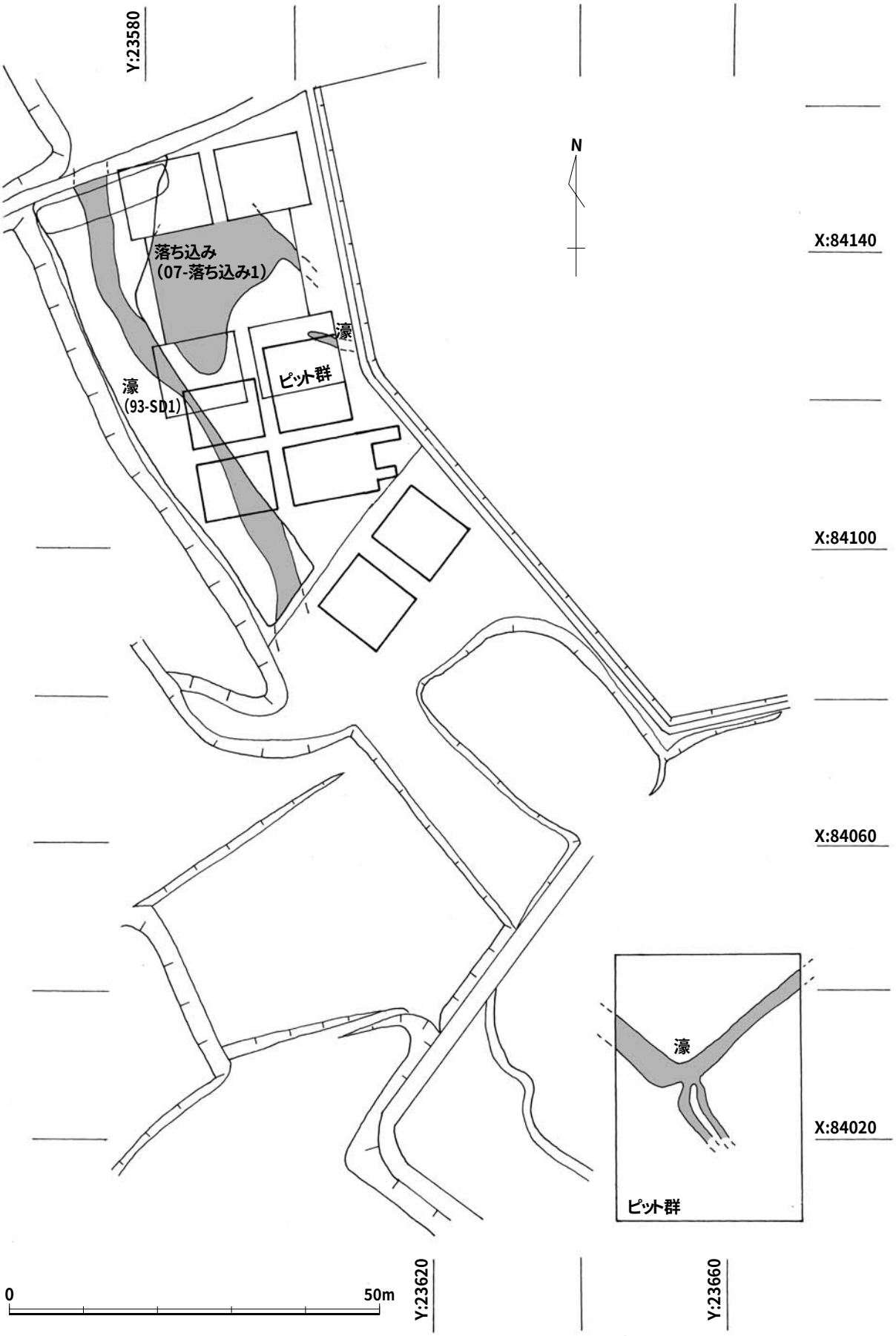
２区・３区・４区・６区からはセクションおよび平面でこれまでの調査では見られない土層を検出した。５層をベースにした粘質土で，濠（93－ＳＤ１）の東に濠とほぼ平行するように広がっており，弥生時代後期の濠の掘り直しに伴う造成土と思われる。

⑵　**土層**（第７図～第12図）

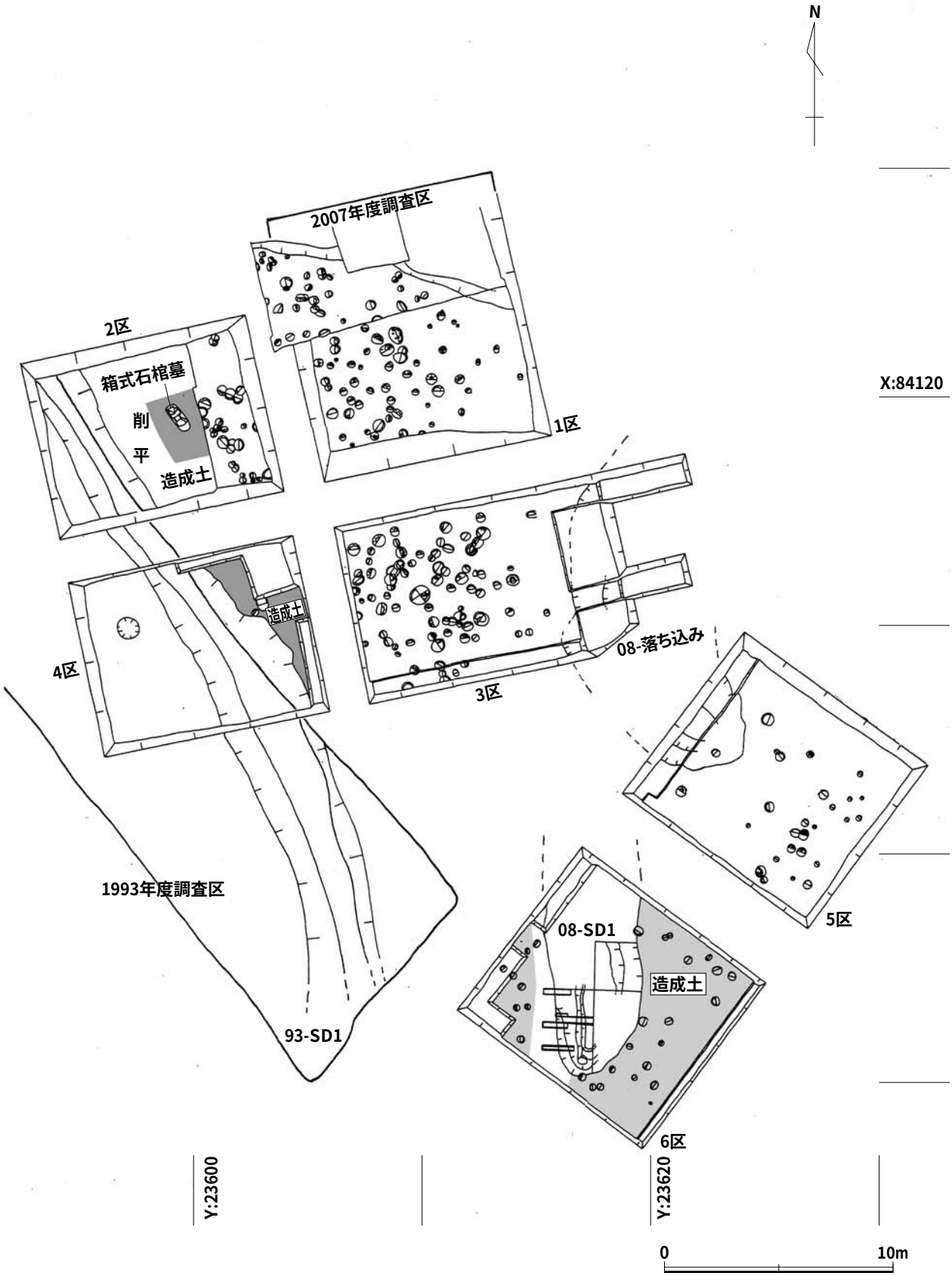
１層は表土である。２層は床土である。３ａ層は黄褐色粘質土である。きめの細かい粘質土で，近世の陶磁器片が含まれる。３ｂ層は砂粒をわずかに含みザラつく灰黄褐色粘質土である。弥生土器片の量が増えるが摩滅しているものが多い。近世の陶磁器片も含まれるが３ａ層との明確な時期差は認められない。３ｃ層は灰褐粘質土である。小礫や土器片，焼土粒が増え硬くしまっている。中世の陶磁器片が見られる。３ａ層・３ｂ層は鉄分が多く１日で茶褐色に変色する。４ａ層は黒褐粘質土である。炭化物粒，焼土粒，土器片を多く含む弥生時代後期の包含層である。４ｂ層は造成土である。５



第４図　石田高原地区　過去の調査区と今年度の調査区配置図（１/500）



第５図　石田高原地区　今年度調査区周辺の弥生時代遺構（１/500）



第６図　石田高原地区　遺構配置図（1/250）

層を構成している明黄褐粘質土，灰白粘質土から成る層で，弥生時代の土器片を多く含む。４ｃ層はにぶい黄褐粘質土で，炭化物粒，焼土粒，土器片を多く含む弥生時代中期の包含層である。弥生時代後期の包含層である４ａ層と比べると良くしまっている。５層はにぶい黄色土である。固くしまった粘質土で無遺物層である。６区では砂粒を含みザラつくが，他区では粘土から成る。

⑶ 遺構

今回の調査では，２条の環濠，１箇所の落ち込み，ピット群，箱式石棺墓１基，埋甕１基，造成土を確認した。環濠（93－ＳＤ１）を除き今回の調査で新たに検出した遺構である。

①ピット群（第６図，第13図～第15図，第18図，第19図・第２表）

第１区，３区，６区で多く検出した。93－ＳＤ１，08－ＳＤ１と08－落ち込みに挟まれた狭い空間に集中的に展開する。覆土は大きく３種類に分かれ，弥生時代中期・弥生時代後期・古墳時代以降と３時期のものが混在していると思われる。ピットの切り合いも見られ，建物の建替えが行われたことが窺える。断面を図示したピットは，自然化学分析の試料を採取したピットや出土した土器が図化できたものを抽出した。

②濠（08－ＳＤ１）（第６図，第12図，第18図，第20図）

６区から検出した。６区内に濠の始点（終点）を持ち端部は船底状を呈する。幅４ｍ・深さ1.5mを測り，断面はＵ字形である。北へ伸びるが，３区・５区で検出した落ち込み（08－落ち込み）の手前で止まる全長10mほどの短い濠と思われる。覆土は８層に分かれ，遺物は弥生時代後期後半の土器を主体とする。

③整地層（第６図，第12図）

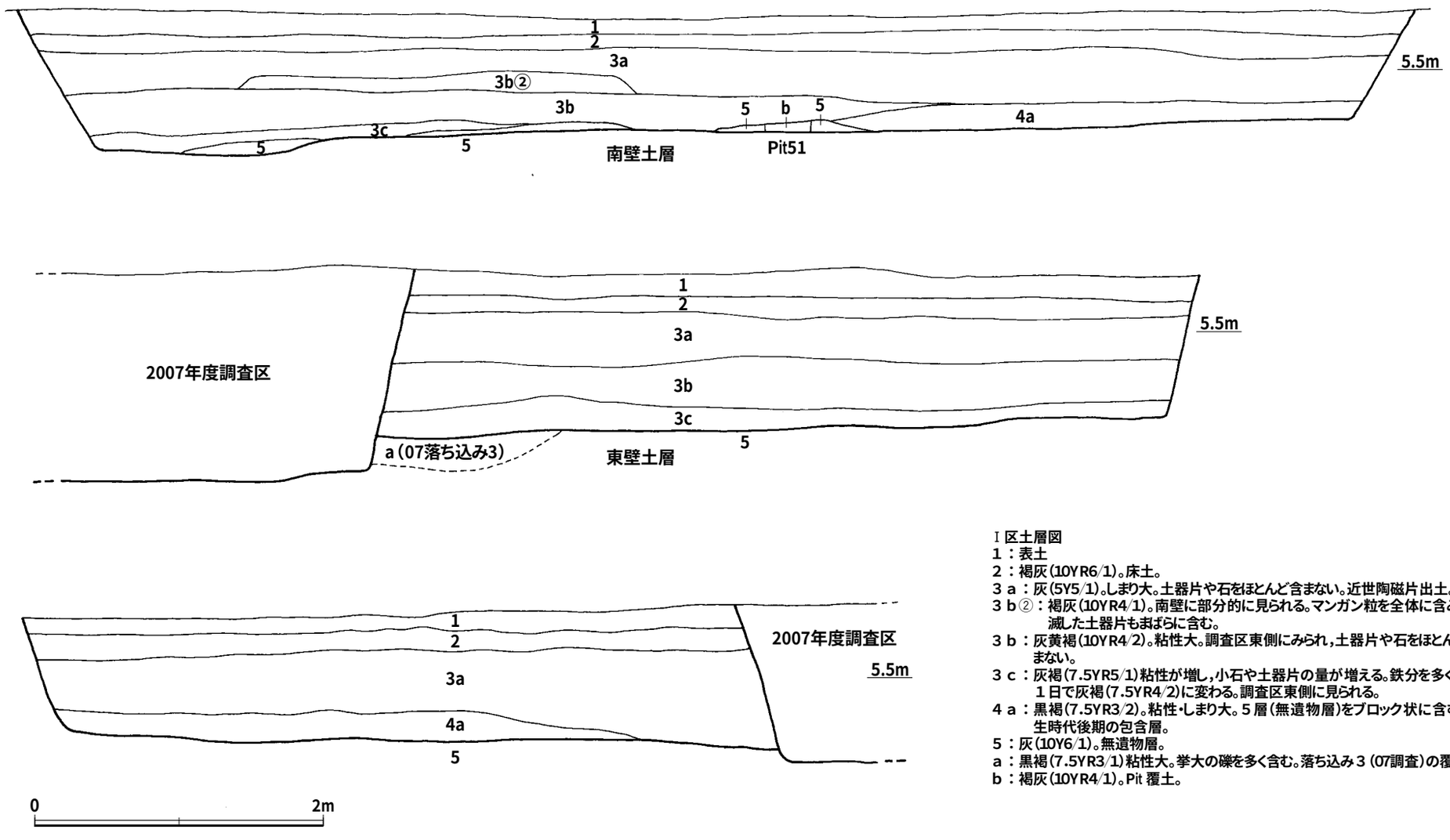
６区で確認したもので，弥生時代中期の包含層の下にある粘質土をブロック状に含む褐色土である。弥生時代中期の包含層の上に乗る。掘削を行ったのは南壁際と北壁際の一部のみのため詳細については不明であるが，後述する弥生時代後期のものと思われる造成土と同一の可能性もある。

④落ち込み（08－落ち込み）（第６図，第９図，第11図，第15図，第17図）

３区・５区から検出した。５区内に南の立ち上がりを持ち，西側の立ち上がりが３区で見られることから，この落ち込みは北東方向に向かって調査区外へ広がっていくと推測される。検出状況からこの遺構は，南側は急な傾斜で，西側は緩やかな傾斜で落ち込んでいると思われる。下層からは弥生時代中期後半の土器のみが出土したが，多くの土器が出土した中層より上位では弥生時代後期後半の土器が主体となる。また，この遺構の北西15mの地点には弥生時代後期中葉に廃棄された「溜井」のような機能が想定される遺構（07－落ち込み１）がある。

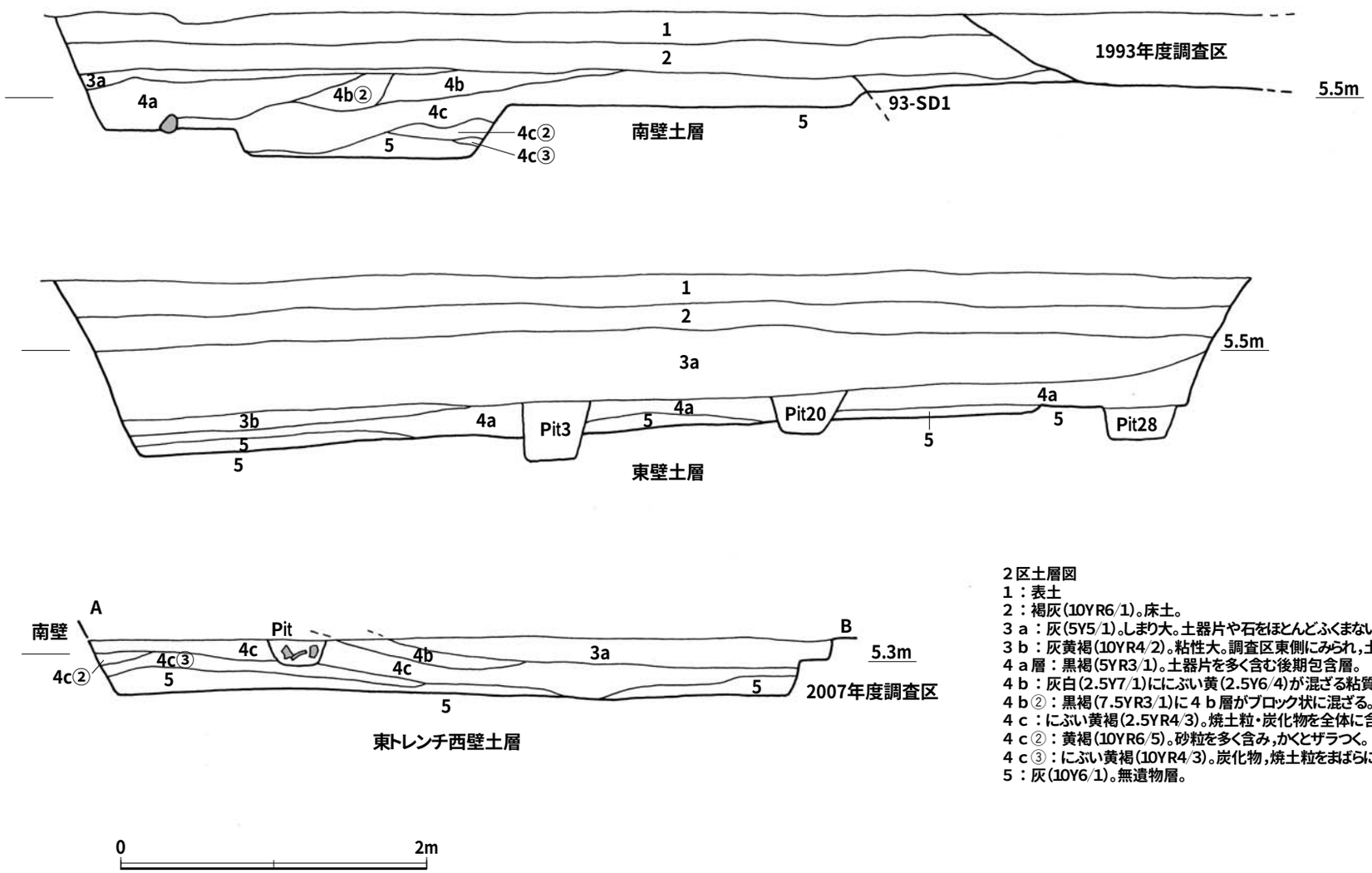
⑤濠（93－ＳＤ１）（第５図，第６図，第14図，第16図）

1993（平成５）年に県営幡鉾川流域総合整備事業に関わる緊急発掘調査により確認された濠である（報告では１号溝となっている）。丘陵の一番近くを巡る濠で，全長80m，幅2.2～3.6m，深さ0.9～1.3mを測り，弥生時代中期～古墳時代初頭の多量の土器が出土している。昨年度の調査では，弥生



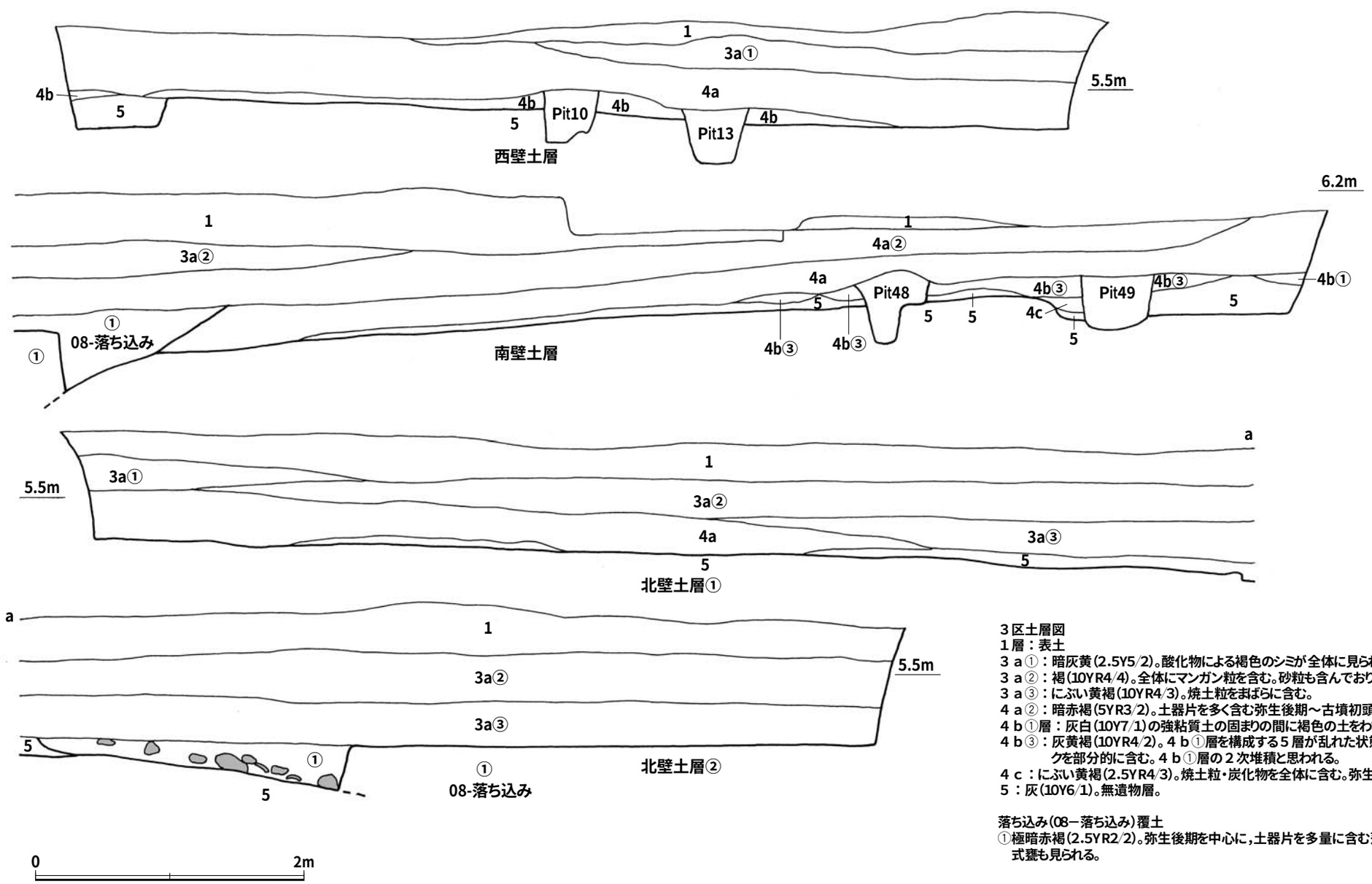
Ⅰ区土層図
1：表土
2：褐灰（10YR6/1）。床土。
3ａ：灰（5Y5/1）。しまり大。土器片や石をほとんど含まない。近世陶磁片出土。
3ｂ②：褐灰（10YR4/1）。南壁に部分的に見られる。マンガン粒を全体に含み，磨滅した土器片もまばらに含む。
3ｂ：灰黄褐（10YR4/2）。粘性大。調査区東側にみられ，土器片や石をほとんど含まない。
3ｃ：灰褐（7.5YR5/1）粘性が増し，小石や土器片の量が増える。鉄分を多く含み，１日で灰褐（7.5YR4/2）に変わる。調査区東側に見られる。
4ａ：黒褐（7.5YR3/2）。粘性・しまり大。５層（無遺物層）をブロック状に含む。弥生時代後期の包含層。
5：灰（10Y6/1）。無遺物層。
a：黒褐（7.5YR3/1）粘性大。拳大の礫を多く含む。落ち込み３（07調査）の覆土。
b：褐灰（10YR4/1）。Pit 覆土。

第７図　石田高原地区　１区土層図（１/40）



２区土層図
１：表土
２：褐灰(10YR6/1)。床土。
３ａ：灰(5Y5/1)。しまり大。土器片や石をほとんどふくまない。近世陶磁片出土。
３ｂ：灰黄褐(10YR4/2)。粘性大。調査区東側にみられ，土器片や石をほとんどふくまない。
４ａ層：黒褐(5YR3/1)。土器片を多く含む後期包含層。
４ｂ：灰白(2.5Y7/1)ににぶい黄(2.5Y6/4)が混ざる粘質土のみでなる層。造成土。
４ｂ②：黒褐(7.5YR3/1)に４ｂ層がブロック状に混ざる。土器片，炭化物も全体に含む。
４ｃ：にぶい黄褐(2.5YR4/3)。焼土粒・炭化物を全体に含む。弥生時代中期の包含層。
４ｃ②：黄褐(10YR6/5)。砂粒を多く含み，かくとザラつく。
４ｃ③：にぶい黄褐(10YR4/3)。炭化物，焼土粒をまばらに含む。
５：灰(10Y6/1)。無遺物層。

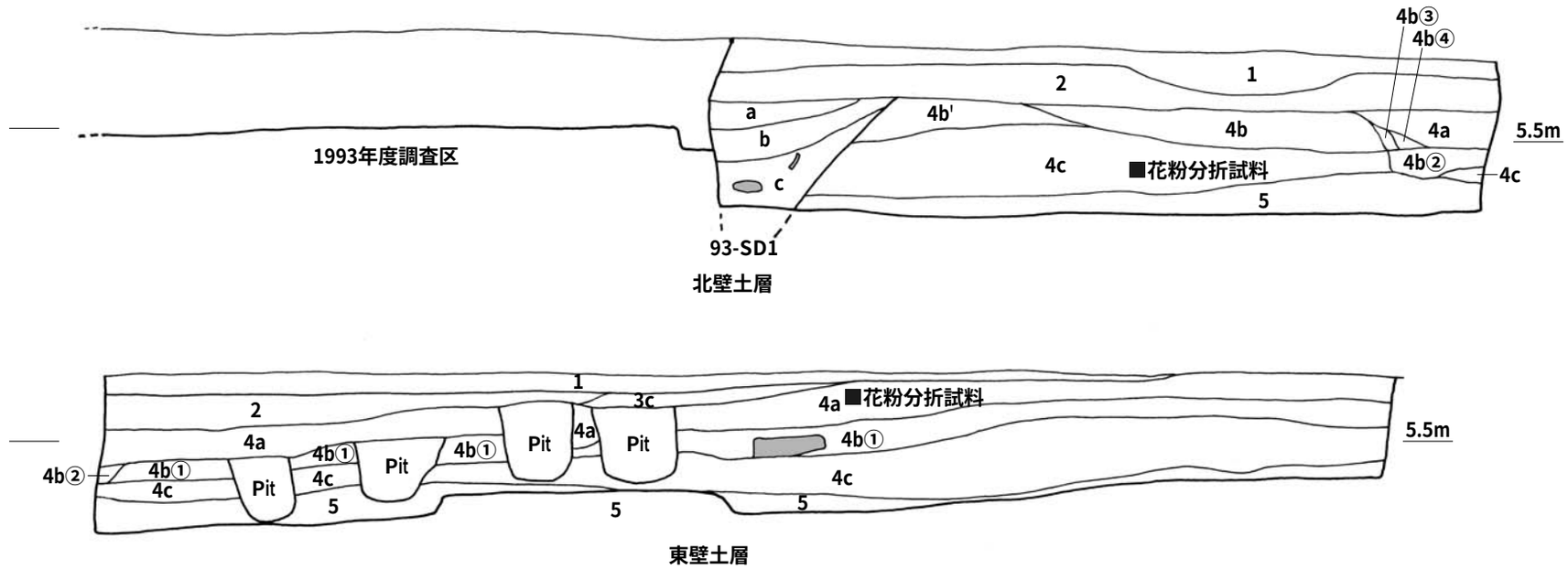
第８図　石田高原地区　２区土層図（１/40）



３区土層図
１層：表土
３ａ①：暗灰黄（2.5Y5/2）。酸化物による褐色のシミが全体に見られる。
３ａ②：褐（10YR4/4）。全体にマンガン粒を含む。砂粒も含んでおり，ザラつく。
３ａ③：にぶい黄褐（10YR4/3）。焼土粒をまばらに含む。
４ａ②：暗赤褐（5YR3/2）。土器片を多く含む弥生後期～古墳初頭と思われる包含層。
４ｂ①層：灰白（10Y7/1）の強粘質土の固まりの間に褐色の土をわずかに含む。
４ｂ③：灰黄褐（10YR4/2）。４ｂ①層を構成する５層が乱れた状態である。５層ブロックを部分的に含む。４ｂ①層の２次堆積と思われる。
４ｃ：にぶい黄褐（2.5YR4/3）。焼土粒・炭化物を全体に含む。弥生時代中期の包含層。
５：灰（10Y6/1）。無遺物層。

落ち込み（08－落ち込み）覆土
①極暗赤褐（2.5YR2/2）。弥生後期を中心に，土器片を多量に含む落ち込み覆土。庄内式甕も見られる。

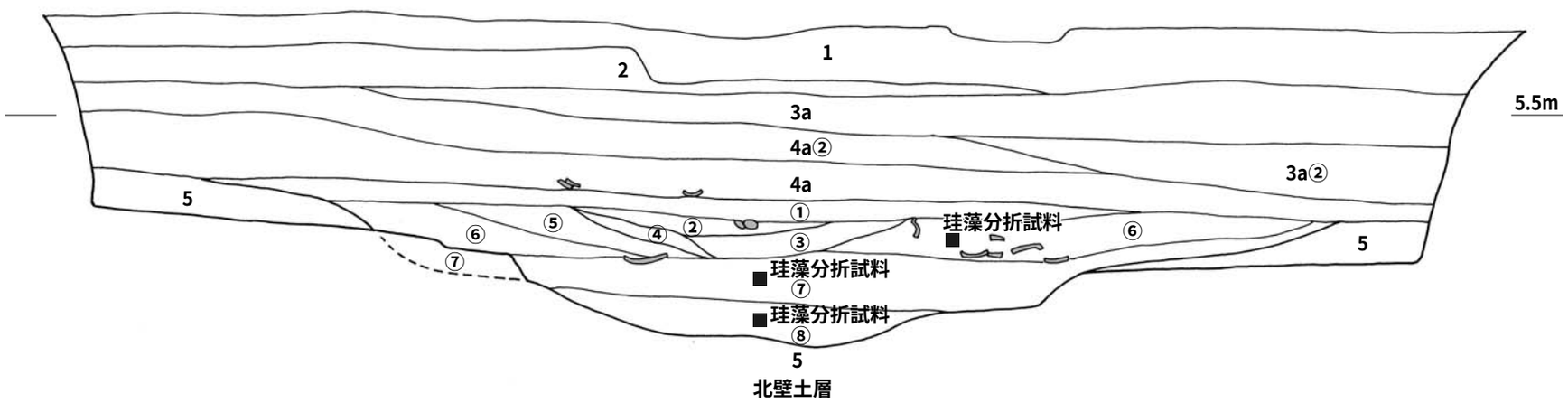
第９図　石田高原地区　３区土層図（１/40）

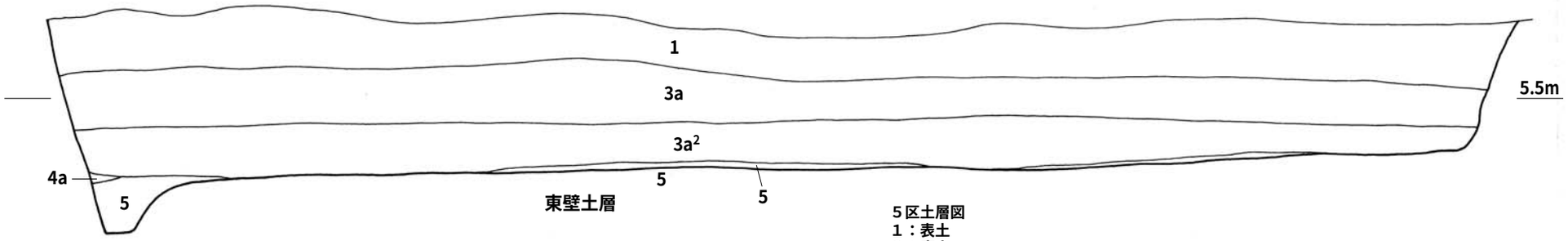


４区土層図
１：表土
２：褐灰（10YR6/1）。床土。
３ｃ：灰褐（7.5YR5/1）粘性が増し，小石や土器片の量が増える。鉄分を多く含み，１日で灰褐（7.5YR4/2）に変わる。
４ａ層：黒褐（5YR3/1）。土器片を多く含む弥生時代後期包含層。
４ｂ層：灰白（10Y7/1）の強粘質土。酸化のために明黄褐（2.5Y6/6）色のシミ状を呈する。５層の粘質土と同じと思われる。この部分は５層のみでなっており土をわずかに含む４ｂ'層と異なる。
４ｂ'層：灰白（10Y7/1）の強粘質土の固まりの間に褐色の土をわずかに含む。
４ｂ①層：灰白（10Y7/1）の強粘質土の固まりの間に褐色の土をわずかに含む。部分的に大きな粘質土ブロックを含む箇所もあり，４ｂ'層とは分けた。
４ｂ②層：にぶい黄褐（10YR4/3）に５層をブロック状に含む。
４ｂ③層：４ｂ層に褐色土が混入している。
４ｂ④層：４ｂ③層と比べると褐色土（10YR2/6）が増え，褐色土の中に４ｂ層をわずかに含む。
４ｃ層：にぶい黄褐（10YR4/3）。焼土粒，炭化物を全体に含む。弥生中期の包含層。
５層：にぶい黄（2.5Y6/4）。固くしまった粘質土で無遺物層。砂粒は含まない。

93－ＳＤ１覆土
ａ：黒褐（7.5YR3/2）。焼土粒，炭化物を全体に含む。
ｂ：にぶい黄褐（10YR4/3）。焼土粒，炭化物を全体に含むが，粒がｅ層より小さい。
ｃ：にぶい黄褐（10YR4/3）。焼土粒，炭化物が増え，炭化物は数㎝の固まりも見られる。
ｄ：にぶい黄褐（10YR4/3）。焼土粒，炭化物を全体に含む。
ｅ：４ｂ①層と同じ色調であるが，しまりがない。４ｂ①層が濠に落ち込んだものと思われる。

第10図　石田高原地区　４区土層図（１/40）



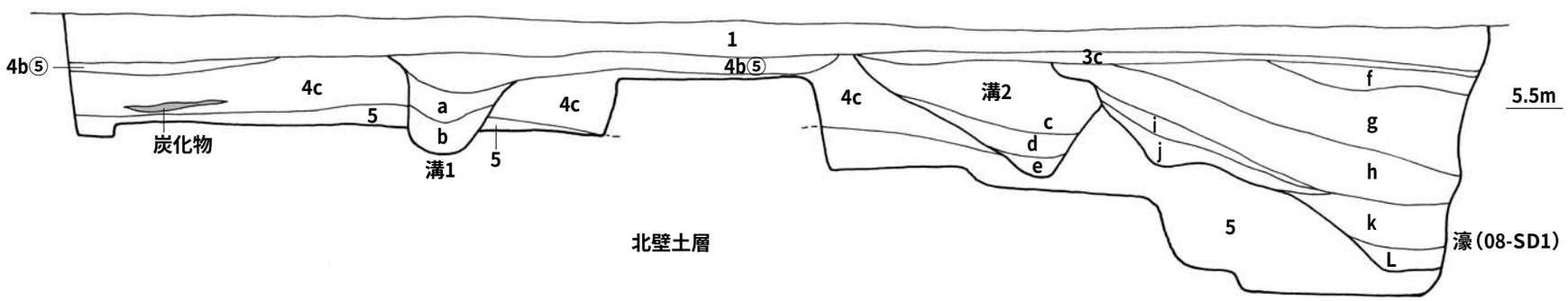


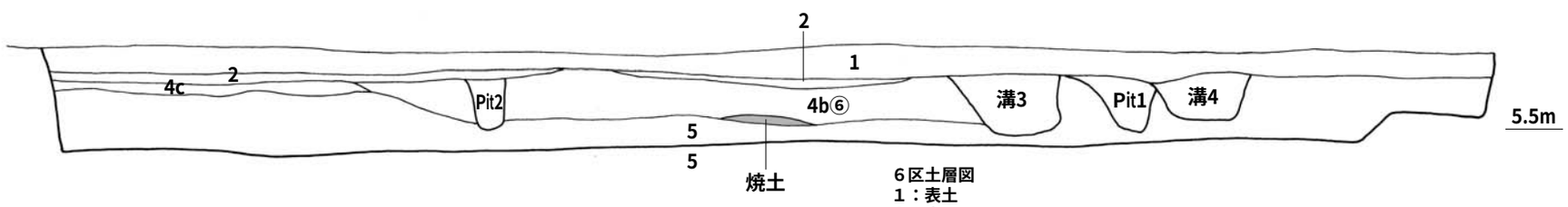
0　　2m

５区土層図
１：表土
２：床土
３ａ：暗灰黄（2.5Y3/2）。しまり大。マンガン粒含む近世包含層。
３ａ②：褐（7.5YR4/3）。しまり大。マンガン粒，砂粒も含みザラつく近世包含層。
４ａ②：暗赤褐（5YR3/2）。しまり大。１～２㎝大までの小土器片を多く含む。（後期包含層?）３区でも見られる。
４ａ：極暗赤褐（5YR2/3）。しまり大。数㎝の土器片をまばらに含む。３区，４区でも見られる。
５：灰（10Y6/1）。無遺物層。

落ち込み（08－落ち込み）覆土
①：黒褐（10YR3/1）。焼土粒をわずかに含む。粘性が増す。
②：褐灰（10YR5/1）。浅黄（2.5Y7/4）の粘土ブロックを全体に含む粘質土。
③：黄灰（2.5Y4/1）。砂粒をやや含むが粘性も増す。
④：黒（7.5YR2/2）。炭化物を多く含み，焼土粒も全体に含む粘質土。
⑤：褐灰（10YR4/1）。灰（5Y5/1）粘質土ブロックをまばらに含む。
⑥：灰（N5/0）。鉄分の固まりを全体に含む粘質土。大型土器片も含む。
⑦：灰（N4/0）。緻密な粘質土からなる層で，炭化物をまばらに含む。土器片の量が減る。
⑧：黒褐（7.5YR3/2）。木片を多量に含む粘質土。

第11図　石田高原地区　５区土層図（１/40）





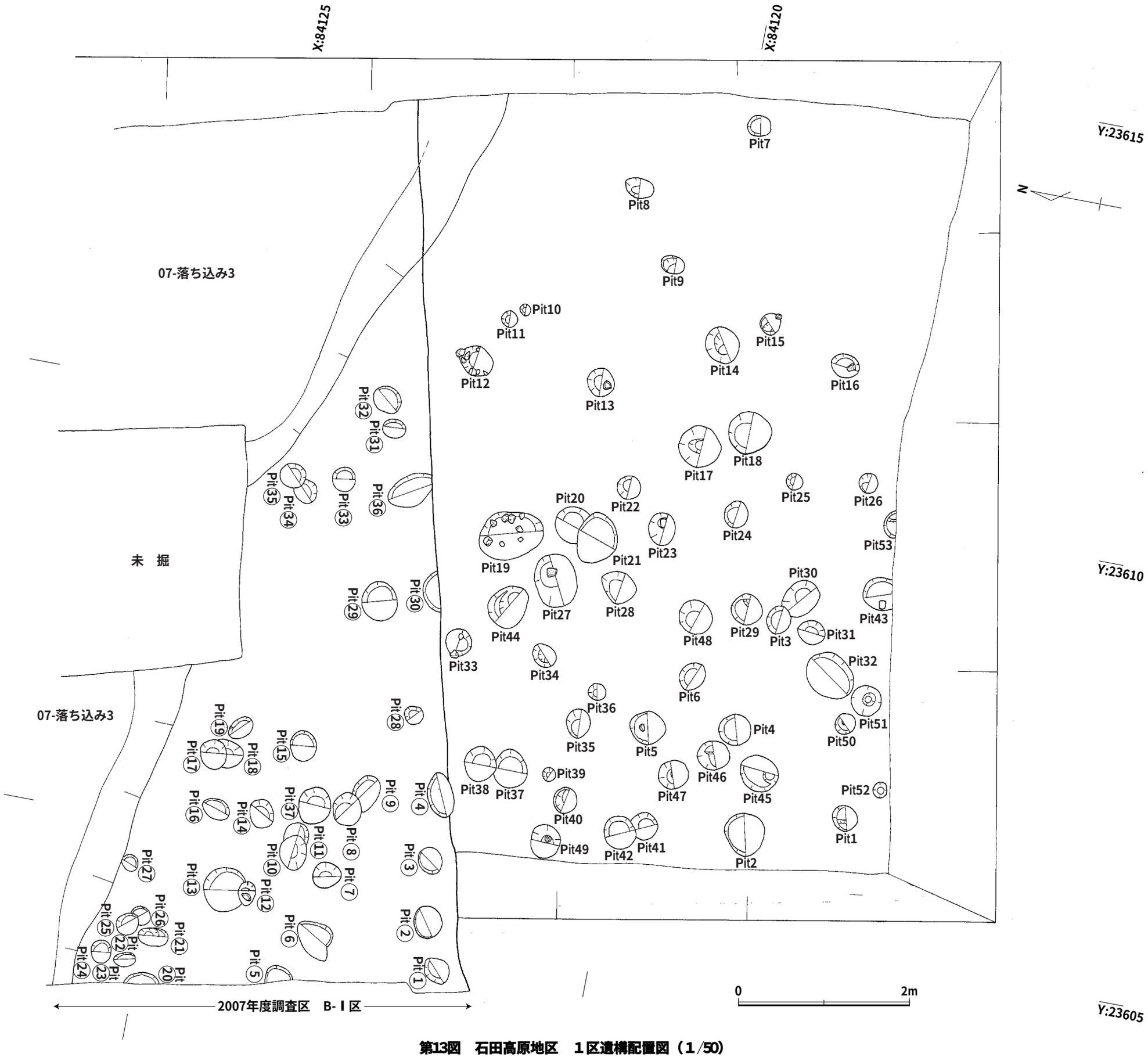
６区土層図
１：表土
２：床土
３ｃ層：にぶい赤褐（2.5YR4/3）。土器片を多く含み，かくとザラつく。マンガン粒も多く含む。
４ｂ⑤：明黄褐（2.5YR7/6）。灰白（7.5Y7/1）色を全体に含む強粘質土。
４ｂ⑥：造成土灰褐（7.5YR4/2）。浅黄（2.5Y7/3）や明黄褐（2.5Y7/6）の無遺物層ブロックに炭化物，焼土粒，焼土ブロック（赤褐2.5YR4/6）や炭化物粒ブロックも見られる。
４ｃ：にぶい黄褐（10YR4/3）。焼土粒，炭化物を全体に含む。弥生中期の包含層。炭化物の集中カ所もあり。
５：にぶい黄（2.5Y6/4）。固くしまった粘質土で無遺物層。６区では，砂粒を含みザラつくが，他区では粘土から成る。

溝１覆土
ａ：にぶい黄褐（10YR4/3）。５層のブロックを全体に含む（５層ブロックと土が半々に混じる）。
ｂ：暗褐（10YR3/3）。５層のブロックをまばらに含む（10%）。

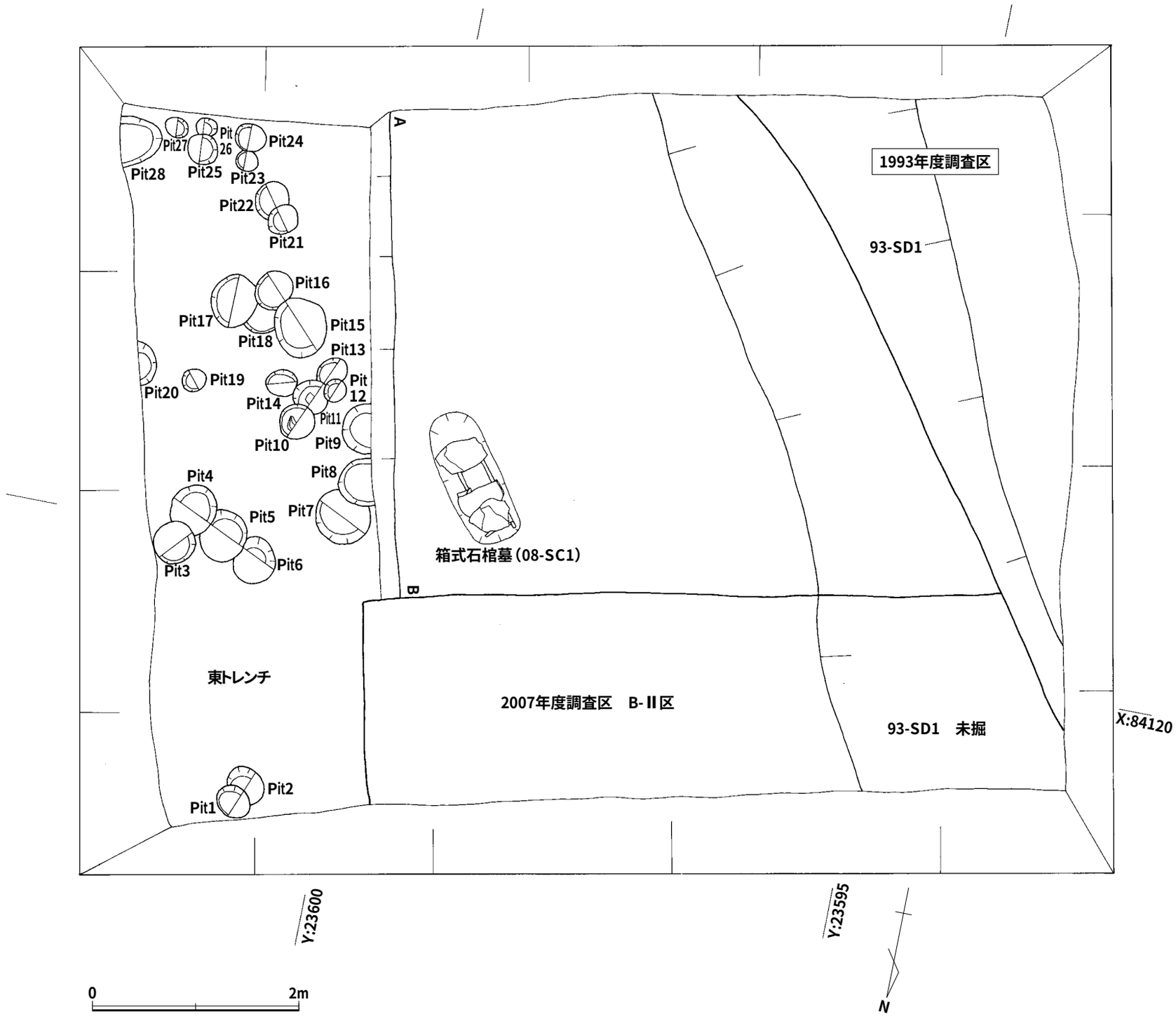
溝２覆土
ｃ：褐（10YR4/4）。５層のブロックを全体に含む（５層ブロックと土が半々に混じる）。ａ層と似る。
ｄ：暗褐（10YR3/3）。５層のブロックをまばらに含む（10%）。ｂ層と似る。
ｅ：黄褐（2.5YR5/4）。５層に土が30%混ざる。

濠覆土
ｆ：褐（7.5YR4/3）。微細な土器片，焼土粒を含み，かくとザラつく。
ｇ：暗褐（10YR3/3）。微細な土器片，焼土粒を含み，かくとザラつく。土器片がｆ層より大きくなる。（10㎝大まで）。
　＊丸底大型壺はｇ層より出土。
ｈ：暗褐（10YR3/4）。微細な土器片，焼土粒が減り，炭化物が増える。粘性も増す。
ｉ：暗オリーブ褐（2.5Y3/3）。５層を10㎝大までのブロック状に20%含む。
ｊ：オリーブ褐（2.5Y4/4）。焼土粒，炭化物をわずかに含む。砂粒（５層に由来か）を含み，かくとザラつく。
ｋ：暗オリーブ（5Y4/3）。粘性大。焼土粒，炭化物をわずかに含む。
Ｌ：灰（7.5Y6/1）粘性がさらに増す。炭化物をまばらに含む。

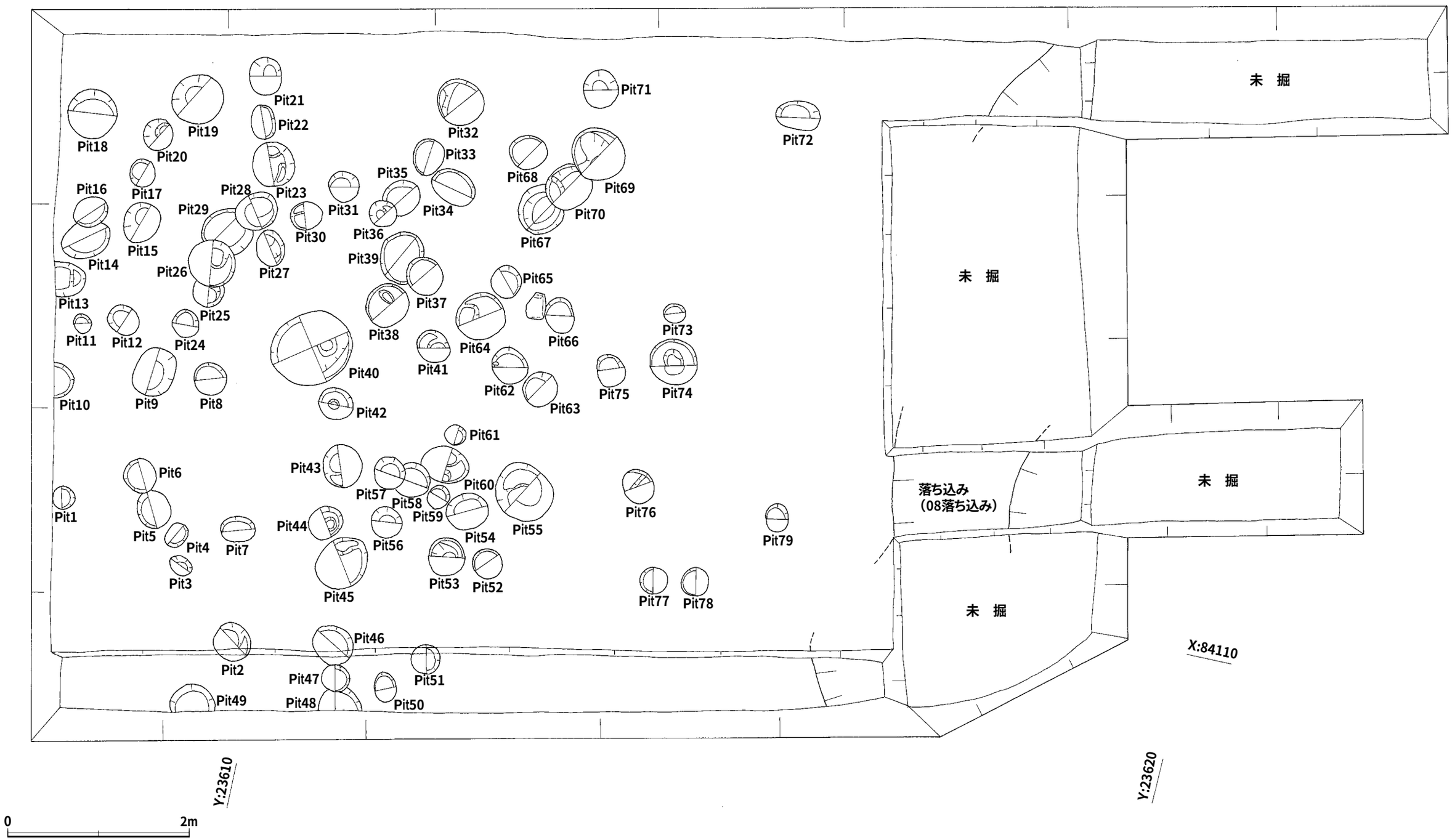
第12図　石田高原地区　６区土層図（１/40）



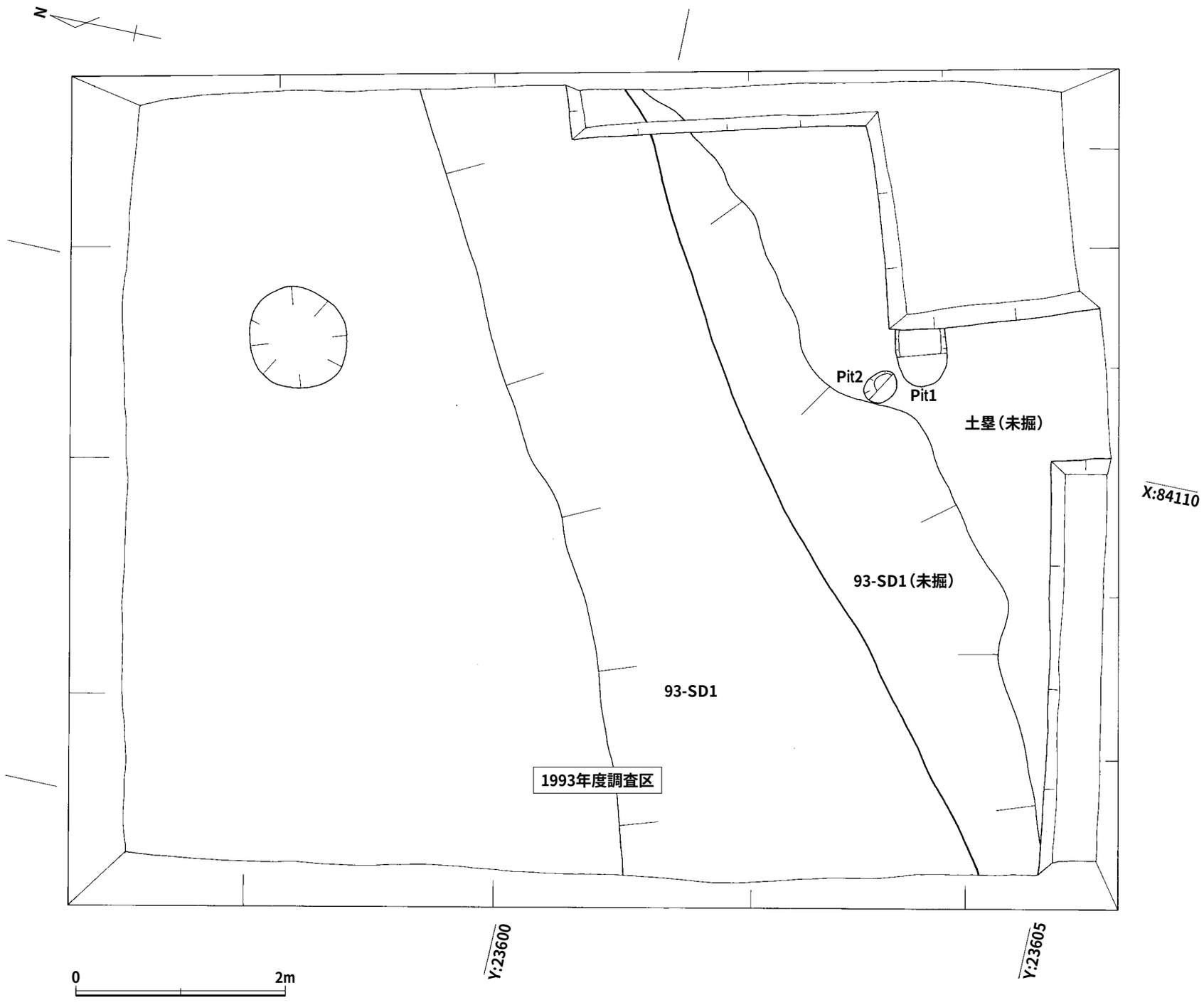
第13図　石田高原地区　１区遺構配置図（１/50）



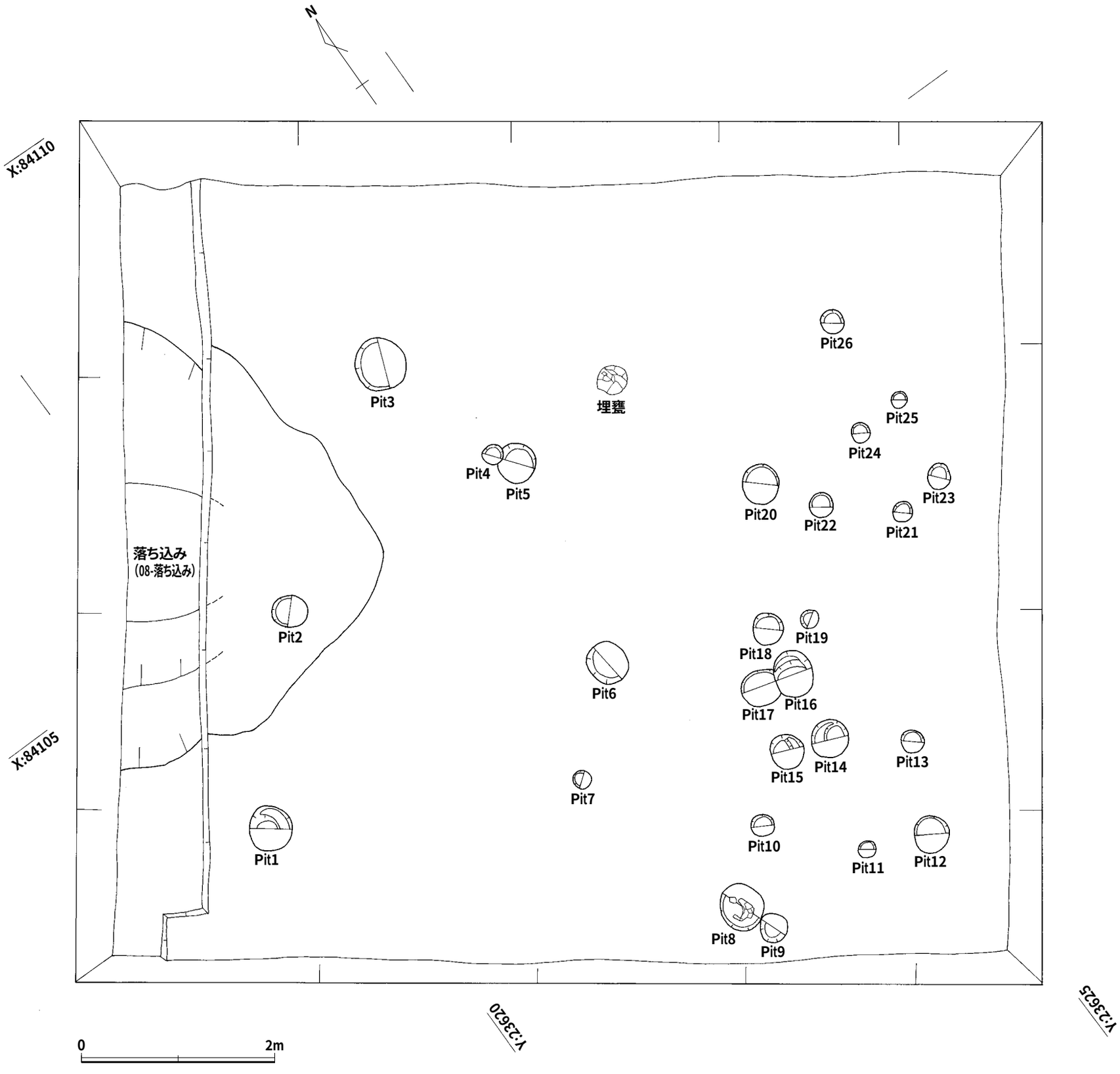
第14図　石田高原地区　２区遺構配置図（１/50）



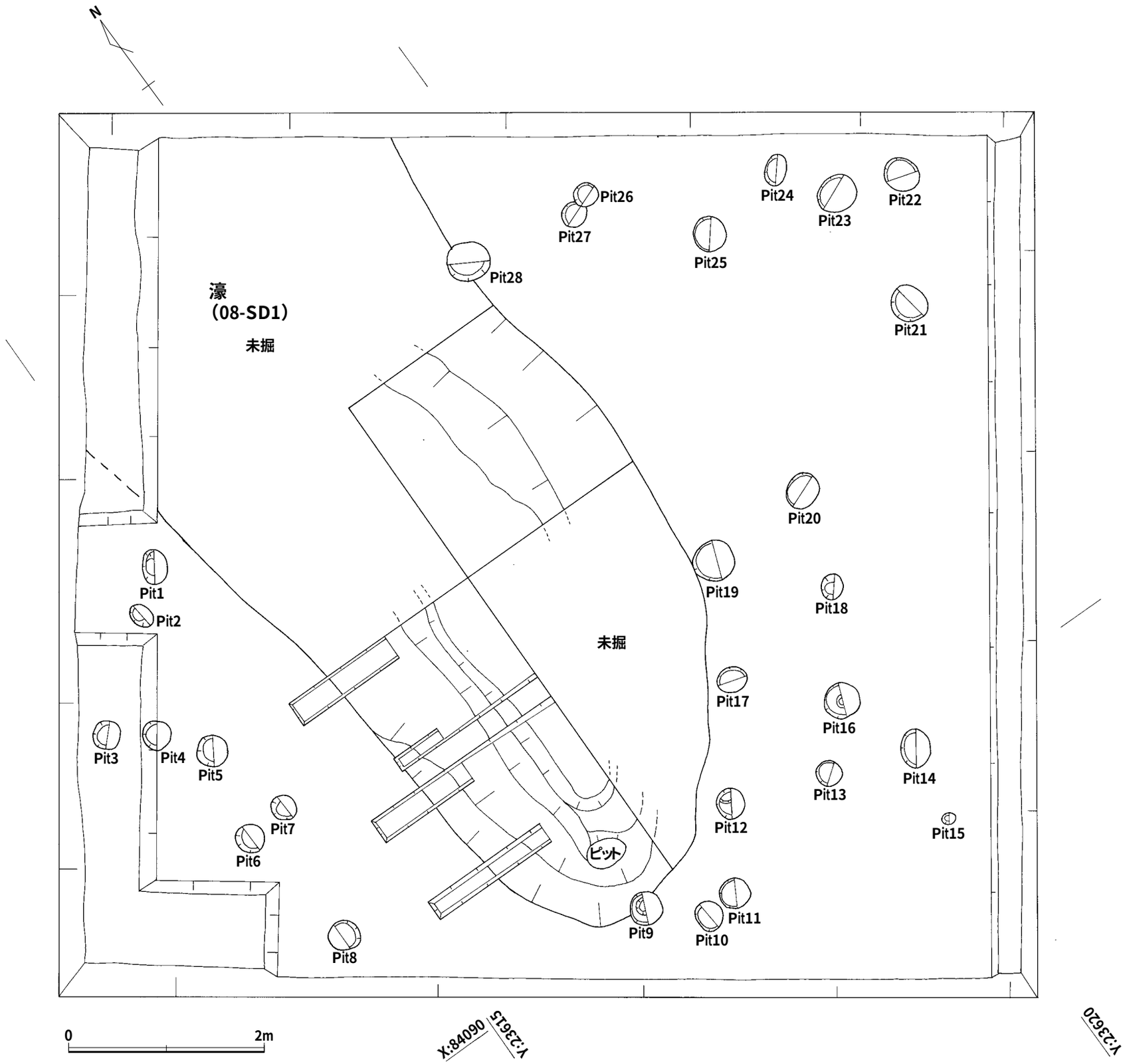
第15図　石田高原地区　３区遺構配置図（１/50）



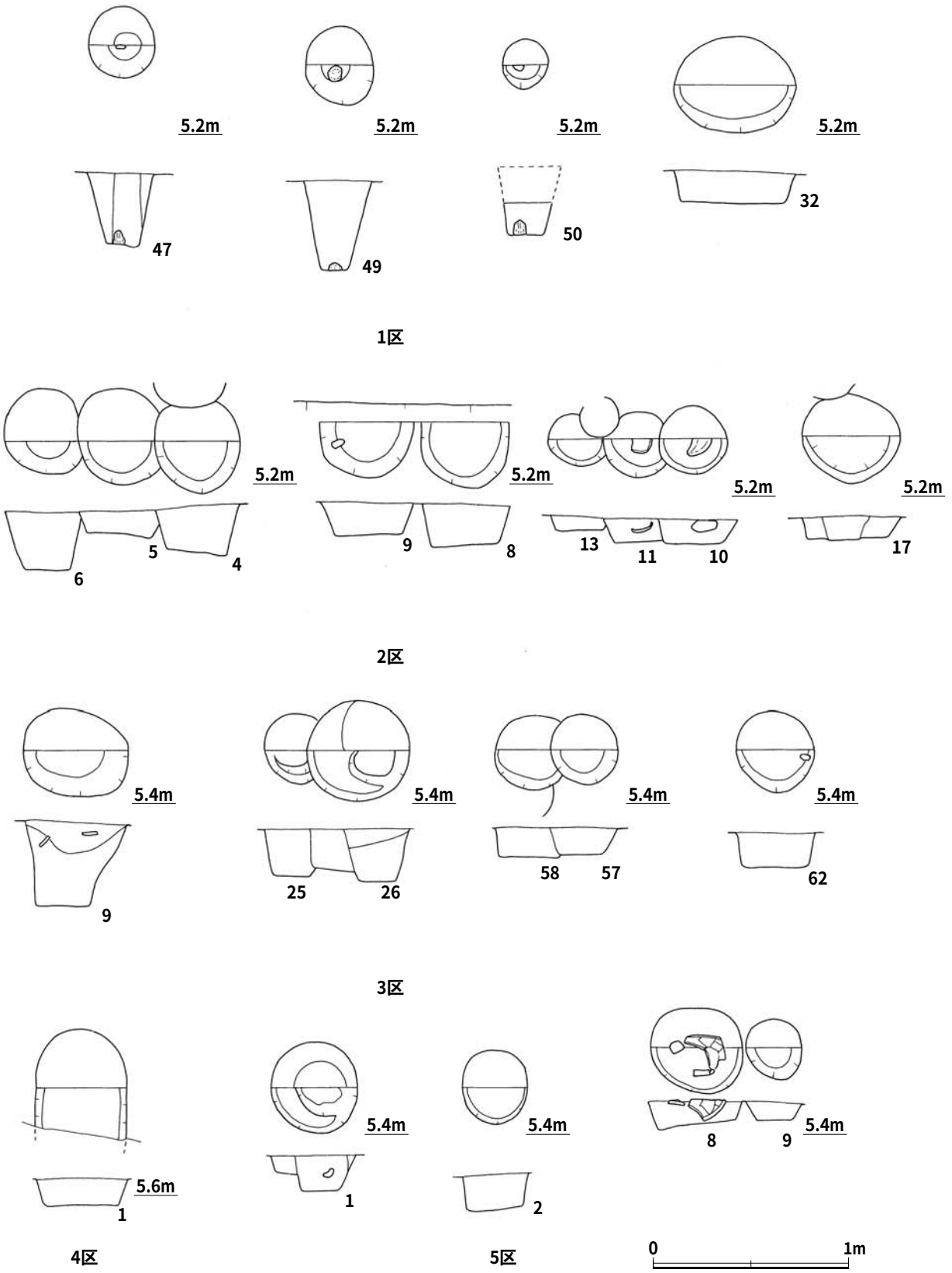
第16図　石田高原地区　４区遺構配置図（１/50）



第17図　石田高原地区　５区遺構配置図（１/50）



第18図　石田高原地区　６区遺構配置図（１/50）



第19図　石田高原地区　検出ピット（抽出）（1/30）

第２表　石田高原地区検出ピット（抽出分）属性表

調査区	ピット番号	覆土	覆土分類	色調分類による時期	床面標高（m）	出土遺物	備考
１区	47	にぶい黄褐（Hue10YR4/3）	ブロック混系	弥生後期または古墳時代以降	4.68	柱根	５層ブロック間に土が混ざる。樹種同定
	49	黒褐（Hue10YR3/2）	ブロック混系	弥生後期または古墳時代以降	4.56	柱根	５層ブロックが全体に混ざる。樹種同定。年代測定
	50	オリーブ褐（Hue2.5Y4/3）	ブロック混系	弥生後期または古墳時代以降	4.74	柱根	５層ブロック間に土が混ざる。樹種同定
	32	黒褐（Hue2.5Y3/2）	濃い褐色系	弥生後期	4.9	弥生時代中期中頃～後葉の甕片	
２区	6	褐（Hue10YR4/6）	薄い褐色系	弥生時代中期	4.74	弥生時代中期中頃の甕片	
	8	暗褐（Hue10YR3/4）	濃い褐色系	弥生後期	4.86	弥生時代中期中頃の甕片と中期後葉の甕片	
	9	褐（Hue10YR4/4）	薄い褐色系	弥生時代中期	4.92	弥生時代中期後葉の甕片	
	10	灰褐（Hue7.5YR4/2）	薄い褐色系	弥生時代中期	4.87	弥生時代後期中頃～後葉の甕片	
	17	灰褐（Hue7.5YR4/2）	ブロック混系	弥生後期または古墳時代以降	4.98	弥生時代後期前葉の壺片。後期後葉～末の甕片	５層ブロックが全体に混ざる。
３区	9	黒褐（Hue7.5YR3/1）	濃い褐色系	弥生後期	4.91	弥生時代中期初頭～前葉の甕片	
	26	灰黄褐（Hue10YR4/3）	薄い褐色系	弥生時代中期	5.03	弥生時代中期前葉の甕片	
	57	黒褐（Hue5YR5/2）	濃い褐色系	弥生後期	5.17	弥生時代後期後葉～末の大型壺片	
	62	灰黄褐（Hue10YR4/2）	薄い褐色系	弥生時代中期	5.11	弥生時代中期中葉の甕片と中期の甕片	
４区	1	暗褐（Hue10YR3/3）	濃い褐色系	弥生後期	5.51	弥生時代後期初頭～前葉の甕片	
５区	1	灰黄褐（Hue10YR4/2）	ブロック混系	弥生後期または古墳時代以降	4.97	弥生時代中期後葉の甕片	
	2	黒褐（Hue7.5YR3/2）	ブロック混系	弥生後期または古墳時代以降	4.97	弥生時代後期前葉の壺片	弥生時代後期の遺物を含む落ち込み覆土を掘り込む
	8	灰黄褐（Hue10YR4/2）	薄い褐色系	弥生時代中期	5.38	弥生時代中期後葉の甕片	ピットの中に甕が口縁を下に置かれている

時代中期に掘られ後期に掘り直しが行われたことが，土層断面の観察より分かった。今年度はプランを確認したのみで，本体部分については掘削を行わなかった。

⑥造成土（第６図，第８図，第９図，第10図）

２区・３区・４区で確認をしたもので，弥生時代中期の包含層の下にある粘質土に由来する層である。この層は４区を中心に93－ＳＤ１に沿い東側に広がる。造成土は４区東壁に見られるように整地のために土混じりの粘質土（４ｂ①層）を薄く広げた場所と，４区北壁に見られるように，粘質土のみ（４ｂ層）を使い濠の際に盛り上げた場所とに分かれる。この造成土は弥生時代中期と後期の包含層に挟まれていることから，整地等もその間に行われたことが分かる。

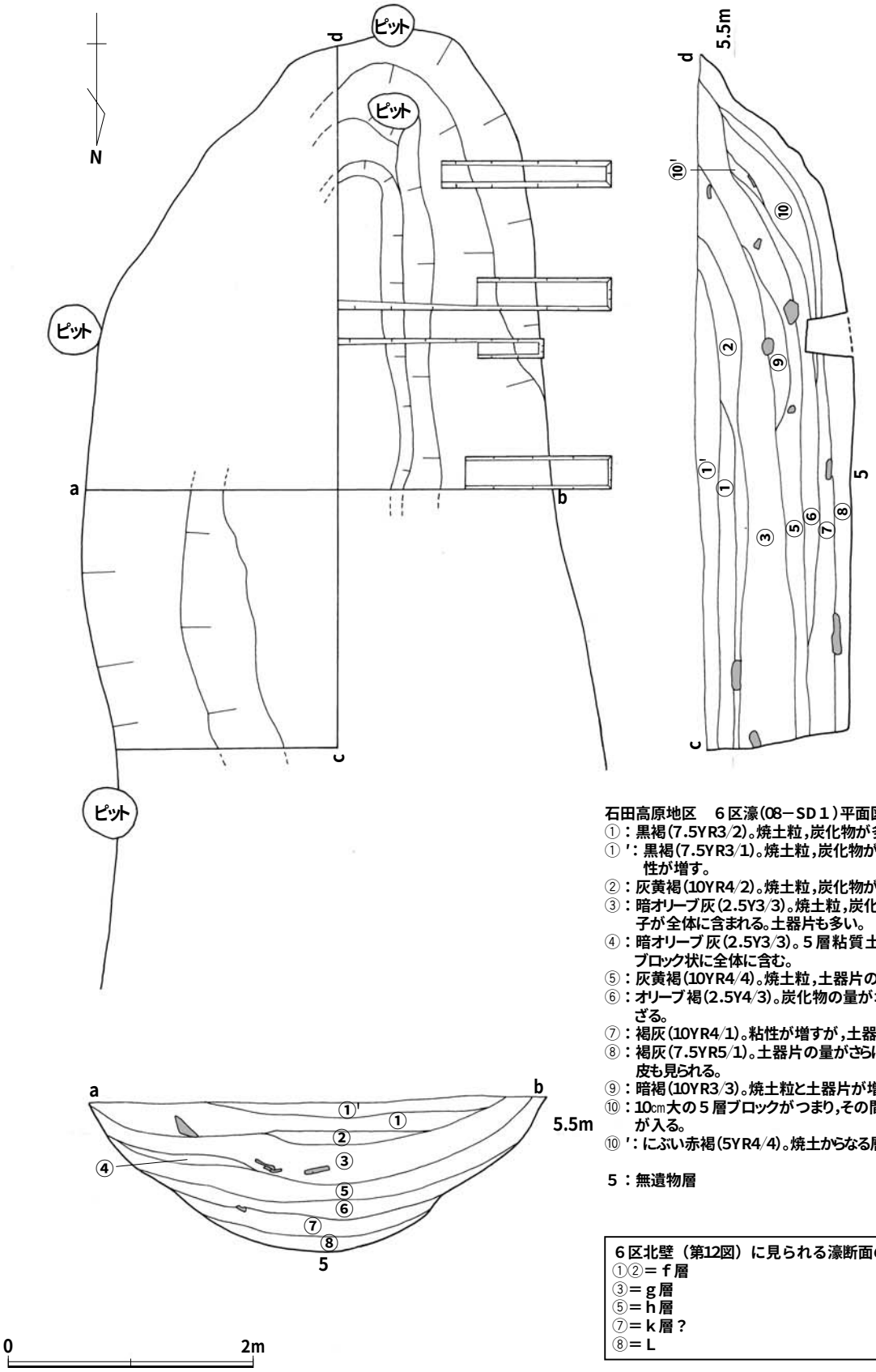
⑦箱式石棺墓（08－ＳＣ１）（第６図，第14図，第21図）

２区内の造成土の範囲を確認するために精査を行っている際に，造成土の下層（弥生時代中期の包含層）に掘り込まれているのを検出した。棺長90㎝，棺幅30㎝，棺高20㎝を測る小ぶりの石棺である。蓋石が１枚欠損しているが，蓋石のすぐ上に造成土が乗っていたことから，造成土による土地改変時に蓋石が欠損したものと思われる。掘り方の覆土からは弥生時代中期後半の土器が出土した。周囲からは，石棺や甕棺を検出することはできず，墓域に伴う墳墓ではないことが推測される。

棺内覆土からガラス製の極小管玉が２点出土した。石棺の掘り方から出土した土器２点は，石棺に伴うものではなく，掘り込まれた土層からの混入と思われる。

⑧埋甕（第17図，第23図）

５区内の落ち込みから2.3m南で検出した。弥生時代中期前半に相当する壺の胴部下半が，５層中に斜めに埋め込まれた状態であったが，掘り方を確認する事はできなかった。覆土をふるいにかけ洗

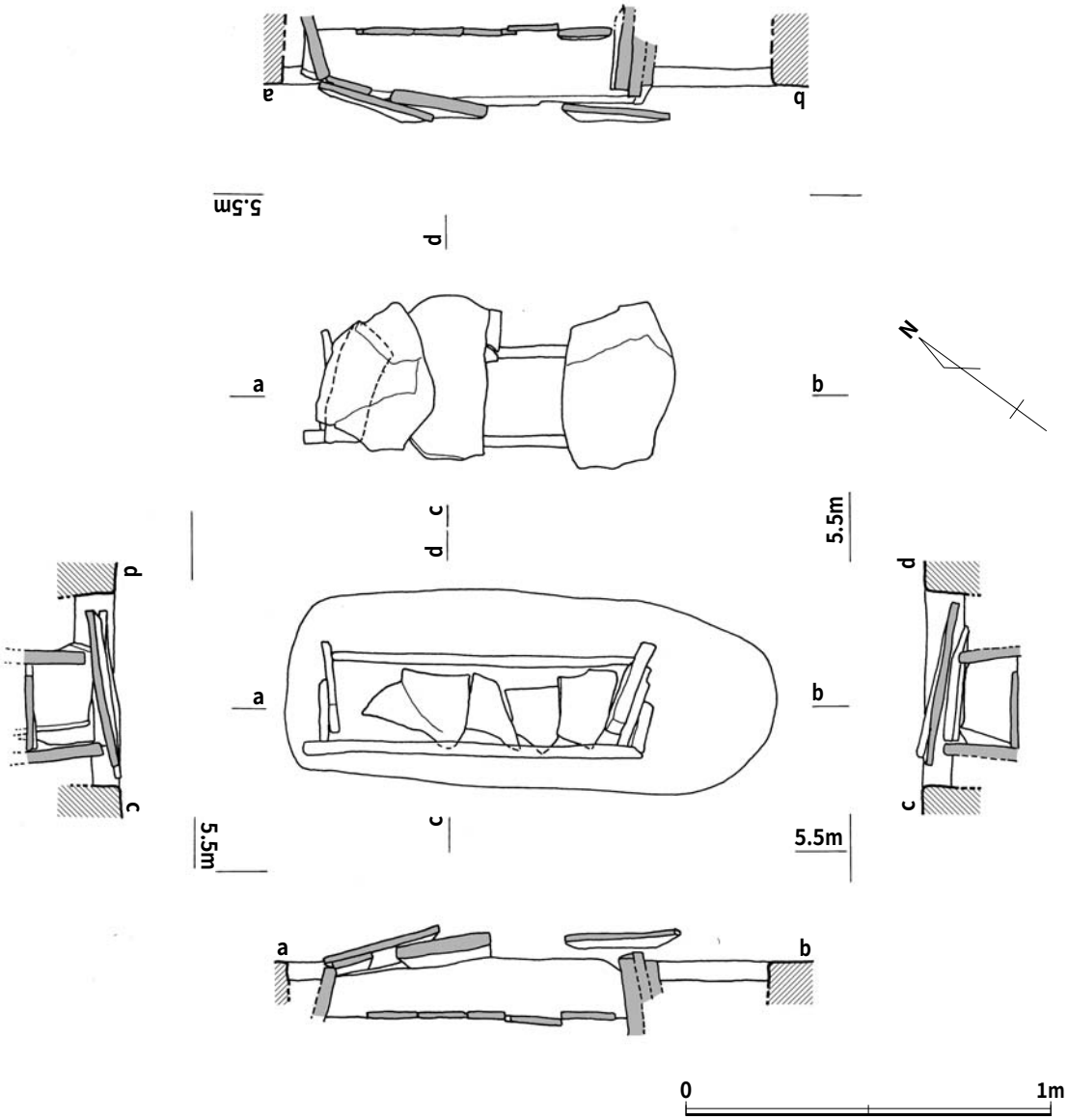


石田高原地区　６区濠（08－SD１）平面図・断面図
①：黒褐（7.5YR3/2）。焼土粒，炭化物が多い。粘性少ない。
①'：黒褐（7.5YR3/1）。焼土粒，炭化物が多く，かくとザラつく。粘性が増す。
②：灰黄褐（10YR4/2）。焼土粒，炭化物が多く，粘性が増す。
③：暗オリーブ灰（2.5Y3/3）。焼土粒，炭化物に加え，黄色の小粒子が全体に含まれる。土器片も多い。
④：暗オリーブ灰（2.5Y3/3）。５層粘質土（明黄褐，2.5Y6/4）をブロック状に全体に含む。
⑤：灰黄褐（10YR4/4）。焼土粒，土器片の量が増え，粘性も増す。
⑥：オリーブ褐（2.5Y4/3）。炭化物の量が増え，５層粘質土が混ざる。
⑦：褐灰（10YR4/1）。粘性が増すが，土器片の量は減る。
⑧：褐灰（7.5YR5/1）。土器片の量がさらに減り，粘性が増す。樹皮も見られる。
⑨：暗褐（10YR3/3）。焼土粒と土器片が増える。
⑩：10㎝大の５層ブロックがつまり，その間に暗灰黄（2.5Y4/2）が入る。
⑩'：にぶい赤褐（5YR4/4）。焼土からなる層。

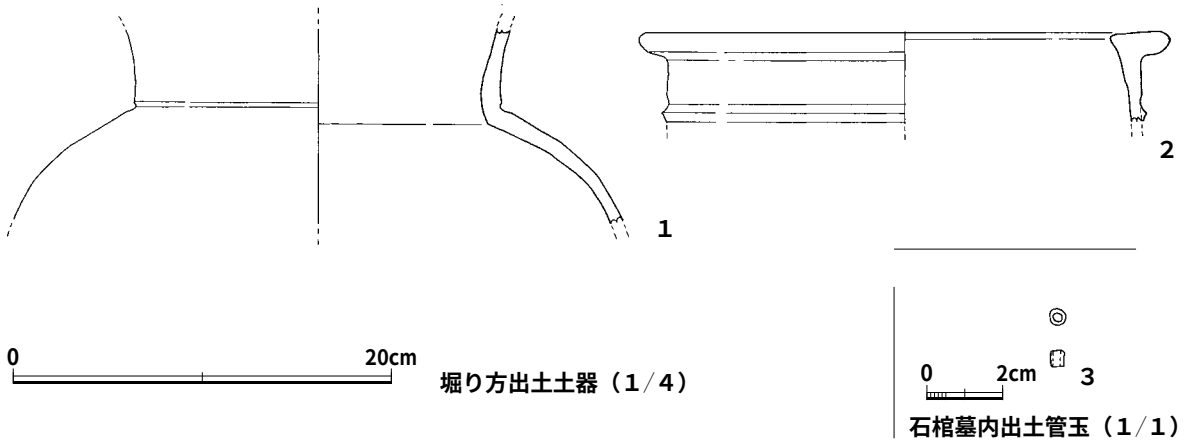
５：無遺物層

６区北壁（第12図）に見られる濠断面の覆土との対応
①②＝ｆ層
③＝ｇ層
⑤＝ｈ層
⑦＝ｋ層？
⑧＝Ｌ

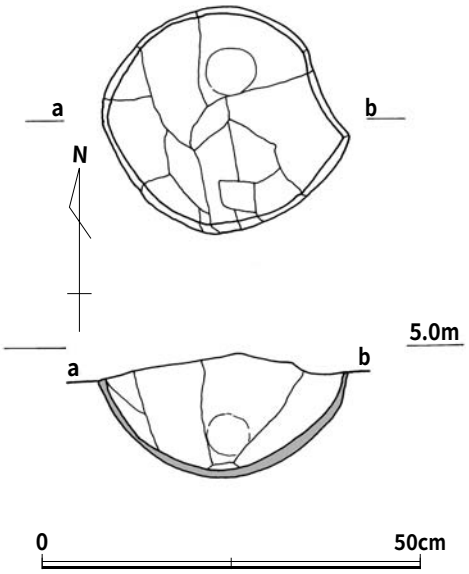
第20図　石田高原地区　６区濠（08－ＳＤ１）平面図・断面図（１/50）



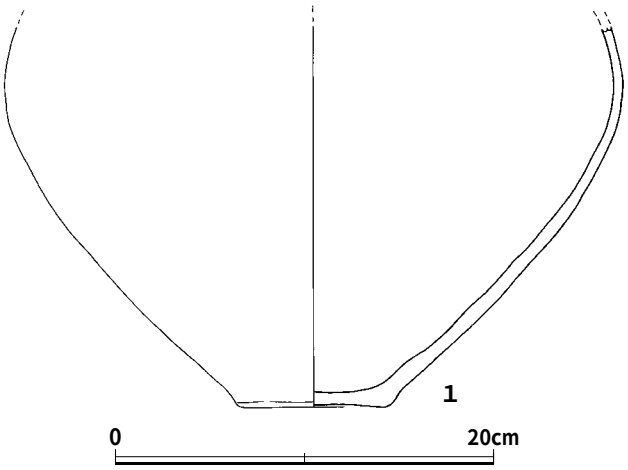
第21図　石田高原地区　２区検出箱式石棺墓（08－ＳＣ１）（１/20）



第22図　箱式石棺墓（08－ＳＣ１）出土管玉および掘り方出土土器



第23図　石田高原地区　５区　埋甕（１/10）



第24図　５区　出土埋甕（１/４）

浄を行ったが，副葬品は見られなかった。目的や用途については不明である。確認をした面の上の層は近世の包含層で，後世に削平が行われていることが分かる。欠損していた胴部上半もこの時の削平によるものと思われる。

⑷　遺物

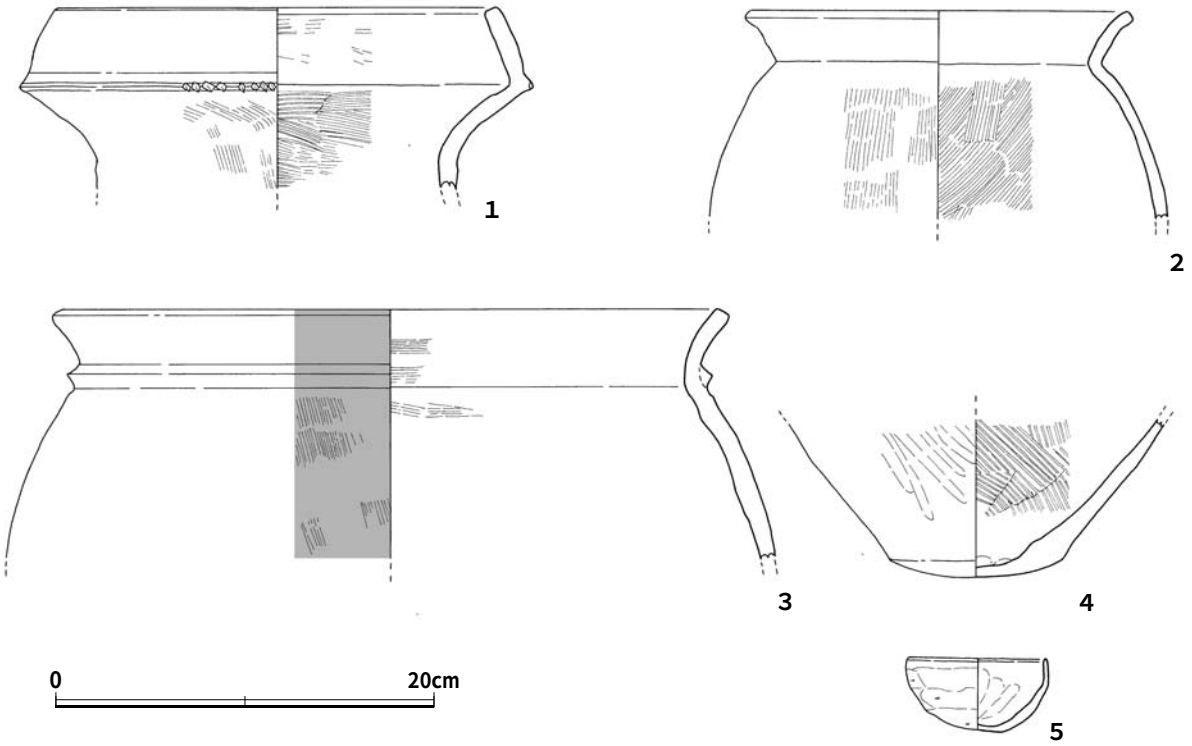
①土器

濠（93－ＳＤ１）出土土器（第25図・第３表）

１～５は濠（93－ＳＤ１）から出土した土器である。濠（93－ＳＤ１）については，今年度は掘削を行わなかったが，平面形確認のために精査を行った際に覆土から外れてしまったものがこれらの土器である。出土層位は覆土の最上層である。**１**は複合口縁壺の口縁部片である。色調は灰白色で口径は23.7㎝を測る。外面の風化が著しく頸部にハケメがわずかに残る。内面にはハケメが残り屈曲部より上位にはヨコナデが施されている。また，屈曲部は三角突帯状に外へ張り出し，断面U字形の刻みが斜めに入る。弥生時代終末から古墳時代初めにかけてのものか。**２**は口径20.5㎝を測る弥生時代後期後葉から末にかけての甕の胴部上位片である。胴部内外面にハケメ調整が行われ，口縁部にはヨコナデが残る。**３**は口径34.6㎝を測る大型の甕の胴部上位片である。頸部に断面三角形の突帯が巡る。器表は風化を受けているが胴部外面にはハケメが，口縁部にはヨコナデが見られる。また，外面には丹が残る。弥生時代後期初頭から前葉にかけてのものと思われる。**４**は弥生時代後期後葉から末のレンズ状を呈した底部を持つ甕である。内面はハケメ調整の後底部を指でナデており，外面はナデツケ状の調整痕が残る。**５**は口径7.5㎝，器高3.9㎝を測る小形の丸底鉢である。胴部外面は手持ちのヘラ削り調整が行われ，胴部内面は指ナデで平滑に仕上げる。そのために，厚さは均一でないが薄く仕上がっている。

ピット出土土器（第26図・第４表）

１は１区ピット32出土の土器片である。全体が風化しているが口縁部内面にわずかに丹が残る。弥



第25図　濠（93－SD１）最上層出土土器（１/４）

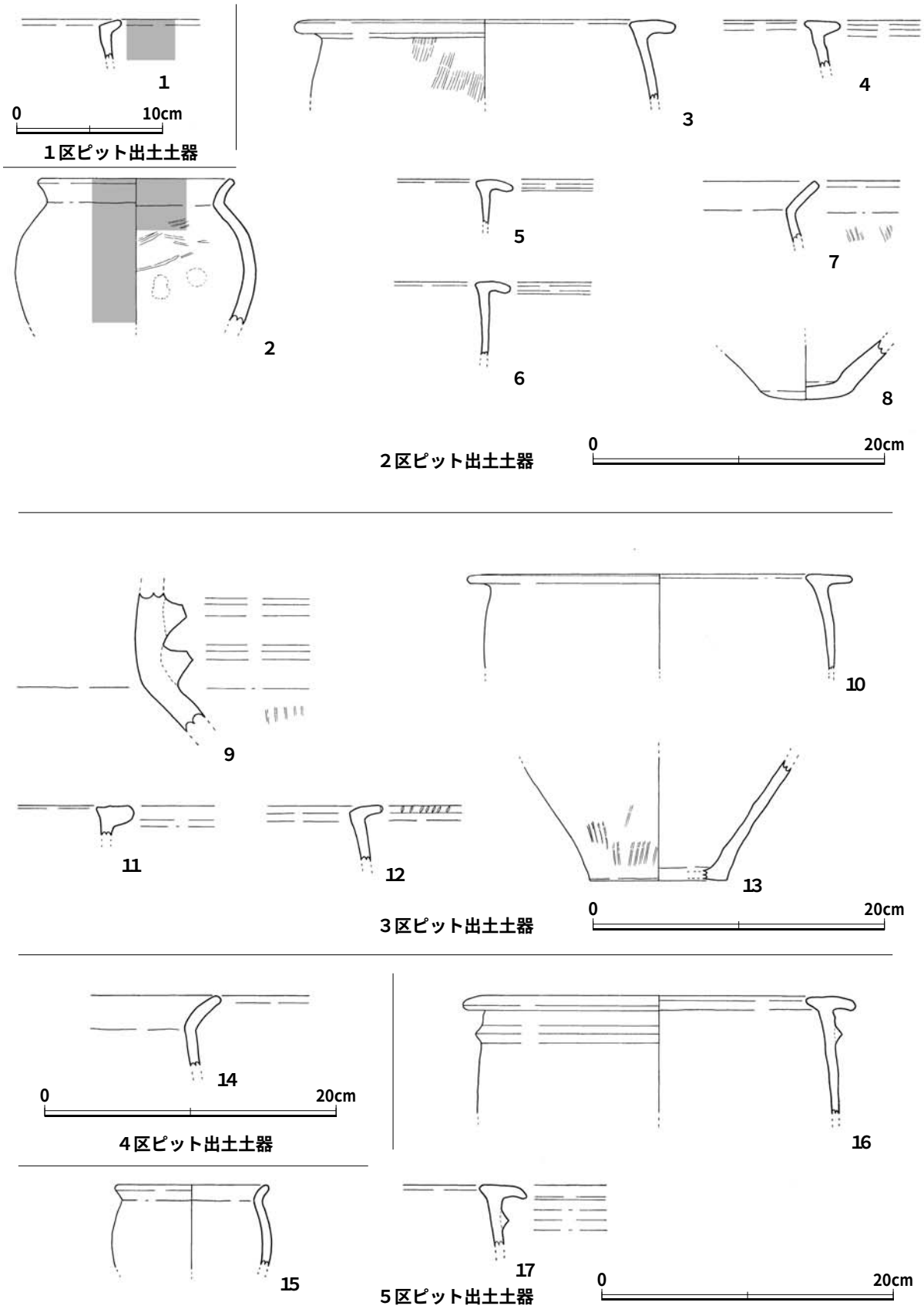
生時代中期中ごろから後葉の丹塗りの甕もしくは鉢片である。

２～８は２区のピットから出土した土器片である。**２**はピット18から出土した弥生時代後期前葉の丹塗りの壺である。金雲母をわずかに長石や石英砂粒を多量に含む胎ではあるが，作りは丁寧である。外面及び内面胴部上位に丹が残る。口径13.5㎝を測る。**３～７**は甕の口縁部片である。**３**はピット６から出土した。弥生時代中期中ごろのものである。口径26.2㎝を測る。**４**はピット８から出土した。弥生時代中期中ごろのものである。**５**もピット８から出土した。弥生時代中期後葉のもので口縁部が外に垂れている。**６**はピット９から出土した。この土器も弥生時代中期後葉のものである。**７**はピット10から出土した。弥生時代後期中ごろから後葉にかけてのものである。**８**はピット17から出土した弥生時代後期後葉から末にかけての甕底部である。外底部が凸レンズ状に張り出している。

９～13は３区内ピットから出土した土器片である。**９**はピット57から出土した弥生時代後期後葉から末にかけての糸島系壺の頸部片である。器厚が1.5㎝あり分厚い作りである。幅３㎝の断面台形突帯が２条巡る。**10～12**は甕の口縁部片である。**10**はピット62から出土した。弥生時代中期中葉のもので，口径26.6㎝を測る。器厚を薄く仕上げている。**11**はピット９から出土した。弥生時代中期初頭から前葉のものである。**12**はピット26から出土した。口唇部に刻み目を持ち，弥生時代中期後葉のものである。**13**はピット62から出土した弥生時代中期の甕底部である。薄手の作りである。

14は４区ピット１から出土した弥生時代後期初頭から前葉にかけての甕口縁部片である。全面に風化を受けている。

15～17は５区内ピットから出土した土器片である。**15**はピット２から出土した。口径10.6㎝を測る



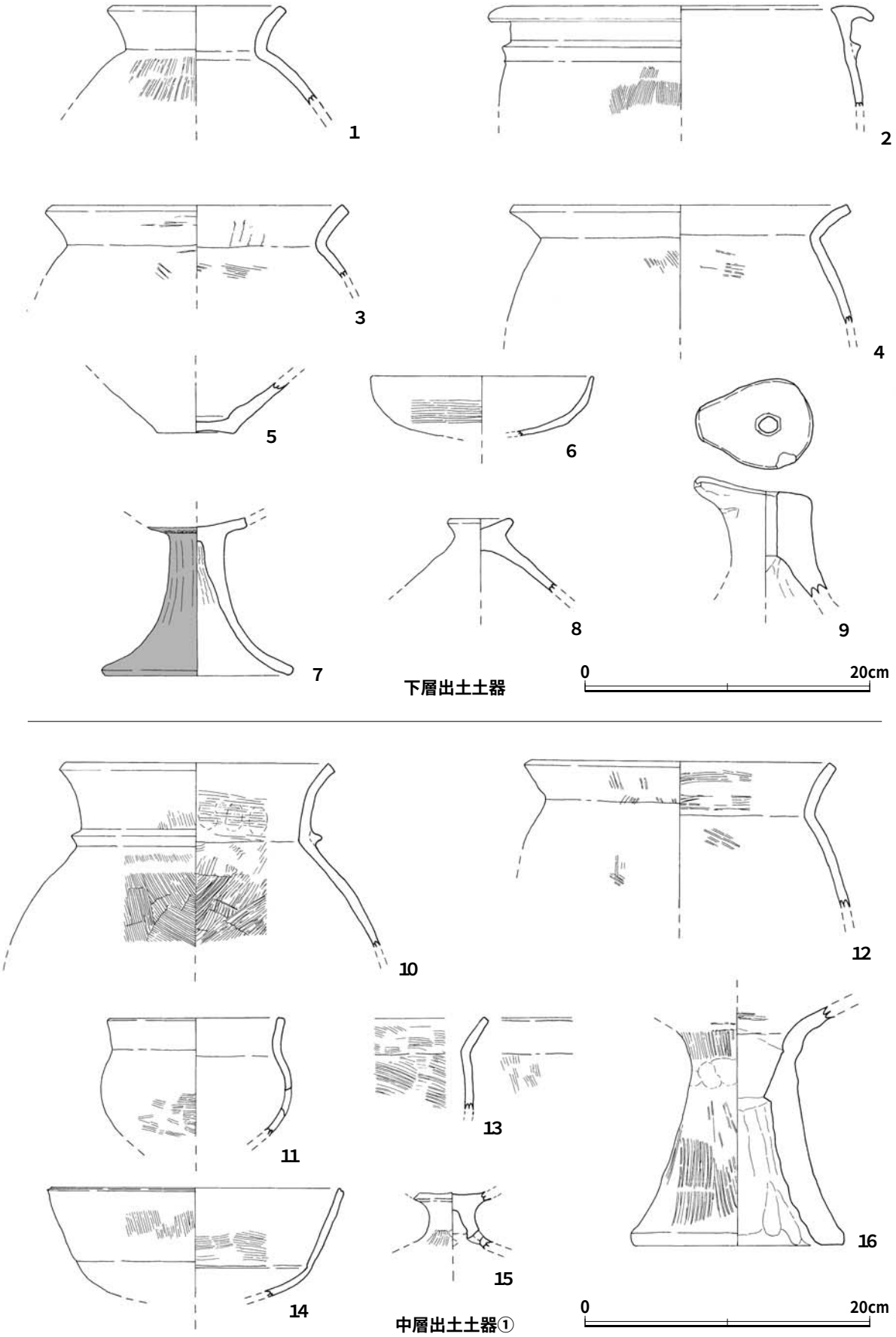
第26図　ピット内出土土器（1／4）

壺である。胎に含まれる砂粒は細かく丁寧な作りである。**16・17**は弥生時代中期後葉の甕口縁部である。**16**は口径27.0㎝を測りピット８より出土した。**17**はピット１より出土した。

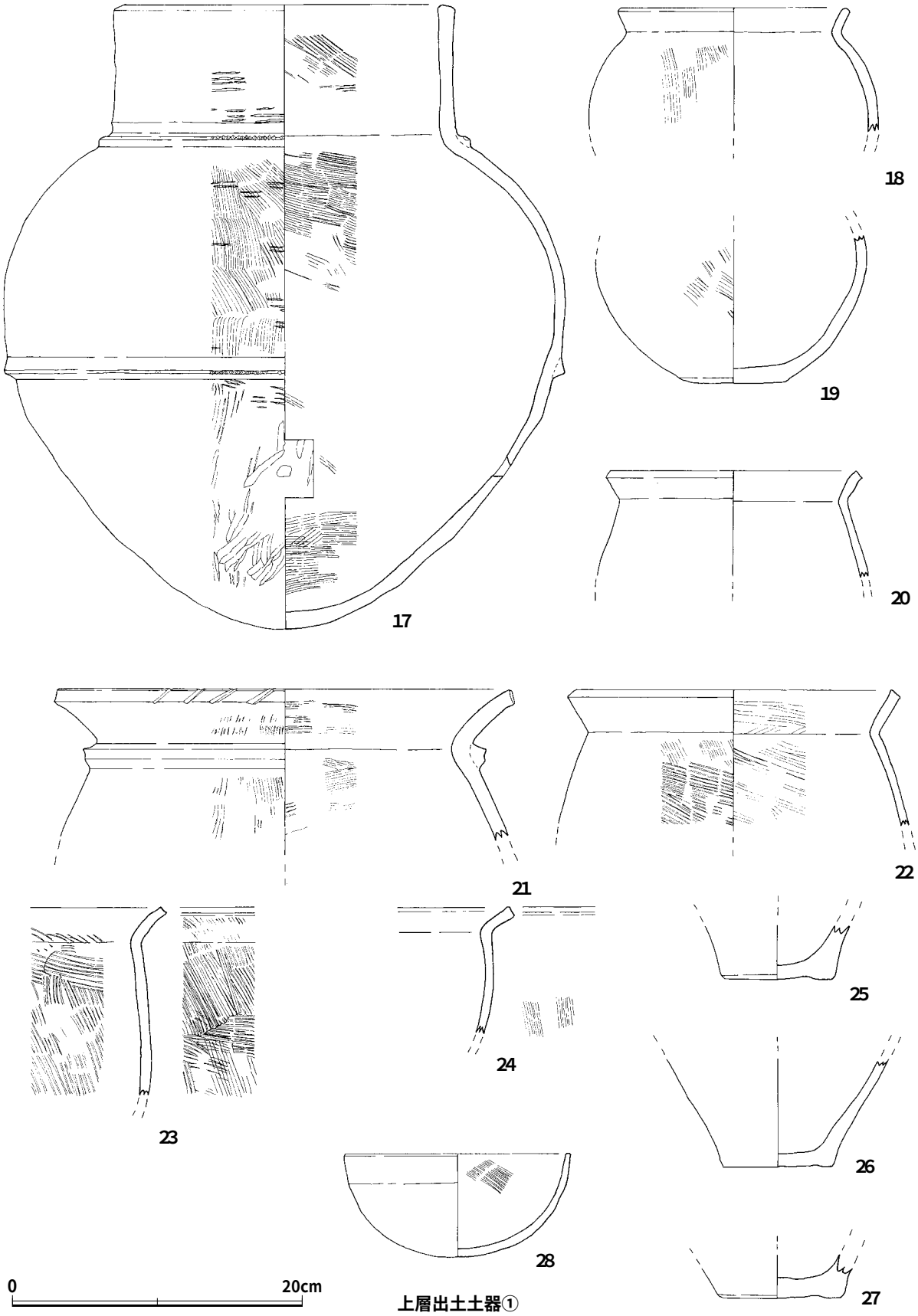
濠（08－ＳＤ１）出土土器（第27図～第29図・第５表）

１～９は下層（７層・８層）出土の土器である。**１**は弥生時代後期後半以降のものと思われる壺の胴部上半片である。口径は12.6㎝を測る。**２**は弥生時代中期後葉の甕口縁部片である。口径21.5㎝を測る。**３**は甕の口縁部である。口縁部内外面ともにハケメをナデ消しているが，内面にハケメ痕が残る。弥生時代後期中ごろから後葉ごろのものか。口径は20.2㎝を測る。**４**も弥生時代後期中ごろから後葉ごろのものと思われる甕口縁部片である。内外面ともにハケメ調整の後にヨコナデおよびナデによる調整が施されている。口径24㎝を測る。**５**は弥生時代中期後葉から末の壺底部である。底径5.5㎝を測る。緻密な胎土で大きな砂粒も含まないことから，丹は残っていないが須玖Ⅱ式新段階の丹塗り壺と思われる。**６**は灰白色の薄作りの坏である。古墳時代初頭の高坏の坏部であると思われる。口径は15.5㎝を測る。外面には横方向のミガキ調整が施されている。**７**は弥生時代中期後葉から末の丹塗り高坏の坏部である。内面には成形時のシボリ痕が残る。外面は坏部との境縦方向のヘラミガキ痕が残る**８**は弥生時代中期前半の蓋である。摘み部中央が凹み古い様相を呈している。**９**は弥生時代後期後葉から終末にかけての支脚である。内面は板状工具による強いナデ痕が残り，外面は指による調整の後ナデによる調整が施されている。

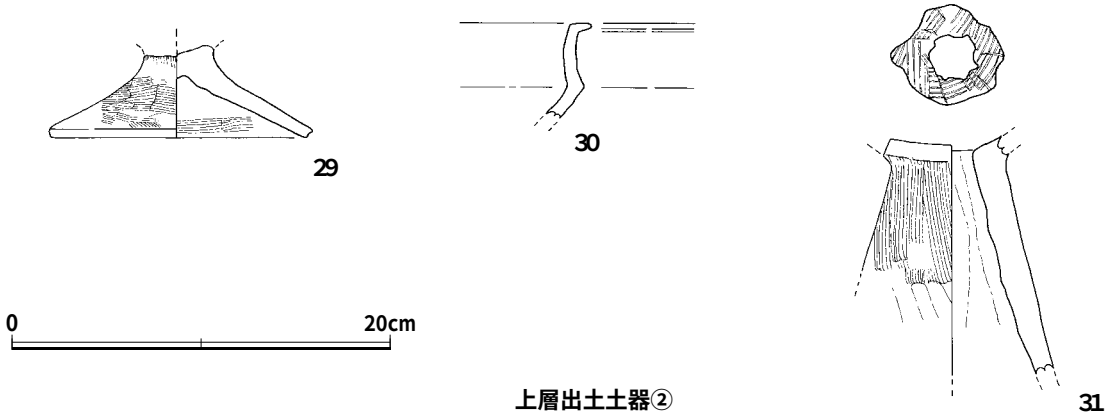
10～16は中層（４層～６層）出土の土器である。**10**は壺上半片である。頸部に断面三角形のしっかりとした突帯が巡る。胴部は内外面ともハケメ調整が施され，外面はその上からナデが行われている。口径19.4㎝を測る。弥生時代後期中ごろから後葉にかけてのものである。**11**は弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての小形丸底壺である。内外面とも平滑なナデにより仕上げているが，外面胴部下半にはハケメが残る。また，胴部中位には２㎝大の丸い穿孔がみられ，内側から打ち欠いているのが分かる。**12**は口径22.0㎝を測る甕の胴部上位片である。内外面ともにハケメ調整の後にナデ・ヨコナデで仕上げている。弥生時代後期後葉から末にかけてのものである。**13**は弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけてと思われる甕口縁部である。胴部内面はハケメ調整のままで，外面はハケメ調整の後にナデが施されている。**14**は古墳時代初頭の高坏坏部である。口径20.8㎝を測る。全体に風化を受けているが，口縁部にはわずかにハケメ調整痕が残る。含まれる砂粒は微細で精良な粘土を使用している。**15**は古墳時代初頭の低脚の高坏の脚部である。脚部には３ヶ所に直径５㎜大の穿孔が行われ，縦方向のミガキ痕が残る。この土器も砂粒は微細で精良な粘土を使用している。**16**は弥生時代後期後葉の分厚い作りの器台である。底径15㎝を測る。外面はハケメが施されるが，内面は成形時の粘土紐接合痕や指押さえ痕，絞り痕が残り，受け部を除き調整が施されていない。**17～31**は上層（１層～３層）出土の土器である。**17**は口縁部を一部欠く弥生時代終末期の直口壺である。底は丸底である。口径23.6㎝，胴部径38.7㎝を測る。口縁部との界と胴部中位に，浅い刻みを有し鋭さを欠いた断面三角形の突帯が巡る。全面タタキによる成形後，口縁部はナデ・ヨコナデで，胴部外面中位はハケメで，胴部外面下位はナデツケで，胴部内面はナデで仕上げている。胴部下位に廃棄の際に穿たれたと思われる直



第27図　濠（08－SD１）出土土器①（１/４）



第28図　濠（08－SD１）出土土器②（１/４）



第29図　濠（08－SD１）出土土器③（１/４）

径１㎝の孔が見られる。

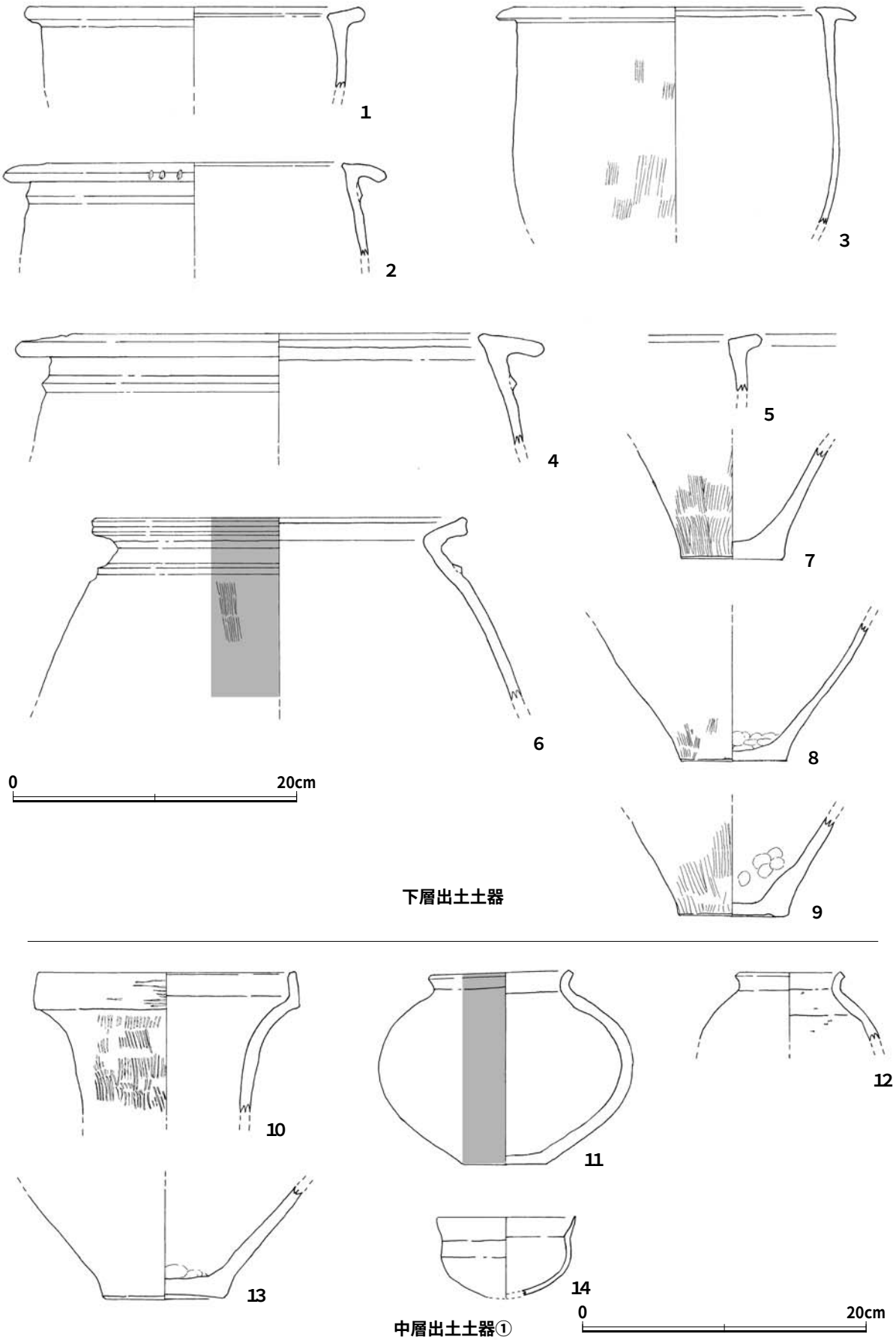
18は口径16.0㎝を測る弥生時代後期後葉頃の短頸壺である。内外面ともに風化が進んでいるが内面にはナデ痕を外面にはハケメを残す。**19**は外底部がわずかに凸レンズ状に張り出している弥生時代後期後葉の壺である。現存部位では接合しないが，色調や胎土が**18**とよく似ており同一固体と思われる。内面には平滑なナデ調整が，外面にはハケメ調整が施される。**20～24**は甕の胴部上位片や口縁部片である。**20**は弥生時代後期後葉から末のもので口径17.0㎝を測る。全面に風化を受けている。**21**は口縁部径26.3㎝を測る。面取りされた口唇部には斜位の刻みが，頸部には中央がやや窪んだ断面四角形の突帯が巡る。弥生時代後期後葉のものと思われる。**22**は口径23.1㎝を測る。内外面ともにハケメ調整が施され，その後胴部内面にはナデが口縁部にはヨコナデが行われる。弥生時代後期後葉から末のものである。**23**は風化をほとんど受けておらず調整痕が良く残る胴部上位片である。内外面ともに強いハケメ調整が施され，その後口縁部にはヨコナデが施される。内面胴部最上位にはヨコナデ痕の間に砂粒の移動が面的に見られる部分があり，ヨコナデの前にケズリが行われたことも考えられる。**24**は豊前系の跳ね上げ口縁甕である。口縁部が立ち上がり気味になっていることから弥生時代後期初頭のものと思われる。風化をしているが，外面にはハケメが施され使用によるものと思われる煤が付着している。**25～27**は弥生時代中期前半期の甕の底部片である。**25**は底径7.4㎝を測る。全面が風化をしている。**26**は底径7.5㎝を測る。全面が風化をしている。**27**は底径8.5㎝を測る。内底部に成形時の指押さえの痕が残る。調整は内外面ともナデが見られる。**28**は白っぽい色調を呈する弥生時代末から古墳時代初頭にかけての鉢である。外面には手持ちヘラ削り痕が残り，内面はナデにより平滑に仕上げが行われている。口径16.5㎝を測る。**29**は古墳時代初頭の低脚の高坏脚部である。内外面ともにハケメ調整が施され，その後外面坏部との接合部はハケメをナデ消している。平面形は正円を描く。**30**は弥生時代後期中ごろの高坏口縁部である。口縁端部が水平に横に開いている。風化しているが，ナデ・ヨコナデが認められる。**31**は器台である。内面には絞り痕が残る。外面は，縦方向のハケメによる調整の後下部のハケメをナデ消している。受け部内面には強いハケメが残る。

落ち込み（08－落ち込み）５区出土土器（第30図～第32図・第６表）

５区では下層（⑧層），中層（⑦層），上層（①～⑥層）と分けて取り上げを行った。**１～９**は下層

出土土器である。**1**は口径24.0㎝を測る甕口縁部である。逆Ｌ字形の短めの口縁が付く。弥生時代中期前葉のものと思われる。**2**は口径27.0㎝を測る甕口縁部である。鋤先形の口縁近くの胴部上位に，鋭さを欠きつぶれた断面三角形の突帯が付くことから弥生時代中期後葉のものと思われる。内外面ともに平滑なナデ調整やヨコナデによる調整が行われている。また，調整後口唇部に４ヶ所の刻み（註１）が入れられている（図では明瞭な刻み３個を示した）。**3**は口径25.4㎝を測る弥生時代中期後葉の甕胴部上位である。逆Ｌ字口縁は垂れ気味である。内外面ともに風化を著しく受けており，胴部のハケメと口縁部のヨコナデがかろうじて分かる。**4**は逆Ｌ字口縁が垂れ胴部上位の断面三角形の突帯に鋭さが無くなっていることから，弥生時代中期後葉の甕と思われる。胴部外面の調整は風化のために不明であるが，胴部内面は平滑なナデが，三角突帯から口縁部にかけてはヨコナデで仕上げている。口径37.4㎝を測る。**5**は逆Ｌ字形の短めの口縁が付く弥生時代中期前半の甕である。胴部内外面ともにナデが口縁部にはヨコナデが施されている。**6**は胴が張り口縁部が短く外反する豊前系と思われる甕である。口径は26.4㎝を測り，色調は灰白色である。口縁部下に断面三角形の突帯が巡る。全面が風化しているが，外面胴部にハケメが薄く残る。また，口縁部に一部丹が付着していることから，丹塗り土器の可能性もある。砂粒に金雲母が含まれていない。**7**は弥生時代中期前半の甕底部である。底径7.5㎝を測る。外面はハケメ，内面はナデによる調整が施されている。内外面ともに煤が付着している。**8**は弥生時代中期前葉から中ごろにかけての甕底部片である。内面はナデによる調整を行っているが指押さえ痕が多く残り，外面はハケメ調整をナデ消している。器厚を薄く仕上げている。**9**は弥生時代中期前半の甕底部片である。底径は7.9㎝を測る。外面ハケメ調整をナデ消し内面はナデによる調整を行っているが，内面には成形時の指押さえ痕が残る。

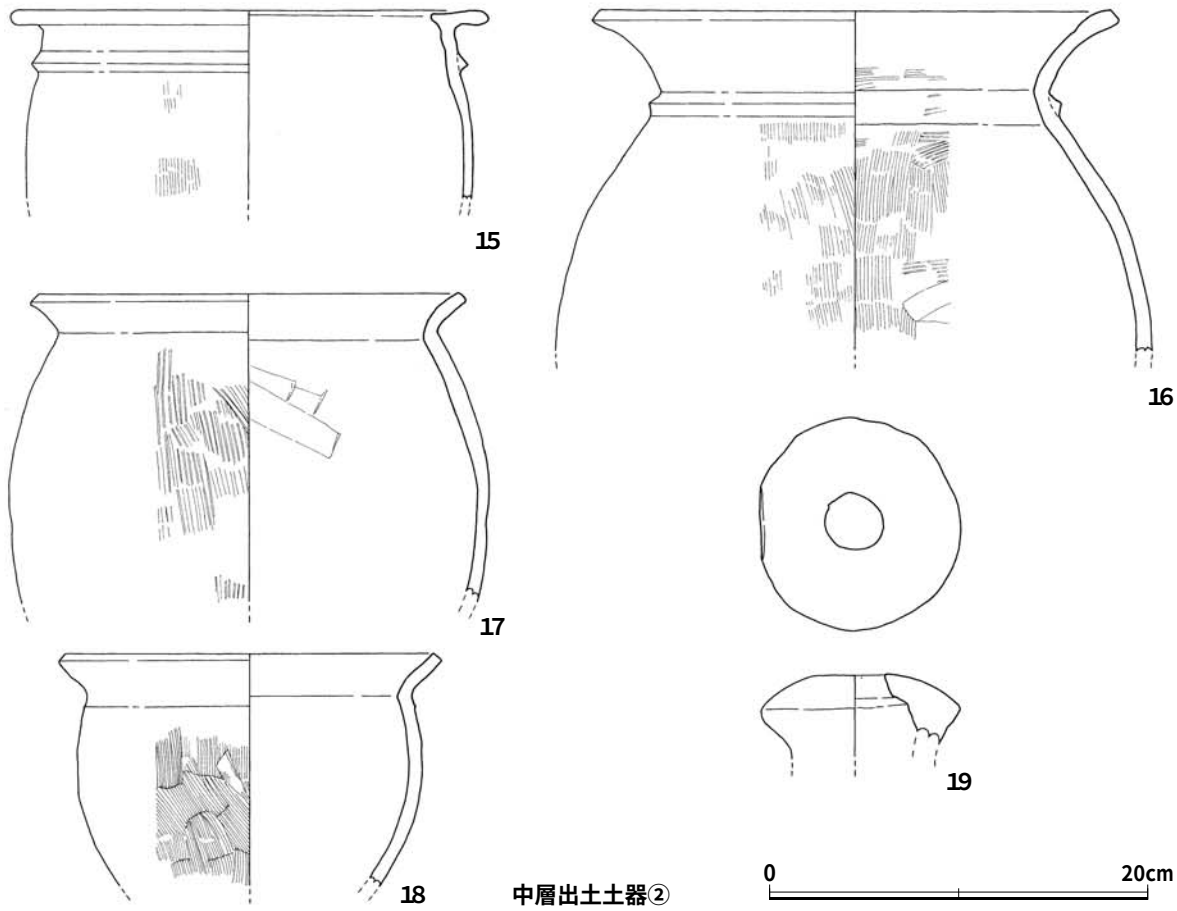
10～19は中層出土の土器である。**10**は弥生時代後期前半期の複合口縁壺である。口径は18.0㎝を測る。口縁部には横方向の頸部には縦方向のハケメ調整後，口縁部はヨコナデによってハケメを消している。**11**は口縁部を一部欠損する弥生時代後期初頭から前葉にかけての短頸壺である。口径10.1㎝，底径3.0㎝，器高13.6㎝を測る。外面は風化により調整痕を確認することはできないが，頸部にわずかに丹が残っており，もともとは丹塗り土器であったと思われる。内面は平滑なナデにより仕上げられている。端整な作りの小壺である。**12**は古墳時代Ⅰ期（註２）のものと思われる短頸壺の胴部上位片である。口径7.2㎝を測る。胴部の内面はヘラ削りのままで，外面は平滑なナデにより調整されている。また，口縁部はヨコナデによって平坦に仕上げられている。**13**は弥生時代中期前半期の壺底部である。わずかに上げ底で底径8.8㎝を測る。風化が激しく調整痕は残っていないが内底部に成形時の指押さえ痕がわずかに残る。胎土に金雲母をまったく含んでいない。**14**は古墳時代Ⅰ期の布留系小形丸底鉢である。口径9.6㎝，胴部径9.2㎝を測り，大きな砂粒を含まない精良な粘土で薄く作られている。風化を受けているが，内面にはナデ痕が外面には手持ちヘラ削り痕と思われる段が残る。**15**は弥生時代中期中ごろの口径25.4㎝を測る甕胴部上位片である。逆Ｌ字形の口縁の下には断面三角形の突帯が巡る。外面は縦方向のハケメをナデ消し，内面はナデにより平滑に仕上げる。**16**は弥生時代後期中ごろから後葉にかけての口径28.0㎝を測る甕胴部上位片である。胴部は縦方向のハケメが残り，内面にはハケメ調整の後のヘラナデが見られる。灰白色の胎土で砂粒を多く含んでおり異質な感じを



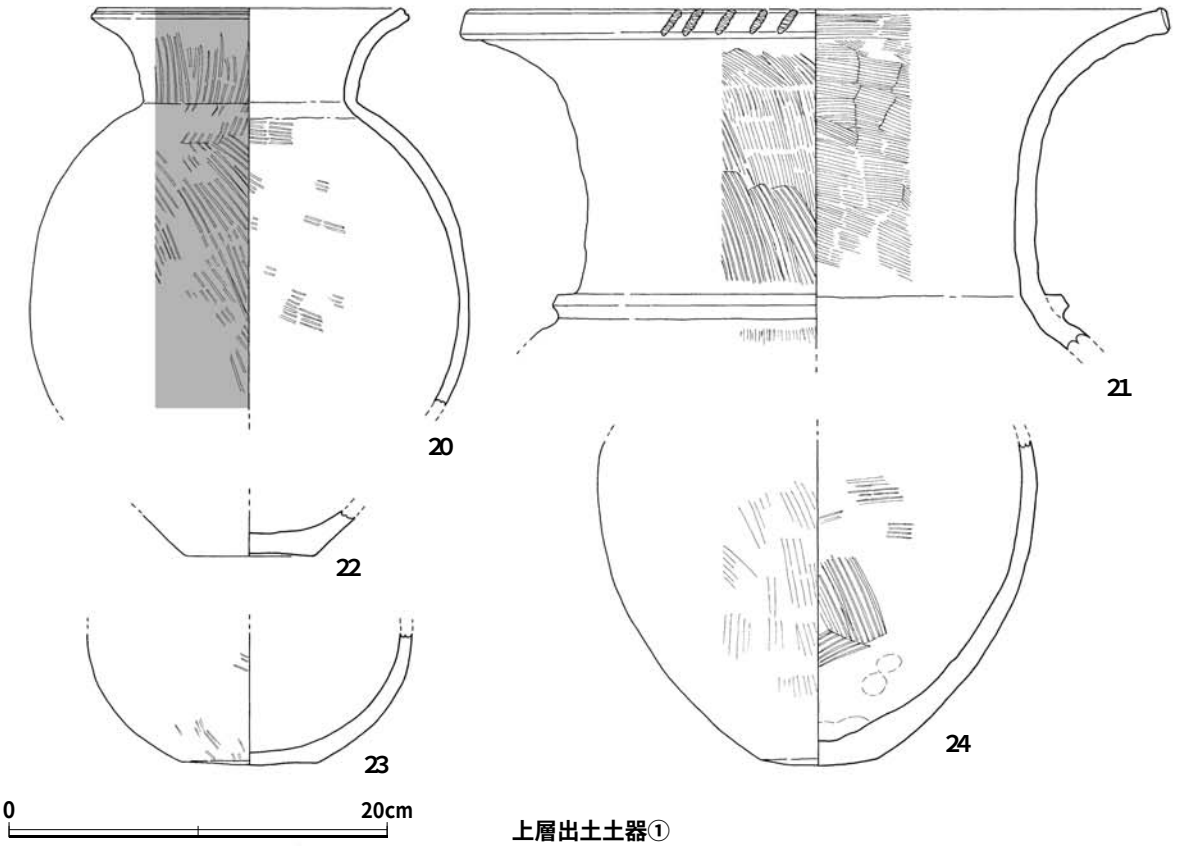
第30図　落ち込み（08－落ち込み）５区出土土器①（１/４）

受ける。搬入品と思われる。**17**は弥生時代後期前葉から中ごろにかけての口径23.0㎝を測る甕胴部上位片である。胴部外面にはハケメが残るが内面はヘラナデとナデにより平滑に仕上げられている。胴部中位に穿孔がみられる。**18**は弥生時代後期後葉ごろのものと思われる小型の甕胴部上位片である。口径20.2㎝を測る。胴部外面には細かなハケメが残りその上に煤が付着している。内面には平滑なナデが，口縁部にはヨコナデが施され口唇部は面取りされシャープに仕上げられている。胴部下半は欠損しているが台付甕の可能性もある。**19**は弥生時代後期後葉から末にかけての支脚である。横から見ると複合口縁壺の口縁部に似ており特異な形をしている。上面には径およそ３㎝の孔が穿たれ，外面はナデにより平滑に仕上げられている。また，上面の端部には使用時に生じたと思われる摩滅痕が見られる。同一箇所のみ摩滅が見られることから，他の支脚と同じように使用時の向きが決まっていたものと思われる。

20～**30**は上層出土の土器である。**20**は口径16.9㎝，最大胴部径23.1㎝を測る弥生時代後期後葉の壺である。内面の胴部最上位には頸部との接合痕が残る。調整は内外面とも目の粗いハケメが残るが，内面はハケメ調整の後ナデ消しを行っている。外面胴部には一部丹が残る。**21**は口径37.5㎝を測る弥生時代後期後葉ごろの広口壺頸部片である。内面の胴部最上位には頸部との接合痕が残る。頸部には内外面にハケメが残るが，内面はその後ナデ消しを行っている。外面の胴部との界には断面四角形の突帯が巡り，口唇部にはハケメを施した板状工具と同じと思われる工具で，斜位のしっかりとした刻目を入れている。**22**は弥生時代中期の壺の底部片である。底径は6.6㎝を測る。全面が風化をしているために調整については不明である。ざらつく砂質の胎である。**23**は弥生時代後期前半期のものと思われる壺胴部下位片である。底径は7.2㎝を測る。内外面ともにハケメ調整の後にナデ消しが行われ，平滑に仕上げられている。**24**は弥生時代後期後葉から末にかけての壺の胴部下位片である。レンズ状に張り出した底部は器壁が厚く仕上がっている。調整は内外面ともにハケメ調整の後ナデ消しを行っているが，ハケメが部分的に残っている箇所もある。**25**は弥生時代後期中ごろから後葉にかけての甕の胴部上位片である。口径は20.0㎝を測る。胴部内面はていねいなナデにより平滑に仕上げられている。胴部には横位のタタキ痕が残る。口縁部にわずかに丹が残ることからこの甕は丹塗りであったと思われる。**26**は口径22.0㎝を測る弥生時代後期後半期の甕胴部上位片である。外面にはハケメが残るが，内面は風化が著しい。廃棄された後の状況（内面が上で乾湿にさらされた等）によるものであろうか。**27**は弥生時代後期後葉から末にかけての甕口縁部である。内外面ともに風化が激しいが一部ハケメが残る。**28**は弥生時代後期中ごろのものと思われる甕底部片である。底径7.9㎝を測る。外面は風化しているが薄くハケメが残る。内面はヘラ状工具によるナデで平滑に仕上がり，内底部には成形時の指押さえ痕が残る。**29**は弥生時代後期後葉から末にかけてのレンズ状を呈する甕底部である。底径６㎝を測る。外面は底部にまでハケメ調整が行われその後ナデ消されている。内面はていねいなナデで平滑に仕上げられている。**30**は受け部と裾部に一部剥落が見られるがほぼ完形の器台である。受け部径18.7㎝，裾部径20.3㎝，器高20.4㎝を測る。外面はハケメ調整の後受け部と裾部下半はナデ消しが行われる。内面裾部はヘラ状工具によるナデツケの後ナデ仕上げを行っている。弥生時代後期後葉のものか。

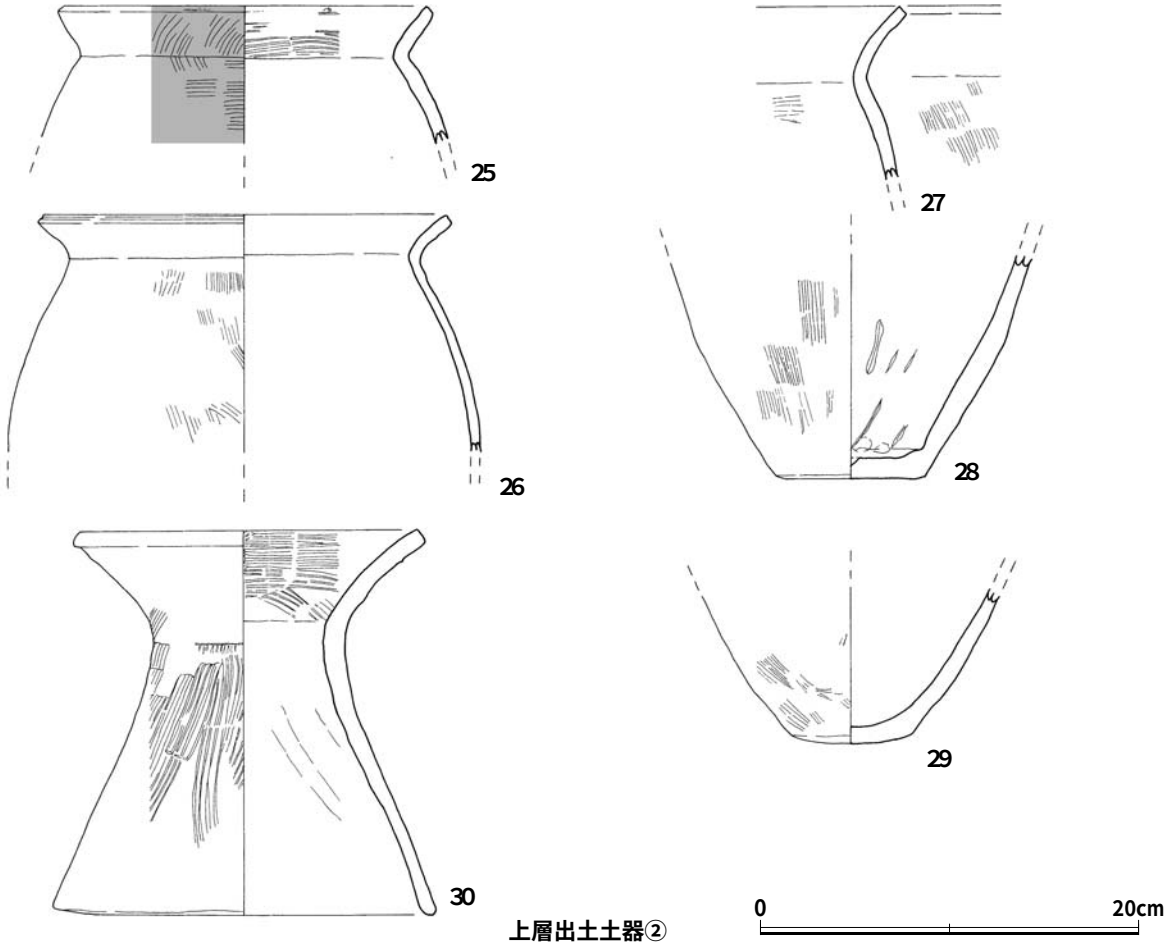


中層出土土器②



上層出土土器①

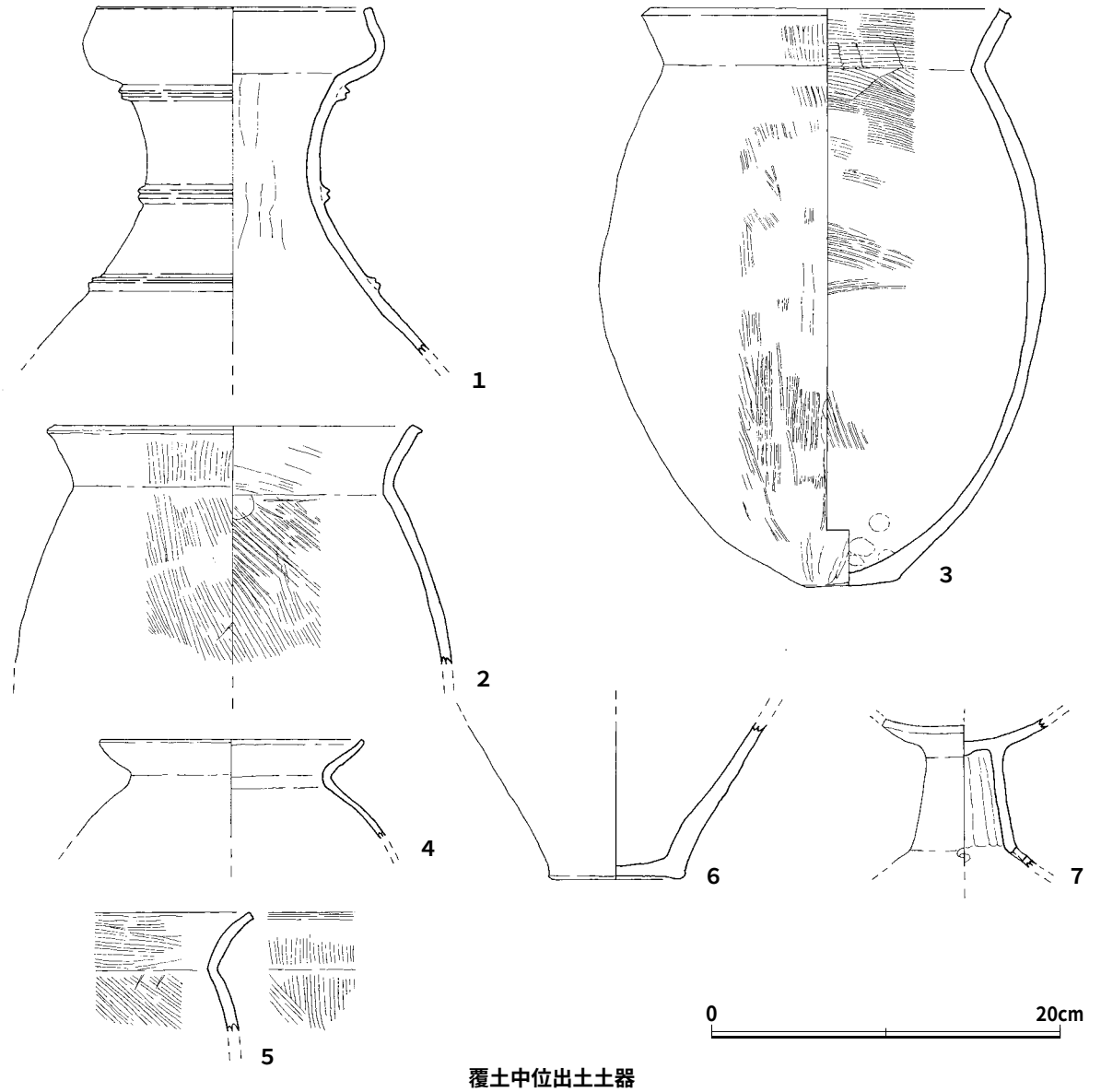
第31図　落ち込み（08－落ち込み）５区出土土器②（１／４）



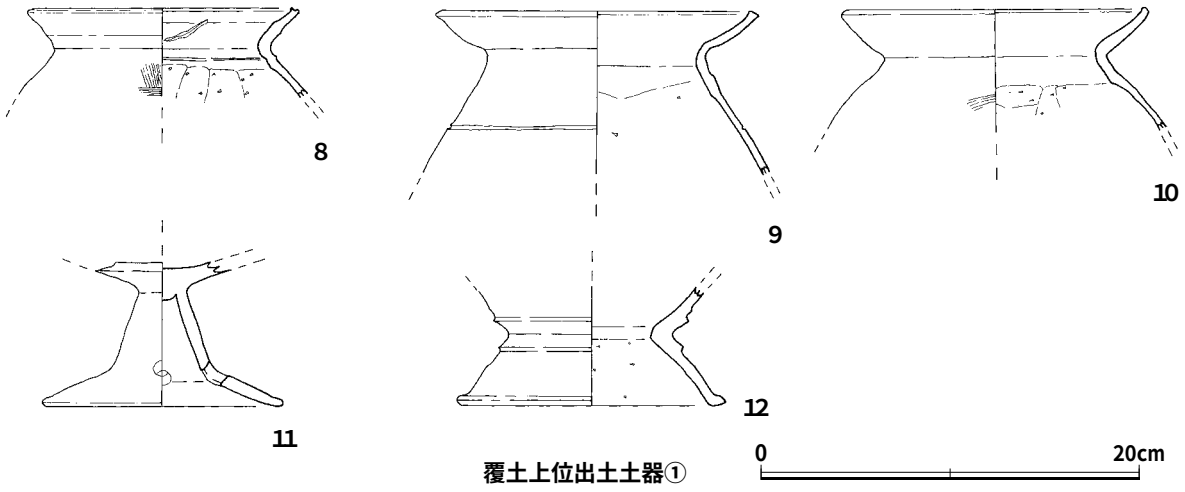
第32図　落ち込み（08－落ち込み）５区出土土器③（1/4）

落ち込み（08－落ち込み）３区出土土器（第33図，第34図・第６表）

３区では落ち込みの底まで掘削をしておらず，覆土も分層ができなかったので中位（遺構確認面下30㎝～掘削時の最下部である遺構確認面下50㎝）と上位（遺構確認面～遺構確認面下30㎝）に分けて取り上げを行った。**1～7**は覆土中位出土の土器である。**1**は弥生時代中期末の袋状口縁壺である。口径は16.0㎝を測り大型である。頸部には３条の断面M字形の突帯が巡る。本来は丹塗りの土器であろうが全体が激しい風化のために器表が剥落しており，痕跡を探すことはできなかった。頸部内面には絞り痕が残る。**2**は弥生時代後期後葉から末にかけての口径21.8㎝を測る甕胴部上半部である。胴部は内外面ともにハケメがはっきりと残るが，口縁部はヨコナデによりハケメを消している。**3**は弥生時代後期後葉から末の甕である。口径21.0㎝，底径5.6㎝，器高32.3㎝を測る。胴部は内外面ともにハケメ調整を行っており，内面はナデで外面下半は縦位のナデツケによって仕上げている。内底部には指押さえ痕が残る。**4**は古墳Ⅲ期の布留式系甕胴部上半片である。口径は15.2㎝を測る。全面風化のために調整痕等は観察できなかった。**5**は弥生時代後期後葉から末にかけての甕口縁部である。内外面にハケメが残る。**6**は弥生時代中期前葉から中ごろにかけての甕底部片である。底径は7.8㎝を測り，内外面ともにナデで平滑に仕上げられている。**7**は古墳Ⅱ期ごろの高坏の脚部である。器表

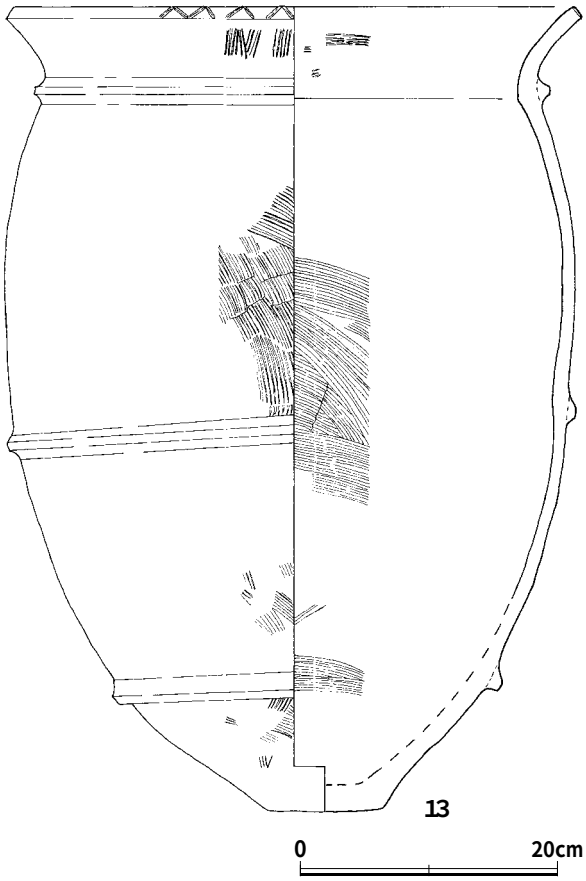


覆土中位出土土器



覆土上位出土土器①

第33図　落ち込み（08－落ち込み）３区出土土器①（1／4）



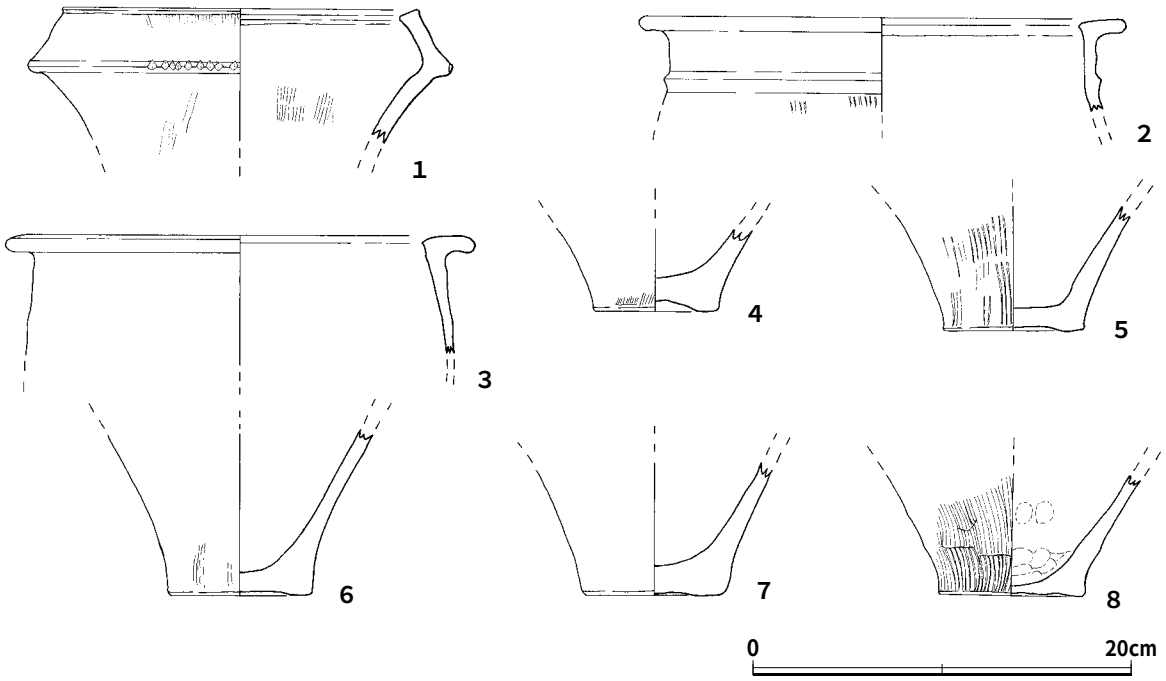
覆土上位出土土器②

第34図　落ち込み（08－落ち込み）３区出土土器②（1/6）

は風化が激しいが，内面には絞り痕が明瞭に残る。裾部上位に３箇所の穿孔が見られる。**8～13**は上位出土土器である。**8**は古墳Ⅰ期から古墳Ⅱ期にかけての布留式甕である。口径は14.4㎝で灰白色を呈する。胴部内面には左→右のヘラ削りが行われ，外面は横位のハケメをナデ消して平滑に仕上げる。**9**は古墳時代前期の布留式系の甕で口径17.2㎝を測る。胴部上位に一条の沈線が巡る。内面は胴部上位に左→右のヘラ削り痕が見られる。外面の調整は風化により不明である。薄く作られており焼成も良好である。**10**は布留式系の甕胴部上半である。口径16.4㎝を測る。胴部内面には左→右のヘラ削り痕が見られる。胴部最上位もヘラ削りが行われているが，ナデにより仕上げられている。外面はハケメの痕がわずかに残る箇所もあるが，全体をナデにより平滑に仕上げる。古墳Ⅱ期ごろのものか。**11**は低脚の高坏脚部である。底径12.8㎝を測る。内外面とも風化が激しく調整については不明である。裾部との界に３ヶ所の穿孔がある。筒部にふくらみを持ち裾が広がる形から古墳Ⅱ期のものと思われる。**12**は山陰系の鼓形器台脚部である。径は13.6㎝を測る。突帯にはしっかりとした稜を持ち，筒部外面の断面はU字形を呈する。内面は左→右のヘラ削りのままであるが，外面はナデにより平滑に仕上がる。**13**は弥生時代後期後葉ごろの大型甕（甕棺）である。口径46.0㎝，底径9.2㎝，胴部最大径45.4㎝，器高64.5㎝を測る。胴部に２条，頸部に１条，計３条の断面四角形の突帯が巡る。口縁部にはハケメを施した板状工具と同一と思われる工具で，向きを変えて斜位の刻目を入れている。外面はハケメが残り，内面は部分的にハケメが残るがナデにより平滑に仕上げる。

造成土（４ｂ層，４ｂ①層）出土土器（第35図・第７表）

1～7は４ｂ①層出土，**8**は４ｂ層出土土器である。**1**は弥生時代後期後半ごろの豊前系の複合口縁壺である。口径18.6㎝を測る。屈曲部分に刻目を有する。内外面ともにハケメ調整後にナデ消しを行い平滑に仕上げている。**2**は弥生時代中期前半から中葉にかけての甕口縁部である。口径26.0㎝を測る。口縁部下の断面三角突帯は鋭さに欠く。内面はナデにより平滑に仕上げる。外面は風化のため



第35図　造成土（４ｂ層，４ｂ①層）出土土器（1/4）

にハケメ痕がかすかに残る程度である。**3**は弥生時代中期後葉の甕口縁部である。口径25.0㎝を測る。風化が激しく調整については不明である。**4**は弥生時代中期前葉の上げ底の甕底部である。底径は6.7㎝を測る。風化が激しく，調整については外面下端にハケメが残るのみである。**5**も弥生時代中期前葉の上げ底の甕底部である。外面はハケメ調整の後ナデ消しが行われ，内面はナデにより平滑に仕上げられている。底径は7.5㎝を測る。**6**は弥生時代中期前半の甕底部である。底径7.8㎝を測る。内外面とも風化が激しいが，外面下端部にはハケメが，内面には煤が残る。**7**は弥生時代中期前半の甕底部である。底径は7.8㎝を測る。この土器片も風化により調整痕を残していないが，内面には煤が残る。**8**は弥生時代中期中ごろから後葉にかけてのものと思われる甕底部である。外面にはハケメが残り，内面は指押さえ痕の上にナデが施され平滑に仕上げられている。底径7.8㎝を測る。

箱式石棺掘り方出土土器（第22図・第８表）

２区から検出した箱式石棺墓の掘り方から出土した土器である。**1**は弥生時代中期後葉から末にかけての丹塗りの広口壺頸部片である。外面は風化が激しく調整については不明である。内面も風化しているが，ナデ調整及び丹塗りの痕が残る。**2**は弥生時代中期前葉の甕口縁部である。口径28.2㎝を測る。胴部上位の断面三角形の突帯はシャープである。ナデ・ヨコナデにより内外面ともに平滑に仕上がる。

５区出土埋甕（第24図・第９表）

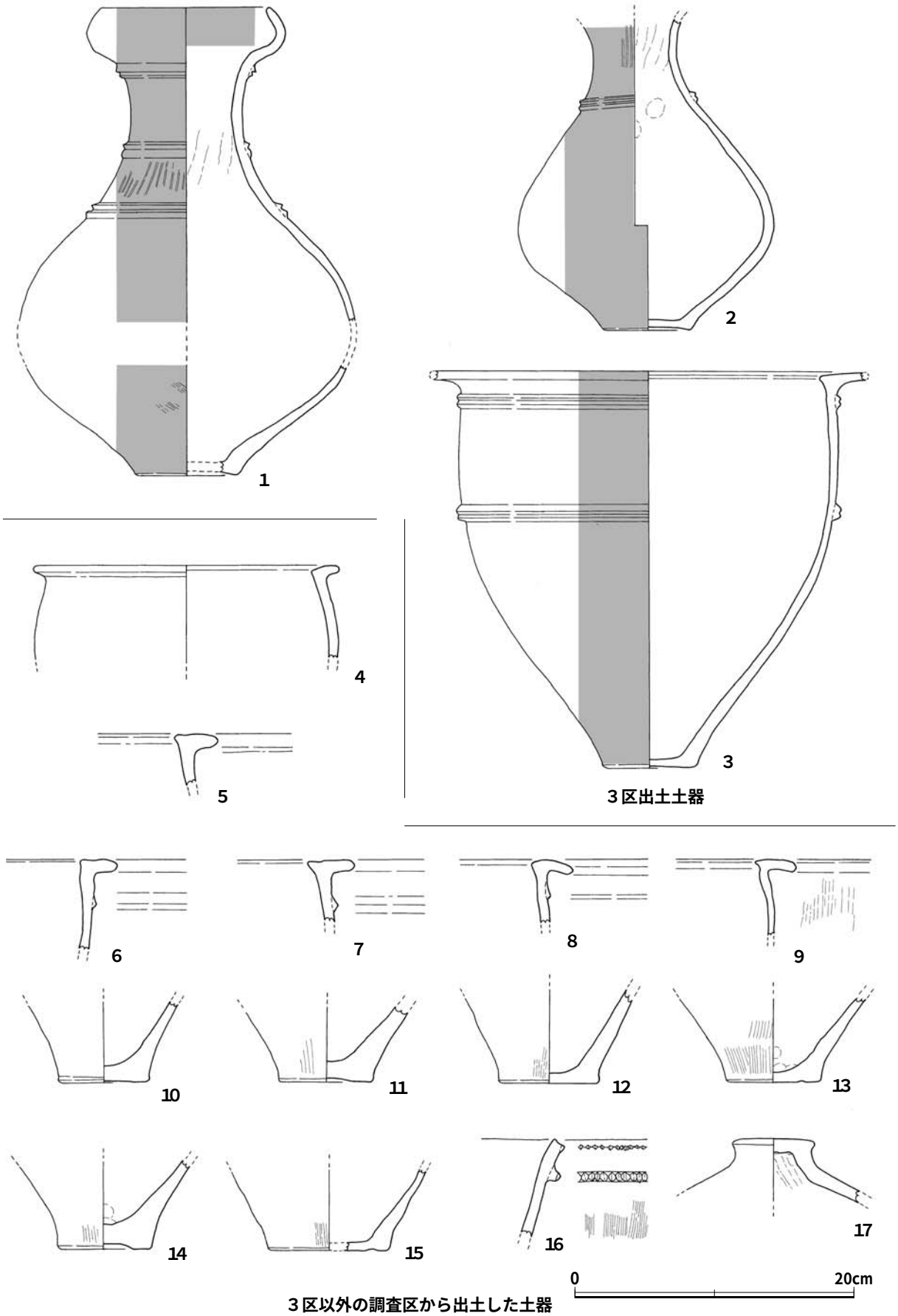
1は５区検出の埋甕である。弥生時代中期前半の壺で内外面ともに激しく風化をしているため調整痕は残っていない。底径は8.3㎝，胴部最大径は32.8㎝を測る。

包含層出土の土器（４ｃ層）（第36図・第10表）

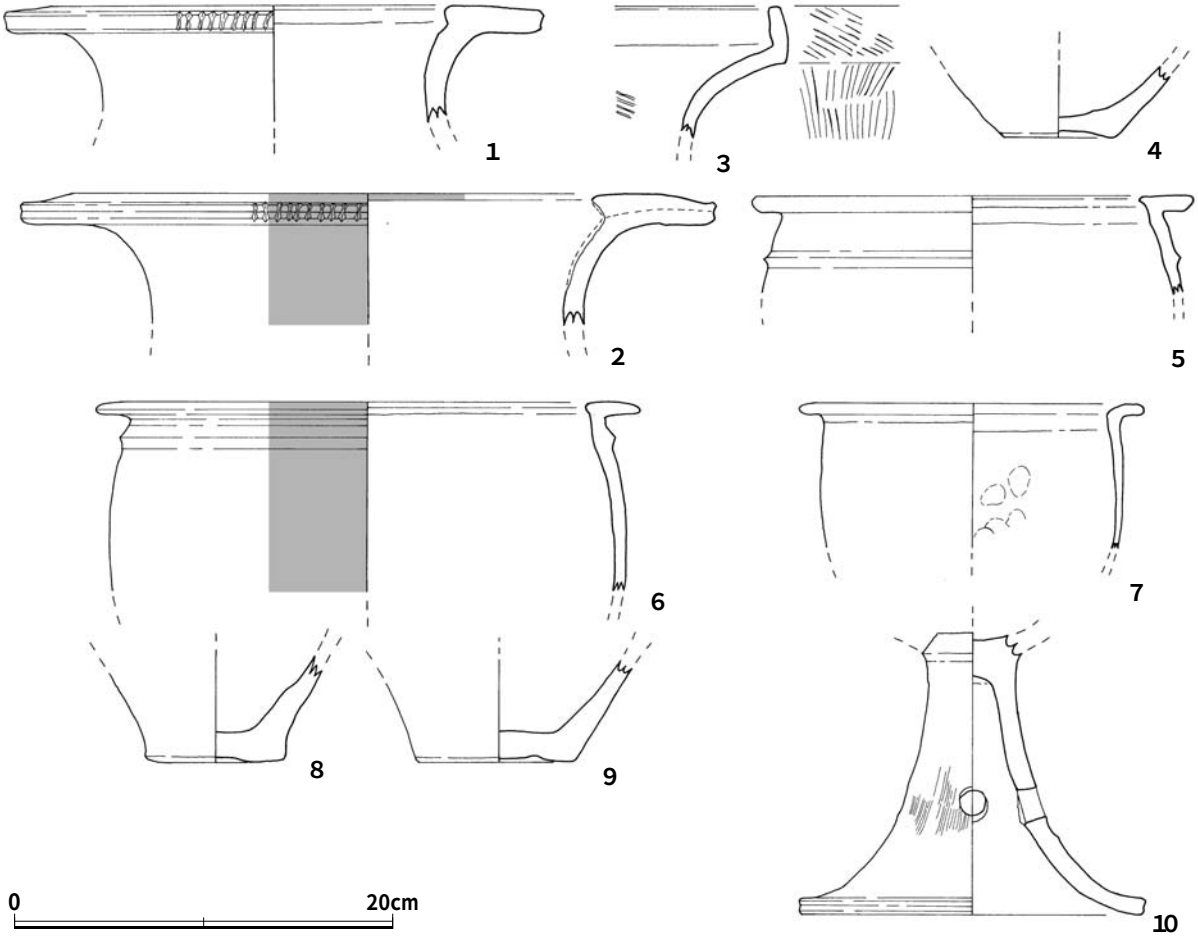
１～17は弥生時代中期の包含層である４ｃ層からの出土土器である。**１～３**は３区から出土した。**１**は口径12.0㎝，底径7.5㎝を測る弥生時代中期末の袋状口縁壺である。頸部には断面M字状の突帯が３条巡る。突帯間には縦方向の暗文がわずかではあるが確認できる。胴部下半にはハケメがわずかに残る。内面は風化が激しく器表が溶けているが頸部には絞り痕が残る。丹は口縁部内面まで施してあるのが確認できる。**２**も弥生時代中期末の丹塗りの袋状口縁壺である。口縁部と胴部の一部を欠損する。頸部に一条の断面M字突帯が巡る。内面は，頸部に絞り痕が，胴部上位に指押さえ痕が残るが，ナデにより平滑に仕上がる。外面は頸部に縦方向の暗文が残り，胴部はナデにより平滑に仕上がる。**３**は弥生時代後葉の丹塗り甕である。底径6.9㎝を測る。胴部中位と最上位に各１条の断面M字突帯が巡る。内外面ともにナデにより平滑に仕上げる。これら**１～３**の土器は落ち込み（08－落ち込み）の落ち際から潰れた状態で出土した。このことから，これらの３点の土器は落ち込みに関わる祭祀で使われた遺物の可能性もある。**４～９**は甕の口縁部片である**４**は口径22.0㎝を測り内面には平滑なナデ痕が残る。６区南壁トレンチ出土。弥生時代中期前葉のものである。**５**は胴部内外面にナデ痕が残る。弥生時代中期前葉のものである。４区東壁トレンチ出土。**６・７**は口縁部下に断面三角形の突帯が１条巡る。弥生時代中期中葉のものと思われる。４区東壁トレンチ出土。**８・９**は鋤先形口縁を呈する弥生時代中期後葉のものである。**８**は４区東壁トレンチ出土。**９**は５区出土。**10**は底径6.0㎝を測る弥生時代中期前半の甕底部である。１区出土。**11～14**は５区出土の甕底部片である。**11**は底径6.８㎝を測る。**12**は底径7.2㎝を測る。内面は風化のために砂粒が浮いている。**13**は底径7.0㎝を測る。外面にはハケメが残る。**14**は上げ底で底径6.8㎝を測る。**15**は弥生時代中期中ごろから後葉にかけての甕底部である。外面にはわずかにハケメが残る。５区出土。**16**は断面コの字の突帯が口縁下に１条巡り，この突帯と口唇部外面に刻みが入る甕である。胎土はざらつき金雲母を含まない。器形も土質も異質のもので，豊後地方の弥生時代中期初めごろに見られる下城式の甕と思われる。類例は昨年度の石田高原地区の調査で１点出土している。**17**は弥生時代中期中ごろから後葉にかけての蓋である。内面には絞り痕が残る。

包含層出土の土器（４ａ層）（第37図・第11表）

１～10は弥生時代後期の包含層である４ａ層からの出土土器である。**１**は弥生時代中期後葉から末の広口壺口縁部片である。28.6㎝を測る。鋤先形口縁の端部には刻みが入る。４区東壁トレンチ出土。**２**は弥生時代中期末の丹塗り鋤先形口縁壺の口縁部片である。口径36.8㎝を測る。口縁部端部には刻みが入る。３区出土。**３**は弥生時代後期前葉の複合口縁壺である。内面はナデにより平滑に仕上がるがハケメがわずかに残る。４区出土。**４**は上げ底を呈する弥生時代中期前半の壺底部片である。底径5.7㎝を測る。内外面ともに平滑なナデにより仕上げられる。４区出土。**５**は弥生時代中期中ごろの甕口縁部片である。口径23.6㎝を測る。内面は風化で調整については不明だが，外面はナデにより平滑に仕上がる。３区出土。**６**は弥生時代中期後葉から末にかけての甕口縁部片である。風化によりほとんど剥げてしまっているが，口縁部に丹が残ることから，丹塗りの甕であったと思われる。３区出



第36図　包含層出土の土器（４ｃ層）（１/４）

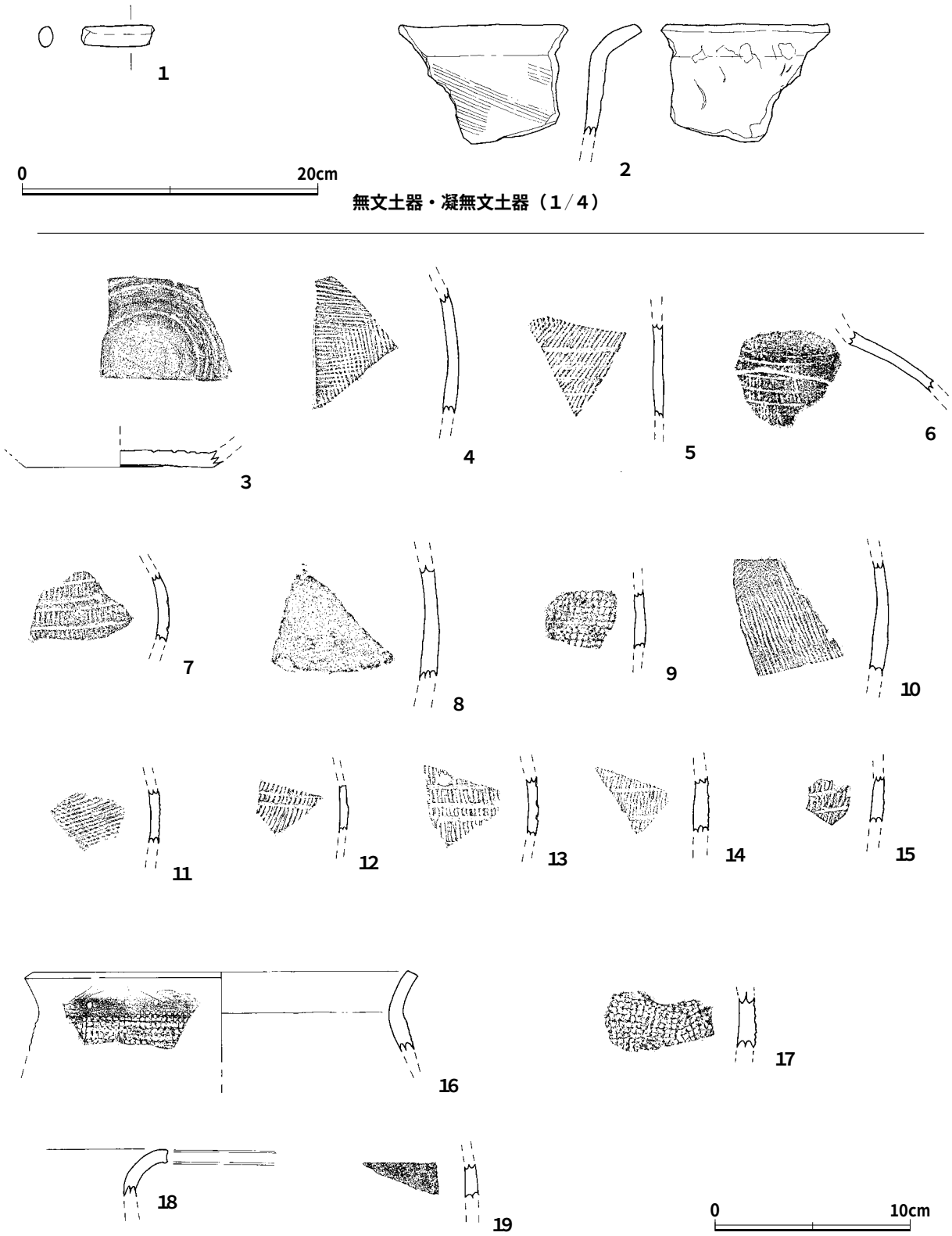


第37図　包含層出土の土器（４ａ層）（1/4）

土。**7**は弥生時代中期後葉の屈曲口縁の甕である。含まれる砂粒も小さく精良な粘土を使っている。内外面はナデで平滑に仕上げられていねいな作りとなっている。３区出土。**8・9**は弥生時代中期前半の甕底部である。**8**は底径7.3㎝を測る。４区出土。**9**は底径8.2㎝を測る。３区出土。**10**は弥生時代後期中ごろの高坏脚部である。裾部径18.4㎝を測る。外面はハケメ調整の後ナデで仕上げている。ナデで平滑に仕上げた内面には絞り痕がわずかに残る。中位には３ヶ所の穿孔がみられる。３区出土。

半島系土器・楽浪系土器（第38図・第12表）

1は無文土器の貼り付け紐状口縁部である。細い紐状であることから小形の器の口縁部と思われる。３区４ｃ層出土。**2**は擬無文土器の口縁部片である。胴部内面にはハケメが残り，胴部外面はヘラ状工具による粘土のナデツケが見られる。口唇部の厚さも均一でなくいびつな感じを受ける。３区４ａ層出土。**3～5**は楽浪系瓦質土器である。砂粒を含まない精良な粘土を使用している。**3**は壺底部片で底径9.2㎝を測る。内面にロクロ痕が残り外面胴部との界はケズリが行われている。**4・5**は細かな縄目タタキ痕が残る壺胴部片である。**6～9**は三韓系瓦質土器である。**6～7**は縄目タタキの上から横位の沈線を入れたものである。**8**は摩滅が激しく縄目タタキは確認できる。**9**は格子目のタタキ痕が残る。**10～19**は陶質土器である。**10・11**は縄目のみが見られるもので，**12～15**は平行タタキの上



無文土器・凝無文土器（1／4）

瓦質土器・陶質土器（1／3）

第38図　半島系土器・楽浪系土器

から横位の沈線が入れられるものである。**16・17**は格子目のタタキ痕が残るものであるが，**16**は壺の口縁部にあたり口径21.7㎝を測る。**18・19**は無文のものである。**18**は壺の口縁部である。

今回の石田高原地区の調査では小片で図示できなかった物も含めて，無文土器や擬無文土器と思われるものが２点，楽浪系瓦質土器が10点，三韓系瓦質土器が４点，陶質土器が20点出土した。

土製品（第39図・第13表）

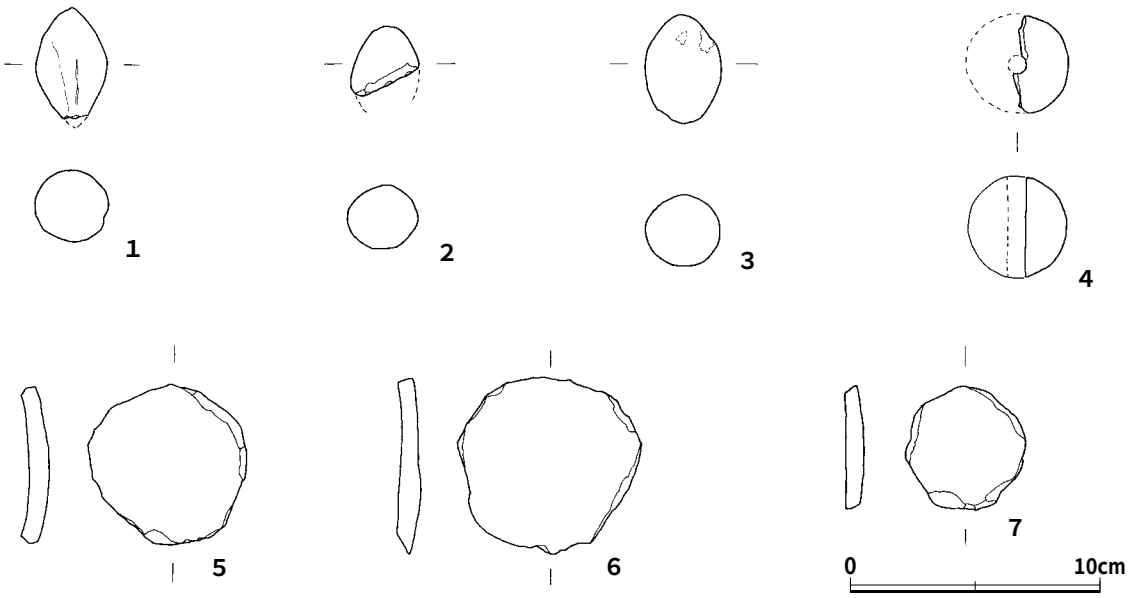
１～３は投弾である。平面は紡錘形で断面は円形である。**１・２**は４ｃ層出土，**３**は４ａ層出土である。また，**３**には金雲母が含まれず角閃石が全体に入る。**４**は径0.7㎝の穿孔がある半欠した丸玉である。１区４ｃ層出土。**５～７**は円盤状土製品である。すべて弥生土器片を打ち欠き作り出している。**７**は打ち欠き部分がかなり摩滅している。**５**は３区４ｃ層から，**６**は３区４ａ層から，**７**は５区３層出土。

須恵器・土師器・磁器（第40図・第14表）

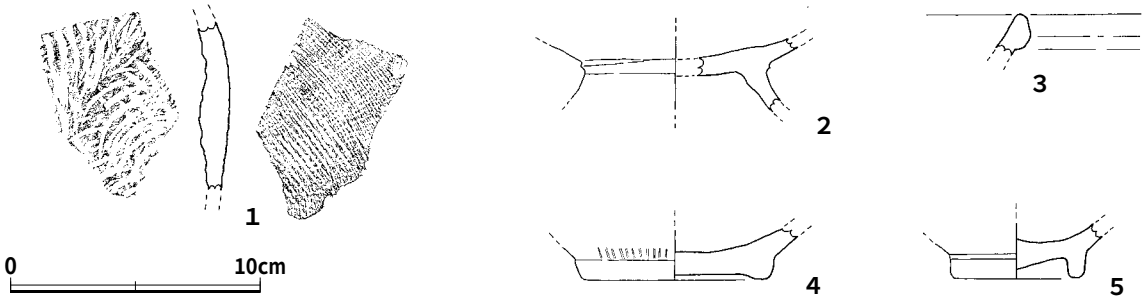
１は須恵器の甕胴部片である内面はあて具痕である青海波文が残り，外面は格子タタキ文を一部スリ消している。１区３ｃ層出土。**２**は９世紀代の土師器椀である。大きく外方にふんばる高台を持つ。３区４ａ層の遺物として取り上げているが，上層からの混入である。**３**は白磁椀Ⅳ類の口縁部である。玉縁状の口縁になっている。６区１層出土である。**４**は白磁椀Ⅳ類の底部片である。飛びガンナ状の削り痕が残る外面体部下半は露胎である。**３・４**の分類は「太宰府市教育委員会『大宰府条坊跡ＸＶ』―陶磁器分類編―2000」に従った。**５**は高台に１条の圏線が巡る染付け椀底部片である。高台内面は兜巾状を呈し畳付けは露胎である。底径5.3㎝を測る。５区２層出土。

ガラス玉・鉄製品・骨角器（第22図３，第41図・第15表）

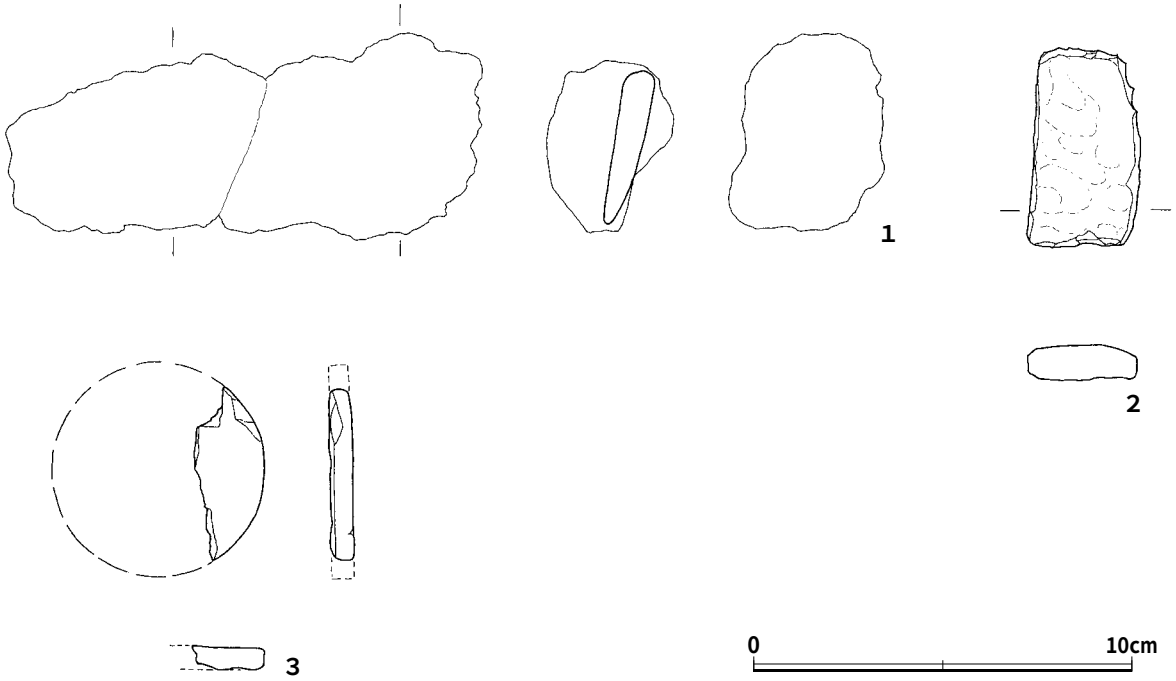
第22図**３**は口径2.0㎜，長さ2.0㎜を測る極小のガラス製管玉である。表面は風化し，光沢のない青灰色で小さな凹凸があり滑らかでない。凹部分には青色がわずかに残り当時の色合いが分かる。端部の片面は切断されたように水平になっているが，もう片面（図では上）は中央が若干膨らむ。調査中に破損した状態で同じ形態の管玉が出土した。棺内の土をふるいにかけて水洗を行ったが他には見つからず合計２点のガラス製管玉が入っていたと思われる。なお，この管玉も非常にもろく，洗浄中に崩れてしまい原型を保っていない。第41図**１**は鉄製品である。折れた断面を見ると片面が薄くなっていることと片側（平面図では左）が大きく膨らんでいることから鎌と思われる。全長は12.5㎝である。２区４ａ層出土。**２**は板状鉄斧もしくは鉄素材と思われるものである。長さ5.3㎝，幅3.0㎝，厚さ9.5㎝，重さ47.5ｇである。２区４ａ層出土。**３**は鯨骨製の紡錘車と思われるものである。穿孔部分も含め全体の３/４が欠損している。表採資料である。



第39図　土製品（1/3）



第40図　須恵器・土師器・磁器（1/3）

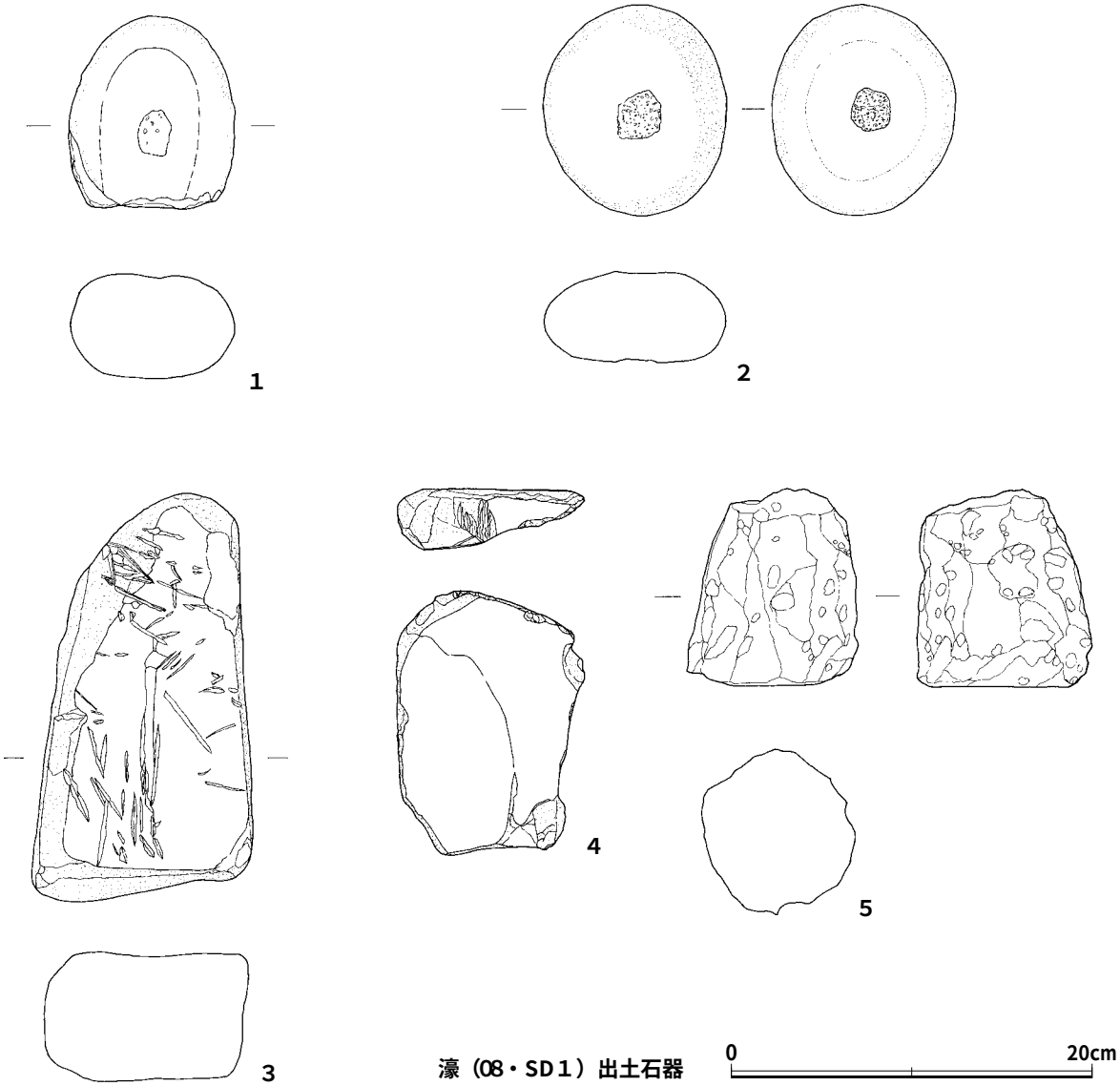


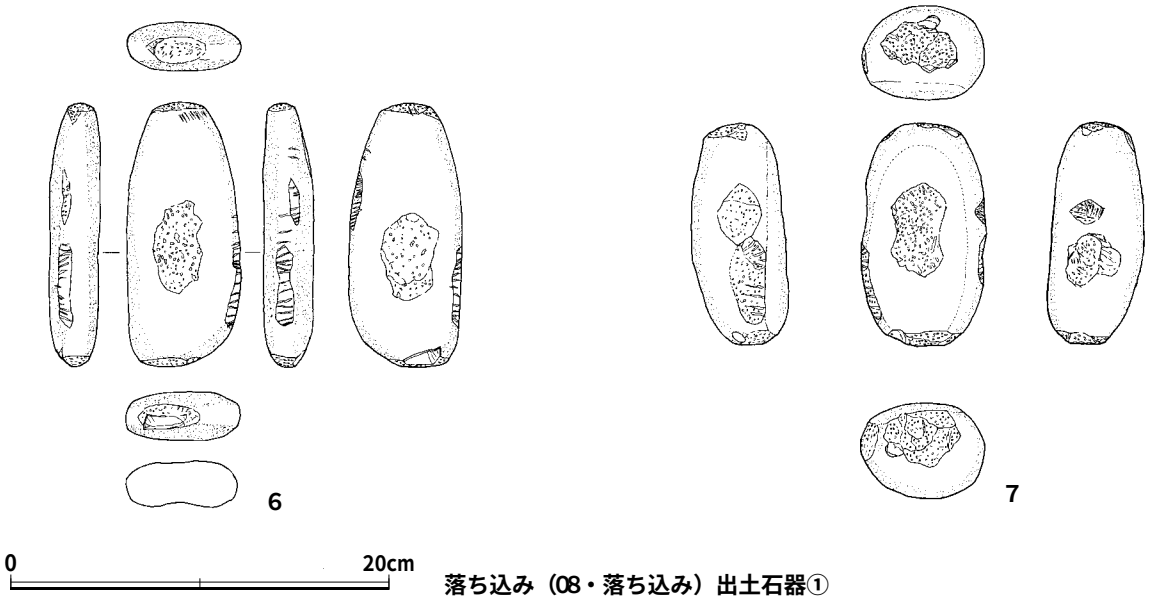
第41図　鉄製品・骨角器（1/2）

石器（第42図～第46図・第16表）

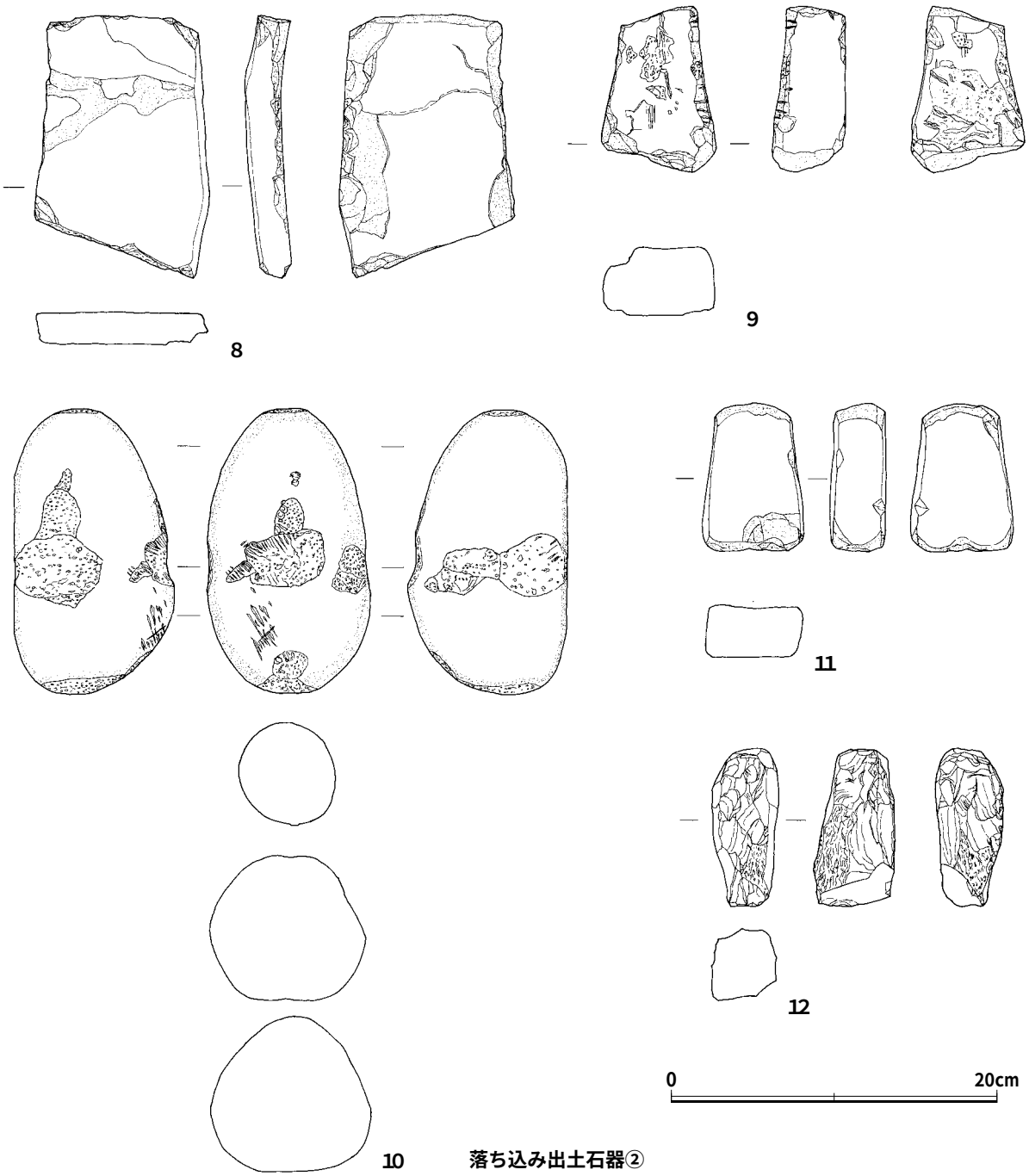
1～5は濠（08－ＳＤ１）出土の石器である。**1・2**は玄武岩製の凹石である。**1**は凹石の前に磨石として使用しており表・裏両面に磨痕が残る。**2**は表面に磨痕が，両面に凹がみられる。**3**はきめの粗い層と細かな層の２層からなる砂岩製の砥石である。砥面としては粗い面のみを利用している。また，表面には砥石としての滑らかな使用痕の他に筋状の削痕が多く残る。**4**はきめの細かい砂岩製の砥石である。表面と上下面を砥面として利用しているが，上面には，筋状の削痕も残る。**5**は多孔質玄武岩を利用したクド石である。クド石は烏帽子状になるものが多いがこれは上面と下面が水平に削られるために円柱状を呈している。側面図の右側縁が緩く弧を描いていることから，もともとこれは烏帽子状を呈したクド石であったものの，上半が欠けその上面と下面を水平に削ったものと思われる。支えの張り出しが無いので，加工後は本来のクド石の使用法とは違う使われ方をしたものと思われる。

6～12は落ち込み（08－落ち込み）出土の石器である**6**は玄武岩製の凹石であるが，上下面に敲打痕が，左右側面には敲打痕とその際に付いたと思われる溝状の傷が多数見られる。何を敲いたものであろうか。**7**はたくさんの用途に使われたと思われる玄武岩製の石器である。表面には磨面と凹がみられるが，それほど使い込まれてはいない。上面・下面には何度も使ったと思われる敲打の痕が残る。左右側面にも敲打の痕が残るが，右側面下の抉りは磨れている。**8**はきめの細かい砂岩を利用した砥石である。表面・裏面・右側面の３面を砥面として利用している。この砂岩は中に１～２㎜大の固い黒色鉱物をまばらに含んでおり，砥石としては上質ではない。金属を研ぐことはできなかったと思われる。**9**はきめの細かい砂岩を利用した砥石である。表面・裏面・両側面の４面を砥面として利用している。よく使い込まれており，どの面も手前から奥へ緩やかな弧を描くように磨り減り薄くなっている。砥石としての使用後は敲石として利用したようで，縁を中心に全面に敲打痕が残る。**10**は玄武岩製の石錘である。敲打による凹が各面中央部に５箇所連なることから，この部分に紐を結びつけていたことが考えられる。上面と下面にも敲打痕が残るが，これは石錘としての利用後敲石として使用した際に付いたものと思われる。**11**は粗い砂岩製の砥石である。熱を受けているために風化が激しく使用痕は確認できないが，表面の断面がU字形をしていることから良く使い込まれていたことが窺える。**12**は薄い小豆色で良質の頁岩を使った方柱状石斧の未製品である。縮緬状の自然面が表面と両側面に残る。石斧の祖形を作り出す敲打は各面とも両側縁から行っている。刃部に当たる部分が欠損している。**13・14**は造成土出土の石器である。**13**は磨石と凹石として利用された玄武岩の円礫である。表，裏両面ともよく磨り減り平らになっているが凹部はさほど窪んではいない。磨面がかなり荒れていることから，磨石→凹石として利用したと思われる。**14**は凹石，磨石，敲石として多様な利用がなされた玄武岩の円礫である。しっかりとした凹部は表面に，小さな連続敲打によると思われる敲き痕は側縁のほぼ全周に残る。この石器を印象付けているのが裏面に残る使い込んだ磨痕である。磨痕は裏面全面に及び緩い凸レンズ状を呈しツルツルに磨れている。堅果物を粉にする時には，使い勝手の良い道具であったろう。**15～18**は弥生時代前期の包含層である４ｃ層出土の石器である。**15**は扁平な

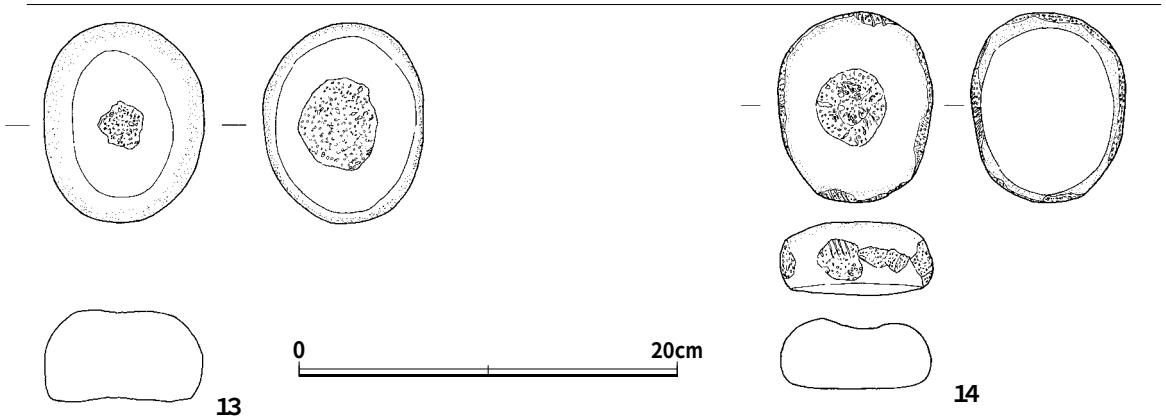




第42図　石器①（1/4）

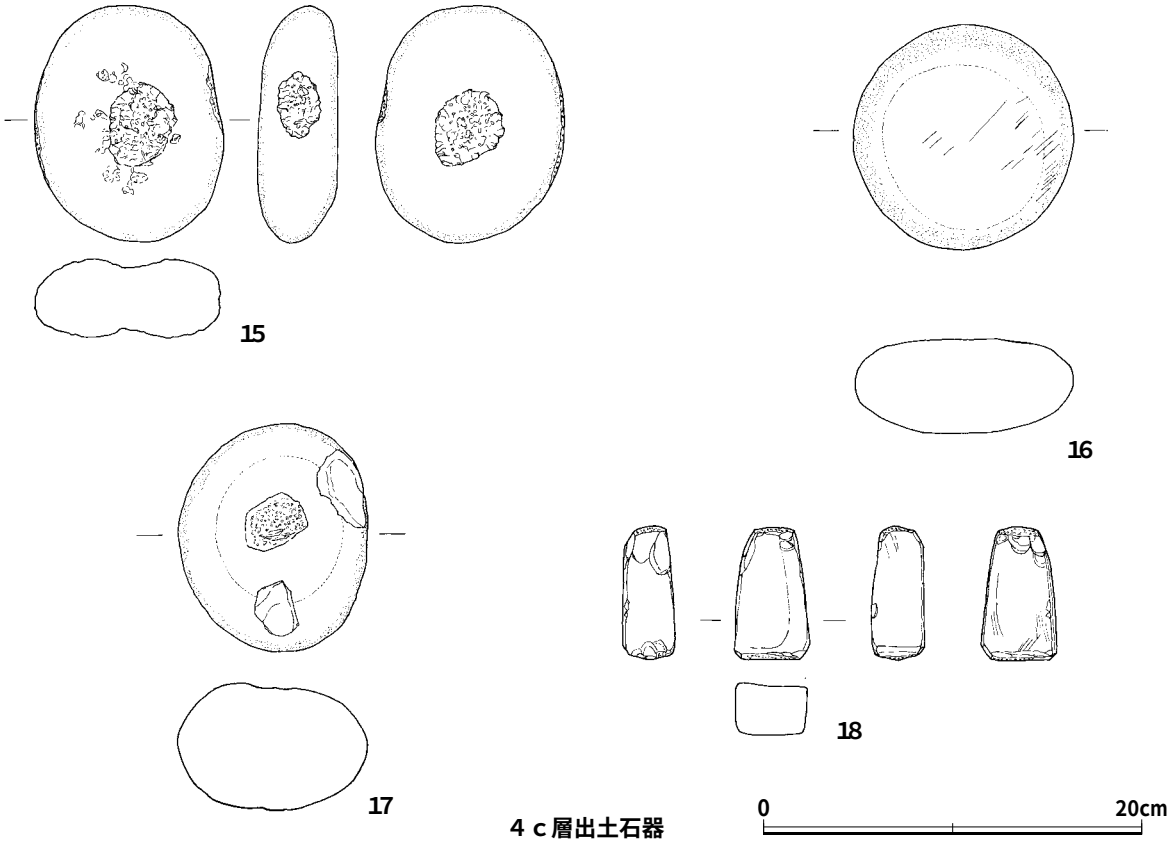


落ち込み出土石器②

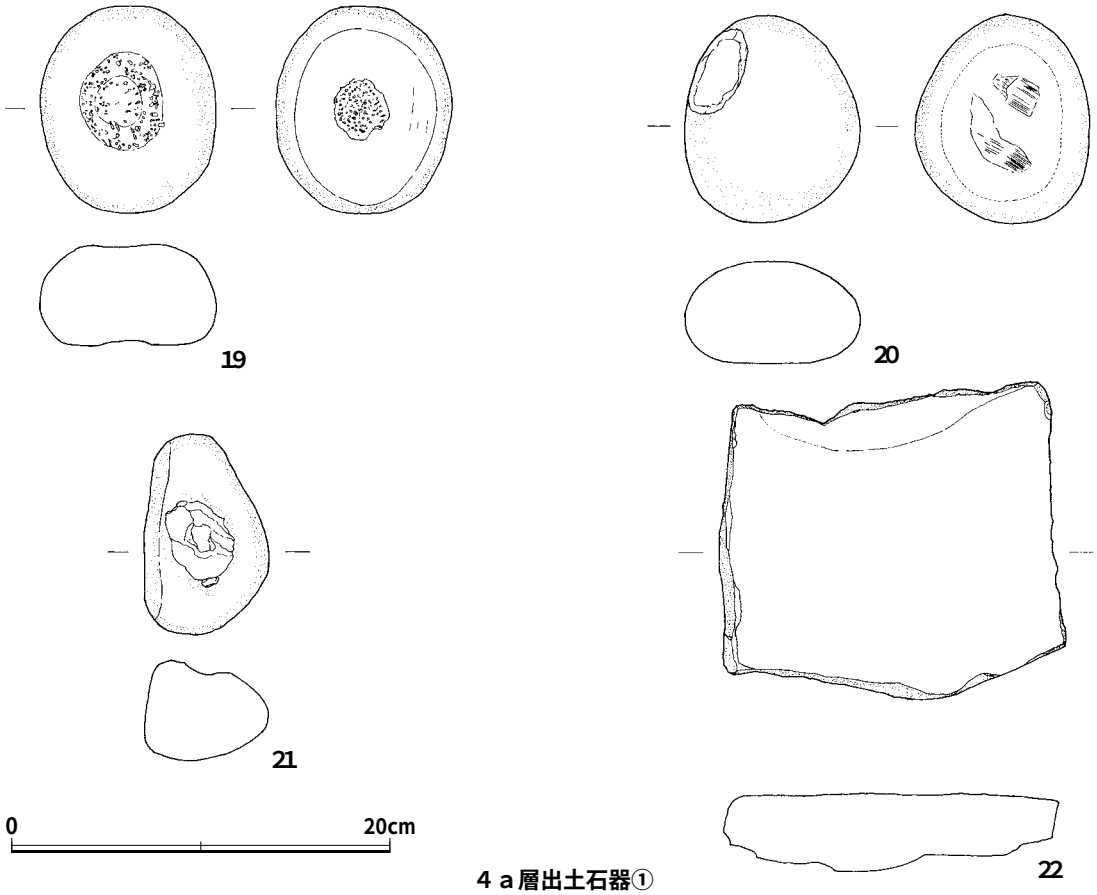


造成土出土石器

第43図　石器②（1／4）

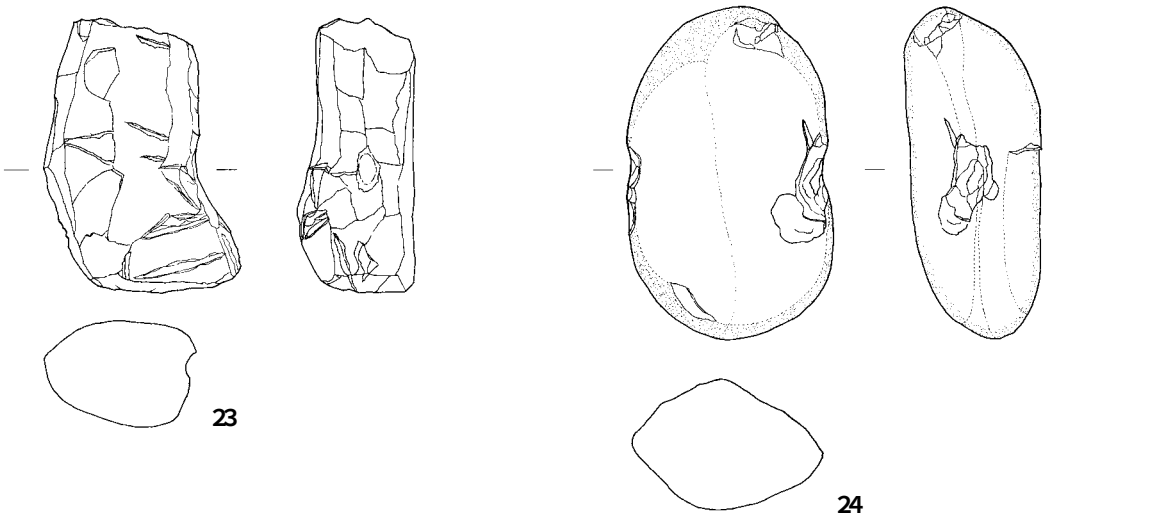


4ｃ層出土石器

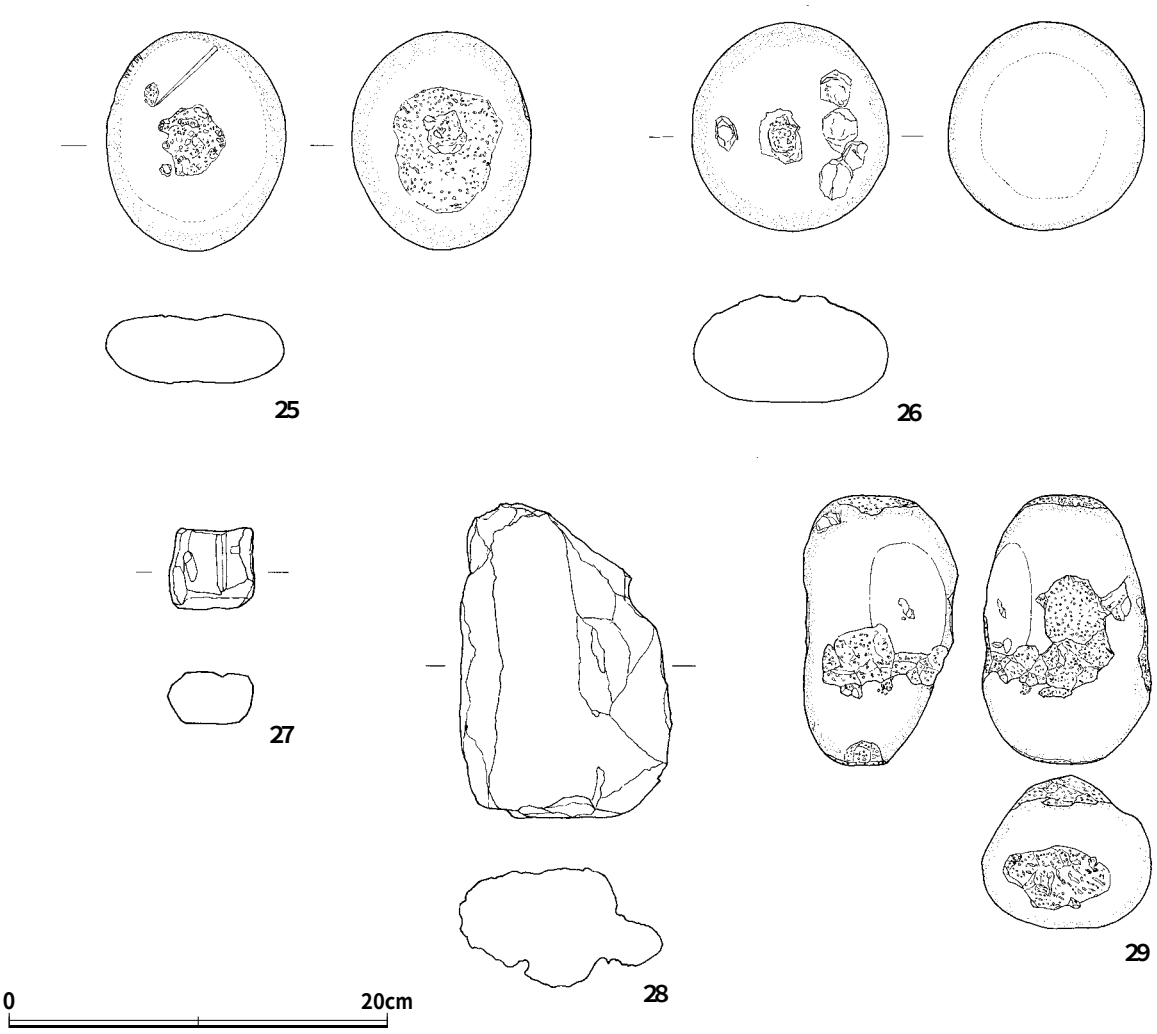


4ａ層出土石器①

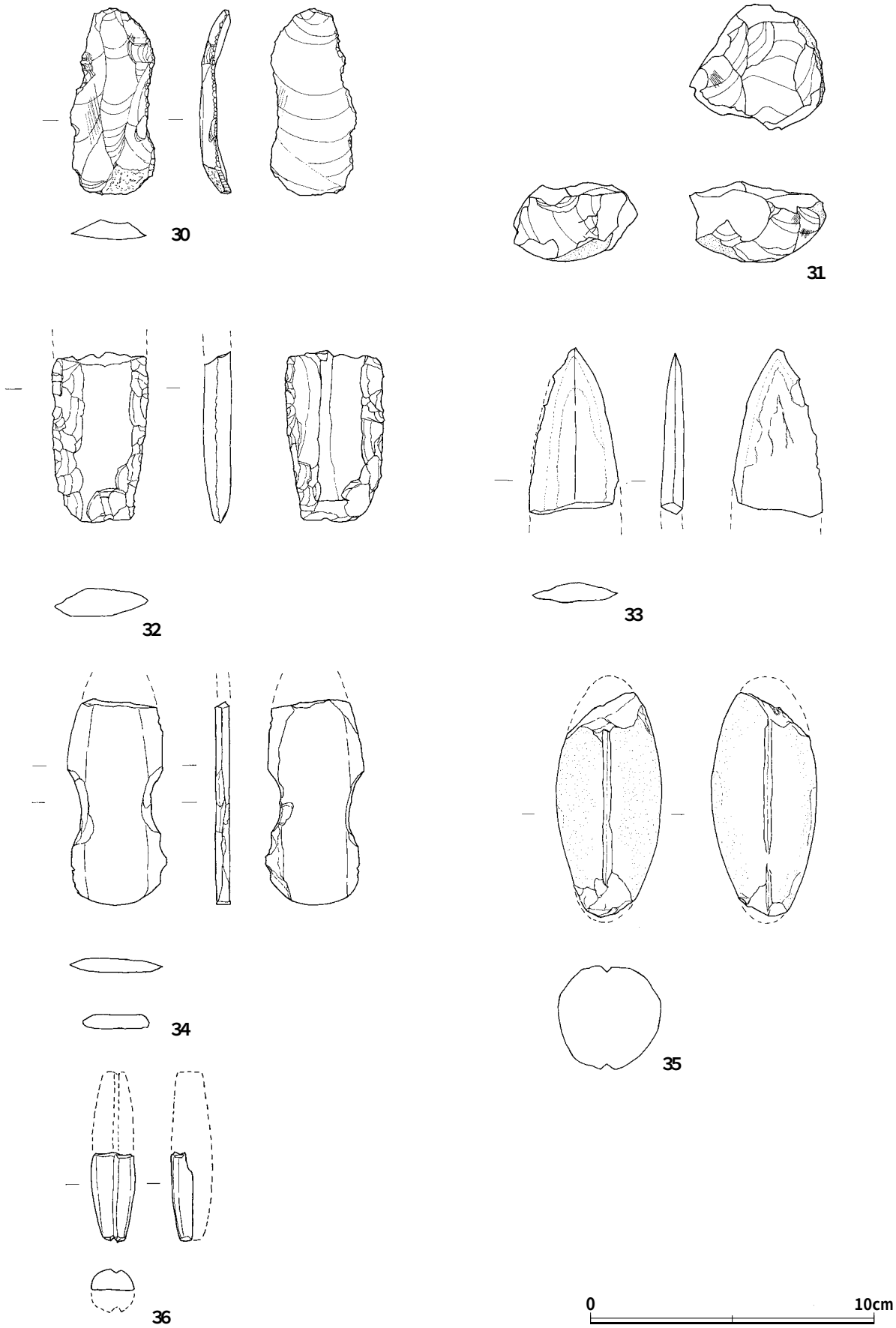
第44図　石器③（1/4）



4a 層出土石器



第45図　石器④（1/4）



第46図　石器⑤（1/2）

玄武岩を利用した凹石である。凹部は表面と裏面にある。両側縁には敲打痕が残るが，右側縁の敲打痕は広く深い。**16**は扁平な玄武岩製の磨石である。もともと海岸か川原の円礫で表面は滑らかであるが，磨面となった表面はさらに滑らかになっている。**17**は敲石である。表面に激しい敲打によると思われる欠損が２箇所，緩やかな敲打によると思われる痕が１箇所見られる。裏面中央にも敲打痕がみられるがわずかである。**18**は青灰色の頁岩製の砥石である。上面には自然面を残し，表面・裏面・右側面の３面が砥面として使われている。下面は周りから溝が入れられ折り取られたようになっている。非常にきめが細かい砥石であることから仕上げ砥として使われたと思われる。**19**～**24**は弥生時代後期の包含層である４ａ層出土の石器である。**19**は磨石と凹石として利用された玄武岩の円礫である。表，裏両面とも凹と磨面がみられるが，裏面はよく使い込まれており磨面が平らになっている。**20**は玄武岩製の磨石である。裏面を磨面として利用しているが磨り減り方が少ないことから使用の頻度は少なかったと思われる。表面左側縁に敲打の際にできたと思われる大きな欠損部分が見られる。**21**は変成岩を利用した敲石である。敲打は表面の中央を利用して行っており，使用のために窪んでいる。**22**はきめの細かい砂岩を利用した砥石である。表面のみを砥面としている。**23**は多孔質玄武岩を利用したクド石である。クド石は，烏帽子状の形で底部に比べ上部の幅が狭くなるものが多いが，このクド石は上部が折れてはいるもののほぼ同じ厚さで下り，底部が嘴状に出ていることから，クド石の２次加工品の可能性もある。**24**は石錘である。両側縁の中央部に打ち欠による抉りが入れられ緊縛部を作り出している。重さは1.7㎏あり大型の石錘である。**25**は表面に凹部と磨面を，裏面と左側縁に敲痕を残す扁平な玄武岩の円礫である。表面と左側縁には筋状の傷が残る。１層出土。**26**は表面に敲打痕を，裏面に磨面が見られる玄武岩の円礫である。敲打痕は強い打撃によって自然面が６個所剥離している。**27**は上部が欠損している粗い砂岩製の砥石である。表面のみを砥面としている。表面には縦方向に溝状の研ぎ痕も残る。**28**は多孔質玄武岩を利用した支脚形石製品である。平面形はクド石に似，背面にはツマミ状取手と思えるような削り出しも見られるが，厚さが薄いことと左側縁がほぼ垂直に立ち上がることから，このままの状態ではクド石としての利用は難しいと思われる。**25**と同じようにクド石の２次加工品の可能性もある。３層出土。**29**はたくさんの使用痕を残した玄武岩の円礫である。表面と裏面には凹部を作り出し，左側縁には磨痕が残る。また，敲打痕は上面・下面の他に表裏面・左右側面の中央部に見られる。各面の敲打痕が一列に連なることから最後は石錘として利用したことも考えられる。重さは1.6㎏で３ｃ層出土。**30**は漆黒黒曜石の縦長剥片の右側縁に調整剥離で刃部を作り出すサイドスクレイパーである。４ｃ層出土。**31**は漆黒黒曜石のコアである。欠損箇所が多く剥離面があまり残っていない。正面・上面・左側面を打面にして剥片を取っているが，剥片が取れる最終段階では，正面から取れる剥片はかなり寸詰まりであったと思われる。３層出土。**32**は安山岩製の打製石剣の基部と思われるものである。横長の剥片を利用し，表・裏両面からの調整で形を作っている。安山岩の横長剥片を利用していることと打製のままであることから，瀬戸内か畿内系の石剣と思われる。２層出土。**33**は頁岩製の磨製石剣先端部である。裏面は風化が激しい。４ｃ層出土。**34**は頁岩製の石器である。槍状を呈しており，両縁の抉りは打ち欠き後磨かれていることから緊縛用の可能性が

あり，磨製石剣から石槍への転用品とも思われる。４ｃ層出土。**35**は砂岩製の石錘である。紡錘状で，長軸に１条の溝を切り緊縛部を作り出している。２層出土。**36**は頁岩製の石錘である。３/４が欠損しているが，短軸と長軸に各１条の溝を切っていたことが分かる。４ａ層出土。

（註１）原の辻遺跡ではこのように口唇部に部分的に刻みを入れる例がこれまでもあり，『原の辻遺跡調査事務所報告書　第９集』・『原の辻遺跡調査事務所報告書　第16集』で報告されている。（宮﨑貴夫氏教示）

（註２）宮﨑貴夫　2005「土器」『原の辻遺跡調査事務所報告書　第30集　原の辻遺跡　総集編Ⅰ』長崎県教育委員会（本文中にある古墳時代の土器の時期区分において参考とした）

第３表　石田高原地区出土遺物観察表　濠（93－SD１）最上層出土土器

報告番号	調査区	遺構名	層位	種類	色調(表)		色調(裏)		胎土	残存部	調整方法(外)	調整方法(内)	備考
第25図	1	4区	濠(93−SD１)覆土	最上	壺	灰白	Hue7.5YR8/2	浅黄橙	Hue10YR8/3	石英・長石・金雲母	口縁部	ハケメ・ヨコナデ・ナデ	風化を受ける
	2	4区	濠(93−SD１)覆土	最上	甕	にぶい黄橙	Hue10YR7/2	にぶい橙	Hue7.5YR7/4	石英・長石・金雲母	口縁部	ハケメ・ヨコナデ	風化を受ける
	3	4区	濠(93−SD１)覆土	最上	甕	浅黄橙	Hue7.5YR8/4	灰白	Hue7.5YR8/2	石英・長石・金雲母	口縁部	ハケメ・ヨコナデ	風化を受ける・丹塗
	4	4区	濠(93−SD１)覆土	最上	甕	にぶい黄橙	Hue10YR7/4	にぶい黄橙	Hue10YR7/4	石英・長石・金雲母	底部	ナデツケ	ハケメ・指整形ナデ・指押さえ
	5	4区	濠(93−SD１)覆土	最上	(丸底)鉢	赤褐	Hue5YR4/8	赤褐	Hue2.5YR4/8	石英・長石・金雲母	底ほぼ完形	ヨコナデ・手持ちヘラケズリ	ヨコナデ・指ナデ	丹塗

第４表　石田高原地区出土遺物観察表　ピット内出土土器

報告番号	調査区	遺構名	層位	種類	色調(表)		色調(裏)		胎土	残存部	調整方法(外)	調整方法(内)	備考
第26図	1	1区	ピット2		甕か鉢	褐灰	Hue5YR4/1	褐灰	Hue5YR4/1	石英・長石・金雲母	口縁部		丹塗・全面風化を受ける
	2	2区	ピット18		壺	にぶい黄橙	Hue10YR7/3	にぶい黄橙	Hue10YR7/2	石英・長石・金雲母	口縁部～胴部	ナデ・ヨコナデ	ヘラナデ・ナデ・ヨコナデ・指押さえ	丹塗
	3	2区	ピット6		甕	灰褐	Hue7.5YR6/2	灰褐	Hue7.5YR6/2	石英・長石・金雲母	口縁部～胴部上半	ハケメ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	風化を受ける
	4	2区	ピット9		甕	褐灰	Hue7.5YR4/1	橙	Hue5YR6/6	石英・長石・金雲母・赤色砂	口縁部	ナデ・ヨコナデ	ナデ	
	5	2区	ピット9		甕	にぶい橙	Hue5YR6/4	橙	Hue2.5YR6/6	石英・長石・金雲母・赤色砂	口縁部		ナデ	風化を受ける
	6	2区	ピット9		甕	橙	Hue5YR6/6	橙	Hue2.5YR6/6	石英・長石・金雲母	口縁部	ナデ	
	7	2区	ピット10		甕	にぶい赤褐	Hue5YR5/3	橙	Hue5YR6/6	石英・長石・金雲母	口縁部	ハケメ		全面風化を受ける
	8	2区	ピット17		甕	橙	Hue2.5YR6/6	明赤褐	Hue2.5YR5/6	石英・長石・赤色砂	底部		ナデ	風化を受ける
	9	3区	ピット57		壺	橙	Hue5YR7/6	浅黄橙	Hue7.5YR8/4	石英・長石・少量角閃石	頸部	ハケメ・ナデ・ヨコナデ・ナデ仕上げ	ナデ	
	10	3区	ピット62		甕	にぶい橙	Hue7.5YR7/3	にぶい橙	Hue5YR7/4	石英・長石・赤色砂	口縁部～胴部上半			
	11	3区	ピット9		甕	橙	Hue5YR7/6	橙	Hue5YR7/6	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	
	12	3区	ピット26		甕	橙	Hue2.5YR6/6	にぶい橙	Hue7.5YR7/3	石英・長石・金雲母	口縁部	ナデ・ヨコナデ・刻目	ナデ・ヨコナデ	風化を受ける
	13	3区	ピット62		甕	にぶい橙	Hue7.5YR7/3	にぶい黄橙	Hue10YR7/2	石英・長石・金雲母	底部１/４	ハケメ・ナデ・ナデ消し	ナデ・指ナデ	風化を受けすすけている
	14	4区	ピット1		甕	橙	Hue2.5YR6/6	赤橙	Hue10YR6/6	石英・長石・金雲母	口縁部			全面風化を受ける
	15	5区	ピット26		壺	明赤褐	Hue2.5YR5/6	明赤褐	Hue2.5YR5/8	細かい石英・長石・金雲母・少量角閃石	口縁部～胴部	ナデ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	風化を受ける
	16	5区	ピット8		甕	橙	Hue2.5YR6/6	橙	Hue2.5YR6/8	石英・長石・赤色砂	口縁部～胴部上半			風化が激しい
	17	5区	ピット1		甕	明赤褐	Hue2.5YR5/6	明赤褐	Hue2.5YR5/6	石英・長石・赤色砂	口縁部			全面風化を受ける

第５表　石田高原地区出土遺物観察表　濠（08－SD１）出土土器

報告番号	調査区	遺構名	層位	種類	色調(表)		色調(裏)		胎土	残存部	調整方法(外)	調整方法(内)	備考
第27図	1	6区	濠	下層	壺	にぶい橙	Hue7.5YR7/3	にぶい黄橙	Hue10YR7/3	石英・長石・金雲母・角閃石少量	口縁部	ハケメ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	風化を受ける
	2	6区	濠	下層	甕	橙	Hue7.5YR6/6	灰褐	Hue7.5YR5/2	石英・長石・金雲母・赤色砂	口縁部	ハケメ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	
	3	6区	濠	底近く	甕	にぶい黄橙	Hue10YR5/3	にぶい褐	Hue7.5YR5/4	石英・長石・金雲母	口縁部	ハケメ・ナデ・ヨコナデ・ナデケシ	ハケメ・ナデ・ヨコナデ・ナデケシ	
	4	6区	濠	下層	甕	黒褐	Hue10YR3/2	にぶい黄橙	Hue10YR6/3	石英・長石・金雲母	口縁部	ハケメ・ナデ・ヨコナデ	ハケメ・ナデ・ヨコナデ	
	5	6区	濠	下層	壺	明赤褐	Hue5YR5/6	にぶい橙	Hue7.5YR6/4	石英・長石・金雲母	底部			丹塗・風化を受ける
	6	6区	濠	下層	高杯	灰白	Hue2.5YR8/1	灰白	Hue2.5YR8/1	石英・長石・金雲母	杯部	ナデ・ヨコミガキ	ナデ	
	7	6区	濠	下層	高杯	明赤褐	Hue2.5YR5/8	にぶい黄橙	Hue10YR6/3	石英・長石・金雲母	脚部	ヘラナデ・タテミガキ	ナデ・しぼり痕	丹塗・風化を受ける
	8	6区	濠	下層	蓋	にぶい赤褐	Hue5YR4/3	明赤褐	Hue5YR5/8	石英・長石・金雲母	摘み部	ナデ	ナデ	風化を受ける
	9	6区	濠	下層	器台(鼓型)	橙	Hue2.5YR6/6	橙	Hue2.5YR6/6	石英・長石	体上部	ナデ・指整形	ヘラ板ナデ	風化を受ける
	10	6区	濠	中層	壺	にぶい黄橙	Hue10YR6/3	にぶい黄橙	Hue10YR5/3	石英・長石・金雲母	口縁部～胴部	ハケメ・ヨコナデ・ナデ消し	ハケメ・ナデ・ヨコナデ・ナデケシ・指押さえ・指圧痕	
	11	6区	濠	中層	小形丸底壺	にぶい橙	Hue7.5YR7/3	橙	Hue5YR6/6	石英・長石・金雲母	口縁部～胴部	ハケメ・ナデ・ヨコナデ・面ケリ	ナデ・ヨコナデ・面ケリ	穿孔・黒斑
	12	6区	濠	中層	甕	浅黄橙	Hue7.5YR8/4	浅黄橙	Hue7.5YR8/4	石英・長石・赤色砂・金雲母・黒色粒	口縁部～胴部	ハケメ・ヨコナデ	ハケメ・ヨコナデ・ナデ消し	風化を受ける
	13	6区	濠	中層	甕	灰黄褐	Hue10YR4/2	灰褐	Hue7.5YR4/2	石英・長石・金雲母	口縁部	ハケメ・ヨコナデ・ナデ消し	ハケメ・ヨコナデ	
	14	6区	濠	中層	高杯	橙	Hue2.5YR6/6	にぶい橙	Hue5YR7/4	石英・長石・金雲母・赤色砂	杯部	ハケメ	ハケメ	風化を受ける
	15	6区	濠	中層	高杯	橙	Hue5YR7/6	にぶい橙	Hue5YR6/3	赤色砂	脚部	ミガキ		風化を受ける・穿孔
	16	6区	濠	中層	器台	にぶい橙	Hue5YR7/4	橙	Hue5YR7/6	石英・長石・金雲母	脚部・裾部	ハケメ・ナデ・ナデ消し・指押さえ	ハケメ・ナデケシ・指ナデ・しぼり痕	
第28図	17	6区	濠	③層	直口壺	橙	Hue2.5YR6/6	橙	Hue2.5YR6/8	石英・長石・金雲母	口頸部も部分的に欠く	ハケメ・平行タタキ・ヨコナデ・ナデツケ・刻目	ハケメ・ナデ・ヨコナデ・ナデケシ	穿孔・黒斑
	18	6区	濠	上層	壺	灰白	Hue2.5Y7/1	明褐灰	Hue7.5YR7/2	石英・長石・金雲母・角閃石	口縁部	ハケメ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	風化を受ける
	19	6区	濠	上層	壺	明褐灰	Hue7.5YR7/2	にぶい橙	Hue5YR7/4	石英・長石・金雲母・角閃石	底部	ハケメ	ナデ	風化を受ける
	20	6区	濠	上層	甕	橙	Hue5YR7/6	浅黄橙	Hue7.5YR8/6	石英・長石・金雲母	口縁部			風化を受ける
	21	6区	濠	上層	甕	灰黄	Hue2.5YR7/2	にぶい黄橙	Hue10YR6/3	石英・長石・金雲母	口縁部	ハケメ・ヨコナデ・ナデケシ・刻目	ハケメ・ヨコナデ	風化を受ける
	22	6区	濠	上層	甕	にぶい黄橙	Hue7.5YR6/4	明赤褐	Hue5YR6/8	石英・長石・金雲母	口縁部	ハケメ・ヨコナデ	ハケメ・ナデ・ヨコナデ・ナデケシ	
	23	6区	濠	上層	甕	灰褐	Hue5YR4/2	にぶい橙	Hue5YR6/4	石英・長石・金雲母	口縁部	ハケメ・ヨコナデ・ナデケシ	ハケメ・ヨコナデ・ケズリ?	
	24	6区	濠	上層	甕	にぶい赤褐	Hue5YR5/3	にぶい褐	Hue7.5YR6/3	石英・長石	口縁～胴部	ハケメ・ナデ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	スス痕有
	25	6区	濠	上層	甕	橙	Hue5YR6/6	灰黄	Hue2.5Y6/2	石英・長石・金雲母	底部			風化を受ける
	26	6区	濠	上層	甕	明赤褐	Hue5YR5/6	にぶい橙	Hue7.5YR6/4	石英・長石・金雲母	底部		ナデ	風化が激しい
	27	6区	濠	上層	甕	明赤褐	Hue2.5YR5/8	橙	Hue5YR6/6	石英・長石・金雲母	底部	ナデ	ナデ・指押さえ	
	28	6区	濠	上層	鉢	灰白	Hue10YR8/2	浅黄橙	Hue10YR8/3	石英・長石・金雲母・角閃石	完形	ヨコナデ・手持ちケズリ	ハケメ・ナデ・ヨコナデ	黒斑・風化を受ける
第29図	29	6区	濠	上層	小形高杯	橙	Hue5YR6/6	にぶい褐	Hue7.5YR5/3	石英・長石・金雲母	脚(柱)部	ハケメ・ナデケシ	ハケメ・ナデ	風化を受ける
	30	6区	濠	上層	高杯	橙	Hue2.5YR6/6	橙	Hue2.5YR6/6	石英・長石・金雲母・角閃石	杯部	ナデ・ヨコナデ	ヨコナデ	風化を受ける
	31	6区	濠	上層	器台	にぶい橙	Hue7.5YR6/4	にぶい橙	Hue5YR6/3	石英・長石・金雲母	体部	ハケメ・ナデケシ	ハケメ・ナデツ状	風化を受けるしぼり痕・穿孔

第６表　石田高原地区出土遺物観察表　落ち込み（08－落ち込み）出土土器

報告番号	調査区	遺構名	層位	種類	色調(表)		色調(裏)		胎土	残存部	調整方法(外)	調整方法(内)	備考
第30図	1	5区	落ち込み	下層	甕	灰褐	Hue7.5YR4/2	にぶい褐	Hue7.5YR5/3	石英・長石・金雲母	口縁部	ナデ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	スス痕有
	2	5区	落ち込み	下層	甕	灰黄褐	Hue10YR6/2	灰黄褐	Hue10YR6/2	石英・長石・金雲母	口縁部	ナデ・ヨコナデ・刻目	ナデ・ヨコナデ	
	3	5区	落ち込み	下層	甕	橙	Hue5YR6/6	橙	Hue5YR6/6	石英・長石・金雲母	口縁～胴部	ハケメ		風化が激しい
	4	5区	落ち込み	下層	甕	にぶい橙	Hue7.5YR7/3	褐灰	Hue7.5YR5/1	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	風化を受ける
	5	5区	落ち込み	下層	甕	橙	Hue5YR6/6	橙	Hue5YR6/6	石英・長石・金雲母	口縁部	ナデ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	
	6	5区	落ち込み	下層	甕	灰白	Hue10YR8/2	灰白	Hue10YR8/2	石英・長石・赤色砂	口縁～胴部	ハケメ	ナデ	風化を受ける・豊前系甕
	7	5区	落ち込み	下層	甕	にぶい褐	Hue7.5YR5/3	褐灰	Hue5YR4/1	石英・長石・金雲母	底部	ハケメ	ナデ	スス痕有
	8	5区	落ち込み	下層	甕	褐灰	Hue7.5YR6/1	にぶい黄橙	Hue10YR7/2	石英・長石・金雲母	底部	ハケメ・ナデ消し	ナデ・指押さえ	風化を受ける
	9	5区	落ち込み	下層	甕	灰黄褐	Hue10YR6/2	にぶい黄橙	Hue10YR6/3	石英・長石・金雲母	底部	ハケメ・ナデ消し	ナデ・指押さえ	黒斑
	10	5区	落ち込み	中層	壺	橙	Hue2.5YR6/8	橙	Hue7.5YR6/8	石英・長石・金雲母	口縁部～頸部	ハケメ・ヨコナデ・ナデ消し	ナデ・ヨコナデ	複合口縁壺
	11	5区	落ち込み	中層	壺	灰黄	Hue2.5Y6/2	灰黄	Hue2.5Y6/2	石英・長石・金雲母	頸ほぼ完形		ナデ	風化を受ける・無頸壺・丹塗?
	12	5区	落ち込み	中層	壺	にぶい黄橙	Hue10YR7/2	にぶい橙	Hue7.5YR7/3	石英・長石・金雲母	口縁～胴部上半	ナデ・ヨコナデ	ヨコナデ・ケズリ	短頸壺
	13	5区	落ち込み	中層	壺	浅黄橙	Hue7.5YR8/4	浅黄橙	Hue7.5YR8/3	石英・長石・赤色砂	底部		指押さえ	風化が激しい・黒斑
	14	5区	落ち込み	中層	小形丸底壺又は鉢	にぶい橙	Hue7.5YR7/4	にぶい橙	Hue7.5YR7/4	石英・長石・金雲母	頸ほぼ完形	手持ちヘラケズリ		風化を受ける・布留式系
第31図	15	5区	落ち込み	中層	甕	にぶい褐	Hue7.5YR6/3	褐灰	Hue7.5YR4/1	石英・長石・金雲母	口縁部	ハケメ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	風化を受ける・黒斑
	16	5区	落ち込み	中層	甕	灰白	Hue2.5YR8/1	灰白	Hue2.5YR8/2	石英・長石・金雲母	口縁部～胴部	ハケメ・ヨコナデ	ハケメ・ヨコナデ・ナデ消し・ヘラナデ	黒斑
	17	5区	落ち込み	中層	甕	橙	Hue2.5YR6/6	橙	Hue2.5YR6/6	石英・長石・金雲母・角閃石	口縁部～胴部	ハケメ・ナデ	ナデ・ヘラナデ	風化を受ける
	18	5区	落ち込み	中層	甕	灰褐	Hue7.5YR6/2	にぶい黄橙	Hue10YR7/2	石英・長石・金雲母	口縁部～体部	ハケメ・ナデ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	やや風化・スス痕有
	19	5区	落ち込み	中層	器台	にぶい褐	Hue7.5YR6/3	にぶい橙	Hue5YR6/4	石英・長石・金雲母	上部	ナデ	ナデ	穿孔
	20	5区	落ち込み	上層	壺	明褐灰	Hue7.5YR7/2	灰黄	Hue2.5YR7/2	石英・長石・金雲母	口縁部～胴部	ハケメ・ヨコナデ	ハケメ・ナデ・ナデ消し・ヨコナデ	一部丹が付着
	21	5区	落ち込み	上層	壺	橙	Hue5YR6/6	橙	Hue5YR6/6	石英・長石・金雲母・角閃石	口頸部	ヨコナデ・刻目	ハケメ・ヨコナデ	
	22	1区	落ち込み	上層	壺	にぶい橙	Hue7.5YR7/4	にぶい橙	Hue7.5YR7/3	石英・長石・金雲母	底部			風化を受ける
	23	5区	落ち込み	上層	壺	にぶい黄橙	Hue10YR7/3	にぶい黄橙	Hue10YR7/2	石英・長石・金雲母	胴部～底部	ハケメ・ナデ・ナデ消し	ナデ	
	24	5区	落ち込み	上層	壺	灰褐	Hue7.5YR6/2	褐灰	Hue7.5YR6/1	石英・長石・金雲母	胴部～底部	ハケメ・ナデ・ナデ消し	ハケメ・ナデ・指押さえ	風化を受ける・黒斑
第32図	25	5区	落ち込み	上層	甕	にぶい赤褐	Hue5YR5/4	褐灰	Hue7.5YR4/1	石英・長石・金雲母・角閃石	口縁部～胴部	ハケメ	ハケメ・ナデ	風化を受ける・一部丹が付着
	26	5区	落ち込み	上層	甕	にぶい赤褐	Hue5YR5/4	明赤褐	Hue7.5YR7/2	石英・長石・金雲母	口縁部～胴部	ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ	風化が激しい・スス痕有
	27	5区	落ち込み	上層	甕	橙	Hue5YR6/6	褐灰	Hue7.5YR4/1	石英・長石・金雲母	口縁部	ハケメ	ハケメ	風化を受ける
	28	5区	落ち込み	上層	甕	にぶい橙	Hue7.5YR6/4	明赤褐	Hue5YR5/6	石英・長石・金雲母	底部	ハケメ	ナデ・指押さえ・ヘラ痕	風化を受ける
	29	5区	落ち込み	上層	甕	灰黄褐	Hue10YR5/2	灰黄褐	Hue10YR6/2	石英・長石・金雲母	底部	ハケメ・ナデ消し	ナデ	スス痕有
	30	5区	落ち込み	上層	器台	にぶい黄橙	Hue10YR7/2	にぶい黄橙	Hue10YR7/2	石英・長石・金雲母・角閃石	完形	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ・ヘラナデツケ・指整形ナデ	
第33図	1	3区	南トレンチ	中位	袋状口縁壺	にぶい橙	Hue7.5YR7/4	橙	Hue2.5YR6/6	石英・長石・赤色砂・金雲母少量	口縁部～胴部上半	しぼり		風化が激しい・しぼり痕有
	2	3区	南トレンチ	中位	壺	にぶい黄橙	Hue10YR7/2	灰黄褐	Hue10YR6/2	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ	ハケメ・ヨコナデ・ナデ消し・指押さえ	
	3	3区	落ち込み	中位	甕	にぶい橙	Hue5YR6/4	にぶい橙	Hue5YR6/4	石英・長石・金雲母	頸ほぼ完形	ハケメ・ナデ・ヨコナデ・ナデツケ	ハケメ・ヨコナデ・ナデ消し・指押さえ	二次的熱変で風化?黒斑・スス痕有
	4	3区	南トレンチ	中位	甕	浅黄橙	Hue10YR8/4	浅黄橙	Hue10YR8/4	石英・長石	口縁部	ヨコナデ	ケズリ	風化を受ける・布留式系
	5	3区	南トレンチ	中位	甕	橙	Hue5YR6/6	にぶい褐	Hue7.5YR5/3	石英・長石・金雲母	口縁部	ハケメ・ヨコナデ	ハケメ・ナデ	
	6	3区	落ち込み	中位	甕	にぶい褐	Hue7.5YR6/3	灰褐	Hue7.5YR5/2	石英・長石・金雲母少量	底部	ナデ	ナデ	
	7	3区	落ち込み	中位	高杯	橙	Hue5YR7/6	橙	Hue5YR7/6	石英・長石・金雲母	脚部			風化が激しい・穿孔３か所
	8	3区	落ち込み	上位	甕	灰白	Hue2.5YR8/1	灰白	Hue5Y8/1	石英・長石・金雲母	口縁部	ハケメ・ヨコナデ・ナデ消し	ナデ・ヨコナデ・ヘラケズリ	風化を受ける・布留式系
	9	3区	落ち込み	上位	甕	灰	Hue2.5Y7/1	褐灰	Hue10YR5/1	石英・長石・金雲母	口縁部	沈線	ナデ・ヘラケズリ	風化を受ける・布留式系
	10	3区	落ち込み	上位	甕	灰白	Hue10YR7/1	灰白	Hue10YR8/1	石英・長石・金雲母	口縁部～胴部	ナデ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ・ヘラケズリ	布留式系
	11	3区	落ち込み	上位	高杯	橙	Hue2.5YR6/6	暗赤灰	Hue10R4/1	石英・長石・金雲母	筒部・裾部			風化が激しい
	12	3区	落ち込み	上位	鼓形器台	浅黄橙	Hue7.5YR8/4	橙	Hue2.5YR6/6	石英・長石・角閃石・赤色砂	受部～裾部	ナデ・ヨコナデ	ナデ・ヘラケズリ	山陰系
第34図	13	3区	落ち込み	上位	大型甕	にぶい橙	Hue5YR6/4	にぶい橙	Hue5YR6/4	石英・長石・金雲母・赤色砂	完形	ハケメ・ヨコナデ・ナデ	ハケメ・ヨコナデ・ナデ	

第７表　石田高原地区出土遺物観察表　造成土（４ｂ層，４ｂ①層）出土土器

報告番号	調査区	遺構名	層位	種類	色調(表)		色調(裏)		胎土	残存部	調整方法(外)	調整方法(内)	備考
第35図	1	4区	東トレンチ	4b①層	壺	灰褐	Hue7.5YR5/2	褐灰	Hue7.5YR4/1	石英・長石・金雲母・角閃石	口縁部	ハケメ・ヨコナデ・ナデ消し・刻目	ナデ消し	豊前系
	2	4区	東トレンチ	4b①層	甕	赤橙	Hue10R6/6	にぶい橙	Hue7.5YR7/3	石英・長石・角閃石	口縁部	ハケメ・ヨコナデ	ナデ	風化を受ける
	3	4区	東トレンチ	4b①層	甕	にぶい橙	Hue7.5YR7/3	にぶい褐	Hue7.5YR6/3	石英・長石・金雲母	口縁部			風化を受ける
	4	4区	東トレンチ	4b①層	甕	淡赤橙	Hue2.5YR7/4	にぶい黄橙	Hue10YR7/3	石英・長石・金雲母	底部	ハケメ・ナデ	ナデ	風化を受ける
	5	4区	東トレンチ	4b①層	甕	明赤褐	Hue2.5YR5/6	にぶい赤褐	Hue5YR5/3	石英・長石・金雲母	底部	ハケメ・ナデ・ナデ消し	ナデ	スス痕有
	6	4区	東トレンチ	4b①層	甕	赤	Hue10YR5/6	灰赤	Hue2.5YR5/2	石英・長石・金雲母	底部	ハケメ		風化が激しい・スス痕有
	7	4区	東トレンチ	4b①層	甕	橙色	Hue2.5YR6/6	にぶい赤褐	Hue5YR5/3	石英・長石・金雲母	底部		ナデ	風化が激しい・スス痕有
	8	2区	石棺の上	4b層	甕	褐灰	Hue5YR5/1	灰黄	Hue2.5Y7/2		底部	ハケメ・ナデ	ナデ・指押さえ	

第８表　石田高原地区出土遺物観察表　箱式石棺墓(08－SC１)出土土器

報告番号	調査区	遺構名	層位	種類	色調(表)		色調(裏)		胎土	残存部	調整方法(外)	調整方法(内)	備考
第22図	1	2区	石棺掘り方内		丹塗壺	にぶい黄橙	Hue10YR7/3	浅黄橙	Hue7.5YR8/4	石英・長石・金雲母	頸部～胴部		ナデ	丹塗・風化が激しい
	2	2区	石棺掘り方内		甕	橙	Hue2.5YR6/6	橙	Hue5YR6/6	石英・長石・金雲母	口縁部	ナデ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	

第９表　石田高原地区出土遺物観察表　５区出土埋甕

報告番号	調査区	遺構名	層位	種類	色調(表)		色調(裏)		胎土	残存部	調整方法(外)	調整方法(内)	備考
第24図	1	5区	埋め甕		壺	橙	Hue2.5YR6/6	橙	Hue5YR6/6	石英・長石・金雲母・赤色砂	胴部～底部			風化が激しい・黒斑

第10表　石田高原地区出土遺物観察表　包含層出土の土器（４ｃ層）

報告番号	調査区	遺構名	層位	種類	色調(表)		色調(裏)		胎土	残存部	調整方法(外)	調整方法(内)	備考
第36図	1	3区		4c層	袋状口縁壺	橙	Hue2.5YR6/6	灰黄褐	Hue10YR6/2	石英・長石・金雲母	器形完形・胴部一部欠損	ハケメ・ナデ	ナデ・ヨコナデ	風化が激しい・丹塗・しぼり痕
	2	3区		4c層	袋状口縁壺	にぶい橙	Hue5YR6/4	にぶい橙	Hue5YR6/4	石英・長石・金雲母	口縁部,胴部一部欠損	ナデ	ナデ・指押さえ	風化を受ける・丹塗・しぼり痕
	3	3区		4c層	甕	にぶい褐	Hue7.5YR6/3	橙	Hue5YR6/6	石英・長石・金雲母	器形完形	ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	風化を受ける・丹塗
	4	6区		4c層	甕	灰褐	Hue5YR5/2	灰褐	Hue5YR6/2	石英・長石・金雲母・黒雲母	口縁部～胴部上半	ナデ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	風化を受ける・スス痕有
	5	4区		4c層	甕	にぶい褐	Hue7.5YR5/4	橙	Hue5YR6/6	石英・長石・黒雲母	口縁部	ナデ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	
	6	4区		4c層	甕	にぶい橙	Hue7.5YR7/3	灰褐	Hue7.5YR6/2	石英・長石・赤色砂	口縁部	ヨコナデ	ヨコナデ	風化を受ける
	7	4区		4c層	甕	明赤褐	Hue2.5YR5/6	赤	Hue10R4/6	石英・長石・金雲母少量	口縁部	ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	風化を受ける
	8	4区		4c層	甕	にぶい橙	Hue7.5YR6/4	にぶい黄橙	Hue10YR6/4	石英・長石・金雲母	口縁部	平滑ナデ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	
	9	5区		4c層	甕	にぶい黄褐	Hue10YR5/3	灰黄褐	Hue10YR6/2	石英・長石・微細な金雲母	口縁部	ハケメ・ヨコナデ・ナデ消し	ナデ・ヨコナデ	風化を受ける
	10	1区		4c層	甕	橙	Hue2.5YR6/8	橙	Hue5YR6/6	石英・長石・金雲母	底部			風化を受ける
	11	5区		4c層	甕	明赤褐	Hue2.5YR5/8	橙	Hue7.5YR6/6	石英・長石	底部	ハケメ・ナデ	ナデ	風化を受ける
	12	5区		4c層	甕	明赤褐	Hue2.5YR5/6	明赤褐	Hue2.5YR5/6	石英・長石・金雲母	底部	ハケメ・ナデ	ナデ	風化を受ける
	13	5区		4c層	甕	橙	Hue5YR6/6	黒褐	Hue10YR3/1	石英・長石・金雲母	底部	ハケメ	ナデ・指押さえ	風化を受ける
	14	5区		4c層	甕	にぶい黄橙	Hue10YR6/4	にぶい黄橙	Hue10YR6/4	石英・長石・金雲母・赤色砂	底部		ナデ・指押さえ	風化を受ける
	15	5区		4c層	甕	橙	Hue2.5YR6/8	にぶい赤褐	Hue5YR5/3	石英・長石・金雲母	底部	ハケメ・ナデ		風化を受ける
	16	2区		4c層	甕	灰褐	Hue7.5YR6/2	橙	Hue7.5YR7/6	石英・長石・角閃石	口縁部～胴部	ハケメ・ヨコナデ・刻目	ナデ	風化を受ける・豊後系
	17	1区		4c層	蓋	にぶい黄橙	Hue7.5YR7/4	にぶい黄橙	Hue10YR7/3	石英・長石・金雲母	摘み部		ナデ	風化を受ける・しぼり痕有

第11表　石田高原地区出土遺物観察表　包含層出土の土器（４ａ層）

報告番号	調査区	遺構名	層位	種類	色調(表)		色調(裏)		胎土	残存部	調整方法(外)	調整方法(内)	備考
第37図	1	4区		4a層	壺	にぶい黄橙	Hue10YR7/4	橙	Hue7.5YR6/6	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ・刻目	ナデ・ヨコナデ	風化を受ける・黒斑
	2	3区		4a層	壺	灰白	Hue7.5YR8/1	にぶい橙	Hue7.5YR7/3	石英・長石・金雲母	口縁部～頸部		ナデ	丹塗
	3	4区		4a層	壺	にぶい橙	Hue7.5YR7/4	にぶい橙	Hue7.5YR7/3	石英・長石・金雲母	口縁部	ハケメ・ヨコナデ・ナデ消し	ハケメ・ナデ・ヨコナデ	
	4	4区		4a層	壺	黒褐	Hue10YR3/1	にぶい黄橙	Hue10YR6/4	石英・長石・金雲母	底部	ナデ	ナデ・指押さえ	黒斑
	5	3区		4a層	甕	明赤褐	Hue2.5YR5/6	にぶい黄橙	Hue10YR7/4	石英・長石・金雲母	口縁部	ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ	風化を受ける
	6	3区		4a層	甕	橙	Hue7.5YR7/6	橙	Hue7.5YR7/4	石英・長石	口縁部～胴部		ナデ	風化を受ける・丹塗
	7	3区		4a層	甕	にぶい黄橙	Hue10YR6/3	にぶい黄橙	Hue10YR7/2	石英・長石・金雲母	口縁部～胴部	ナデ・ヨコナデ	ナデ・ヨコナデ・指押さえ	風化を受ける
	8	4区		4a層	甕	橙	Hue2.5YR6/6	にぶい黄橙	Hue10YR6/4	石英・長石・金雲母	底部		ナデ	風化を受ける
	9	3区		4a層	甕	にぶい褐	Hue7.5YR5/4	にぶい橙	Hue7.5YR6/4	石英・長石・金雲母	底部		ナデ	風化を受ける
	10	3区		4a層	高杯	にぶい橙	Hue7.5YR7/3	浅黄橙	Hue7.5YR8/3	石英・長石・金雲母	筒部・裾部	ハケメ・ナデ・ヨコナデ・指押さえ	ナデ・ヨコナデ	穿孔・しぼり痕

第12表　石田高原地区出土遺物観察表　半島系土器・楽浪系土器

報告番号	調査区	遺構名	層位	種類	色調(表)		色調(裏)		胎土	残存部	調整方法(外)	調整方法(内)	備考
第38図	1	3区		4c層	無文土器	褐灰	Hue7.5YR6/1		石英・長石	口縁部			
	2	3区		4a層	髮無文土器甕	橙	Hue7.5YR6/6	にぶい橙	Hue7.5YR6/4	石英・長石・金雲母	口縁部	ナデ	ハケメ・ナデ	
	3	3区		4a層	楽浪系瓦質壺	褐灰	Hue10YR6/1	灰	Hue N6/0	金雲母	底部	手持ちヘラケズリ	ろくろ痕	精良な胎土
	4	3区		4a層	楽浪系瓦質土器壺	灰白	Hue2.5Y7/1	灰白	Hue2.5Y7/1	長石	胴部	縄目タタキ		精良な胎土
	5	5区	落ち込み	上層	楽浪系瓦質壺	灰白	Hue10YR7/1	灰白	Hue5Y7/1	石英・長石	胴部	縄目タタキ		精良な胎土
	6	2区		3a層	三韓系瓦質土器壺	灰	Hue5Y7/1	灰黄	Hue2.5Y7/2	石英・長石	胴部上位	縄目タタキ・横位沈線		
	7	5区		3層	三韓系瓦質土器壺	灰白	Hue N7/0	灰白	Hue N7/0	長石・金雲母	胴部	縄目タタキ・横位沈線		
	8	2区	ピット16	上層	三韓系瓦質土器	灰白	Hue N7/0	灰白	Hue N7/0	長石	胴部	縄目タタキ		
	9	1区		4c層	三韓系瓦質壺	灰	Hue N6/0	灰白	Hue N7/0	石英・長石・金雲母	胴部	格子目タタキ		
	10	5区	落ち込み	上層	陶質土器壺	黄灰	Hue2.5Y6/1	灰黄褐	Hue10YR6/2	金雲母	胴部	縄目タタキ		
	11	5区		2層	陶質土器壺	灰	Hue N5/0	灰	Hue N5/0	長石	胴部	縄目タタキ		
	12	3区		4a層	陶質土器壺	灰褐	Hue5YR5/2	灰白	Hue10YR7/1	石英・長石	胴部	平行タタキ・横位沈線		
	13	3区		4b層	陶質土器壺	赤黒	Hue7.5YR2/1	青灰	Hue5PB5/1	長石	胴部	平行タタキ・横位沈線		
	14	5区	落ち込み	上層	陶質土器壺	灰	Hue7.5Y5/1	灰	Hue N5/0	石英・長石・金雲母	胴部	平行タタキ・横位沈線		
	15	5区		2層	陶質土器壺	灰	Hue N6/0	灰	Hue N6/0	長石	胴部	平行タタキ・横位沈線		
	16	2区		4c層	陶質土器甕	褐灰	Hue10YR6/1	黄灰	Hue2.5Y6/1	石英・長石・角閃石	口縁部	格子目タタキ・回転ロクロナデ	回転ロクロナデ	
	17	1区		4c層	陶質土器壺	灰	Hue N5/0	灰	Hue N5/0	長石	胴部	格子目タタキ		
	18	4区		4a層	陶質土器壺	褐灰	Hue10YR6/1	褐灰	Hue10YR6/1	長石	口縁部	回転ロクロナデ	回転ロクロナデ	
	19	4区		4a層	陶質土器壺	褐灰	Hue10YR6/1	褐灰	Hue10YR6/1	石英・長石	胴部	回転ロクロナデ	回転ロクロナデ	

第13表　石田高原地区出土遺物観察表　土製品

報告番号		調査区	遺構名	層位	種類	色調(表)		色調(裏)		胎土	残存部	調整方法(外)	調整方法(内)	備考
第39図	1	2区		4c層	投弾	橙	Hue5YR6/6	－	－	長石・金雲母				
	2	3区		4c層	投弾	にぶい橙	Hue7.5YR6/4	－	－	長石・金雲母	半欠			
	3	3区		4a層	投弾	にぶい橙	Hue7.5YR6/4	黒褐	Hue7.5YR3/1	長石・金雲母	完形			スス痕有
	4	1区		4c層	丸玉	にぶい褐	Hue7/5YR6/3	にぶい褐	Hue7/5YR6/3	石英・長石	半欠			
	5	3区		4c層	円盤状土製品	灰白	Hue10YR8/2	灰黄	Hue2.5Y7/2	石英・長石・金雲母・角閃石				
	6	3区		4a層	土製円盤	にぶい赤褐	Hue5YR5/3	にぶい褐	Hue7.5YR6/3	石英・長石・金雲母		ナデ	ナデ	
	7	5区		3層	円盤状土製品	にぶい橙	Hue5YR7/4	褐灰	Hue5YR4/1	石英・長石・金雲母				

第14表　石田高原地区出土遺物観察表　須恵器・土師器・磁器

報告番号		調査区	遺構名	層位	種類	色調(表)		色調(裏)		胎土	残存部	調整方法(外)	調整方法(内)	備考
第40図	1	1区		3c層	須恵器甕又は壺	灰	HueN6/0	灰	HueN6/0	石英・金雲母	胴部			
	2	3区		4a層	高台付椀	浅黄橙	Hue10YR8/4	浅黄橙	Hue10YR8/4	石英・長石・角閃石	底部	ナデ		風化を受ける
	3	6区		1層	白磁椀Ⅳ類	灰白	Hue7.5Y7/1	灰白	Hue7.5Y7/1		口縁部			
	4	5区		1層	白磁椀Ⅳ類	灰黄	Hue2.5Y7/2	灰白	Hue7.5Y7/1		底部			体部下半露胎
	5	5区		2層	染付椀	灰白	Hue5Y7/2	灰白	Hue5Y7/2		底部			高台に1条の圏線

第15表　石田高原地区出土遺物観察表　ガラス玉・金属器・骨角器

報告番号		調査区	遺構名	層位	種類	素材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	残存状況	その他
第22図	3	2区	箱式石棺墓	棺床	ガラス製管玉	ガラス	0.2	0.2				風化を受ける
第41図	1	2区		4a層	鎌	鉄	12.5	5.2	3.5	209.7		
第41図	2	2区		4a層	板状鉄斧又は鉄素材	鉄	5.3	3	0.95	47.5		
第41図	3		表採		鯨骨製紡垂車	鯨骨	4.6	2	0.6		1/4残	

第16表　石田高原地区出土遺物観察表　石器

報告番号		調査区	遺構名	層位	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	色調	残存部	その他
第42図	1	4区	93~SD1	最上面	磨石	10.6	9.2	5.8	992.2	玄武岩	灰	1/3欠	
	2	6区	08~SD1		磨石(凹石)	11.6	10.1	5.1	930	玄武岩	灰	完形	
	3	6区	08~SD1	最下層	砥石	22.6	12.3	7.2	2480	砂岩	灰	完形	筋状の痕跡が多数入る
	4	6区	08~SD1	上位	砥石	14.8	10.3	3.4	546.3	砂岩	青灰	一部欠	
	5	6区	08~SD1	中位	くぼ石	10.9	9.8	9	940.8	多孔質安山岩	暗赤灰	完形	
	6	5区	落ち込み		敲石	14.1	8.2	2.5	375	玄武岩	褐灰	完形	
	7	5区	落ち込み	下層	磨石・凹石・敲石	11.7	6.6	5.1	640.3	玄武岩	灰	完形	
第43図	8	3区	落ち込み	上位	砥石	16.1	10.8	2.1	621.4	砂岩	青灰	一部欠	
	9	5区	落ち込み		砥石	10.1	7	4.2	400.5	砂岩	青灰	一部欠	
	10	5区	落ち込み	下層	おもり石	17.4	10	9.5	2555.7	玄武岩	灰	完形	
	11	5区	落ち込み		砥石	9	6.2	3.2	266.1	砂岩	黄褐	一部欠	
	12	3区	落ち込み	最下位	石斧	9.5	4.5	4.3	280	頁岩	暗赤褐	1/2欠	
	13	6区	造成土	4b層	すり石(凹石)	10.55	8.5	4.8	737.1	玄武岩	灰	完形	
	14	6区	造成土	4b層	磨石・凹石・敲石	10.1	8.2	3.9	526.5	玄武岩	灰	完形	
第44図	15	2区		4c層	凹石・敲石	12.5	10.1	4.2	785.9	玄武岩	灰白	完形	
	16	1区		4c層	すり石	11.9	11.6	5	1096.1	玄武岩	灰	完形	
	17	1区		4c層	磨石(凹石)	12	9.1	6.6	1195	玄武岩	灰	完形	
	18	6区		4c層	砥石	7	4	2.8	124	頁岩	暗灰	一部欠	折り取ったようにも見える
	19	4区		4a層	磨石(凹石)	10.9	9.3	5.3	412.5	玄武岩	灰	完形	
	20	3区		4a層	すり石	11	9.3	5.4	818.2	玄武岩	灰白	完形	
	21	3区		4a層	敲石	10.6	6.6	5.3	530	変成岩	灰	完形	灰白色の網目状の模様が入る
	22	3区		4a層	砥石	16.8	18.3	4.2	1696.2	砂岩	青灰	一部欠	
第45図	23	3区		4a層	くぼ石	14.5	10.4	5.5	680	多孔質玄武岩	灰	一部欠	
	24	3区		4a層	石錘	17.6	10.1	6.9	1766	玄武岩	灰白	完形	
	25	5区		1層	磨石・敲石・凹石	11.5	9.5	3.6	643.2	玄武岩	灰白	完形	
	26	5区		1層	磨石(凹石)	11	10.4	5.6	1012.3	玄武岩	灰	完形	被熱
	27	1区		3c層	砥石	4.5	4.7	2.9	80	砂岩	灰黄褐	一部欠	
	28	6区		3層	支脚形石製品	16.5	11.3	6.3	900	多孔質玄武岩	暗赤褐	完形	
	29	1区		3c層	凹石・敲石	14.2	9	7.9	1557	玄武岩	灰	完形	
第46図	30	2区		4c層	削器	6.5	3	0.7	14.8	黒曜石	漆黒	完形	
	31	3区		3層	石核	4.8	4.4	2.8	62.8	黒曜石	漆黒	傷を多く受ける	
	32	5区		2層	打製石剣	6	3.4	1	27.1	サヌカイト	暗灰	先欠	瀬戸内・畿内系?
	33	3区		4c層	石剣	5.8	3.2	0.8	13.1	頁岩	灰白	先端部のみ	裏面風化を受ける
	34	4区		4c層	石剣	7.4	3.4	0.5	21.1	頁岩	灰白	先欠	
	35	5区		2層	石錘	7.9	3.7	3.7	120.5	砂岩	灰	一部欠	
	36	3区		4a層	石錘	3.1	1.6	0.75	4.5	頁岩	暗灰	1/4残	

⑸　小結

ピット群について

昨年度の調査で検出したピット群の続きを今年度確認する事ができた。昨年度検出のピット群は標高５ｍの地点に位置する。地形は，そこから南西方向へ向けて緩やかに標高が上がり微高地となる。ピット群の南西方向に位置する今年度の調査区６区での５層（弥生時代中期の包含層の下にある無遺物層）の標高は5.8ｍあり，直線距離で40ｍ離れているが比高差は0.8ｍである。この微高地の標高5.4ｍの３区を中心として，濠（93－ＳＤ１），濠（08－ＳＤ１），落ち込み（08－落ち込み）に囲まれた20ｍ×10ｍの範囲に200あまりのピットを確認した。現在行っているピットのデータ整理が終わった時点で，指導委員の先生に検討をしていただき，これらピットに伴う建物について意見を頂く予定である。

濠（08－ＳＤ１）について

濠は６区の西壁際から北へ延びるが延長上には落ち込み（08－落ち込み）があり，この濠は落ち込みの手前で止まると思われる。その場合には，全長が10ｍほどでこれまで石田高原地区で確認した濠の中では最も短い濠になる。このような短い濠は，1998（平成10）年の不條地区の調査でも確認されている（『原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第16集』掲載の３号濠）。３号濠は全長14ｍ，幅３ｍ，深さ1.3ｍを測り，出土した遺物から弥生時代後期に掘られ古墳時代前期に埋没したと考えられている。今回検出した濠（08－ＳＤ１）も出土遺物から，弥生時代前半に掘られ弥生時代後期から古墳時代初頭にかけて埋没していったと思われる。次に，この短い濠の用途であるが，同じ時期に存在した08－落ち込みや93－ＳＤ１とともに機能することで，丘陵部への直接的な進入を困難にするための施設と思われる。この場所は浅い谷が丘陵の中心域へ向かって延びており，丘陵へ向かう道の存在も考えられる。

整地層について

６区で確認した。部分的な掘削で詳細は不明だが，セクションで見る限り５層の凹凸を整地したようにも見える。南壁では，東側は薄くなり６区の東に設定した５区までは至っていない。４区を中心に見られた整地層と同じ一連の土木工事によりなされた可能性もある。

落ち込み（08－落ち込み）について

今回の調査ではこの落ち込みの南と西の立ち上がり部分について掘削を行った。一番低いレベルの所謂底までは掘削をしていないのだが，５区の北壁際で行った掘削と自然化学分析により，この落ち込みについての情報は一部得られたと思う。まずこの落ち込みの形状であるが，平面形は不整形で，立ち上がりも緩やかだったり急だったりと揃っていない。このことから，この落ち込みは自然の沼状の落ち込みであり，人工的なものではないといえる。この落ち込みと人々の関わりについてであるが，⑧層より弥生時代中期前葉の土器が出土していることから，このころから始まったと思われる。⑧層の珪藻分析の結果からも落ち込みに水の存在が示唆されている。また，３区からは落ち込みの落ち際から丹塗りの袋状口縁壺が３固体出土していることと，⑦層からは弥生時代後期初頭から前葉にかけての丹塗りと思われるほぼ完形の短頸壺が出土していることから，水に関わる祭りが行われたことが窺える。⑦・⑥層の珪藻分析の結果によると，落ち込みは水がなくなりしばしば乾燥する環境にあったと考えられている。⑦・⑧層からは弥生時代後期後半の土器が多く出土している。このことから，

この落ち込みは弥生時代前半ごろから水の供給が悪くなり始め，弥生時代後期後半以降には廃棄物の投棄場になったと思われる。昨年度の調査ではこの落ち込みの北西15mの場所に弥生時代後期前半まで使われた「溜井」と思われる落ち込み（07－落ち込み）を確認している。今回検出した落ち込み（08－落ち込み）は07－落ち込みと時期的に重なる部分があり，「溜井」としての利用は無かったのではないかと思われる。

箱式石棺墓について

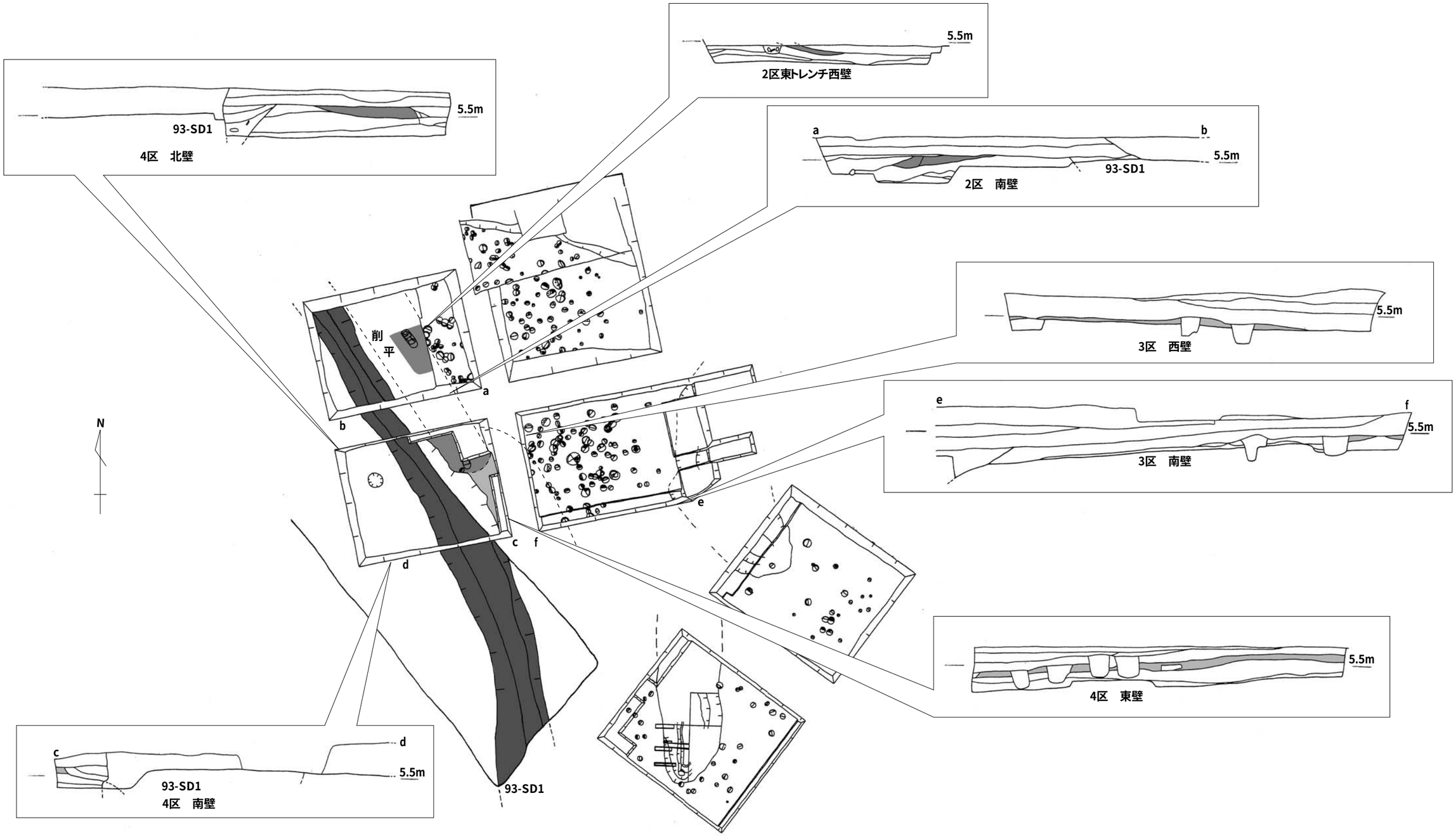
１基のみの検出であった。このような水が湧く場所に墓を作るとは考えもせず，板石を検出した時は礎板代わりの板石であろうと思っていた。周囲からは，石棺や甕棺を検出する事はできず墓域の中の墳墓ではないことが分かった。棺長が0.9mと短いことから幼・小児用の棺と思われる。墓域外から石棺が単独で出土した例は今回が初めてであるが，甕棺の単独出土例は不條地区の例（『原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第16集』『原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第29集』）がある。いずれも幼・小児棺であることから幼・小児については墓域外への埋葬もまれにあったといえよう。今回検出した箱式石棺墓もこれらと同じ状況と思われる。

造成土について（第47図）

今回石田高原地区の調査で初めて確認した粘質土からなる造成土と思われる層であるが，大きく２種類に分かれる。一つは４区北壁や２区に見られるように，粘質土のみを使い濠の際に盛り上げた例（４ｂ層）と，土混じりの粘質土を薄く広げた例（４ｂ①層）である。土混じりの粘質土（４ｂ①層）について考えると，この層は４区を中心に３区の西側に見られる。３区の南壁セクションで見ると，４ｂ①層は西側には見られるが東へ進むと二次堆積土となりその後無くなってしまう。次に粘質土のみを使った４ｂ層を見ると４区北壁から２区南壁で見られ，さらに北へ延び２区の途中から削平のために無くなっている。今回確認した造成土の東には多重環濠の内濠である93－ＳＤ１が丘陵の際に沿うように位置する。４ｂ層は濠の外側に積まれており，濠の構造に直接関わる造成土であり，４ｂ①層は濠に付随する周辺の整地等の造成土と思われる。セクション図を見ると４ｂ層と４ｂ①層の境が４区内に平面で現れると思えるが，調査時の観察不足で平面での確認を行っていない。造成土の時期についてであるが，93－ＳＤ１は断面の観察と出土遺物から，弥生時代中期に掘削された後，弥生時代後期初頭に掘り直しがおこなわれていることを報告しているので，この造成土も弥生時代後期初めの濠の掘り直しに伴う土木工事によるものと考える。

土地利用について

今回の調査では，同じ石田高原地区調査でもこれまでの調査と比べると土層の残りが良いという印象を強く持った。例えば，今回初めて検出した濠（08－ＳＤ１）は深さが1.5mあり，この地区で検出した濠の中では一番深い。本地区の中でも最も低地部に当たる２年前の調査区で確認した濠は，深さが１mにも満たないものであり，弥生時代の包含層に至ってはわずか10㎝ほどであった。代わりに，低地部では古代から中世にかけての包含層が残り，当該期の出土遺物もより多い。このことから，石田高原地区においては古代・中世の時代に盛んに土地改変が低地部では行われ，今回の調査地のような微高地には手を加えることがなかったと考えられる。古代から始まった土地改変は水田開発に伴う土地改変であり，水田に適さない微高地は近世まで大きく手を加えられることがなかったといえよう。

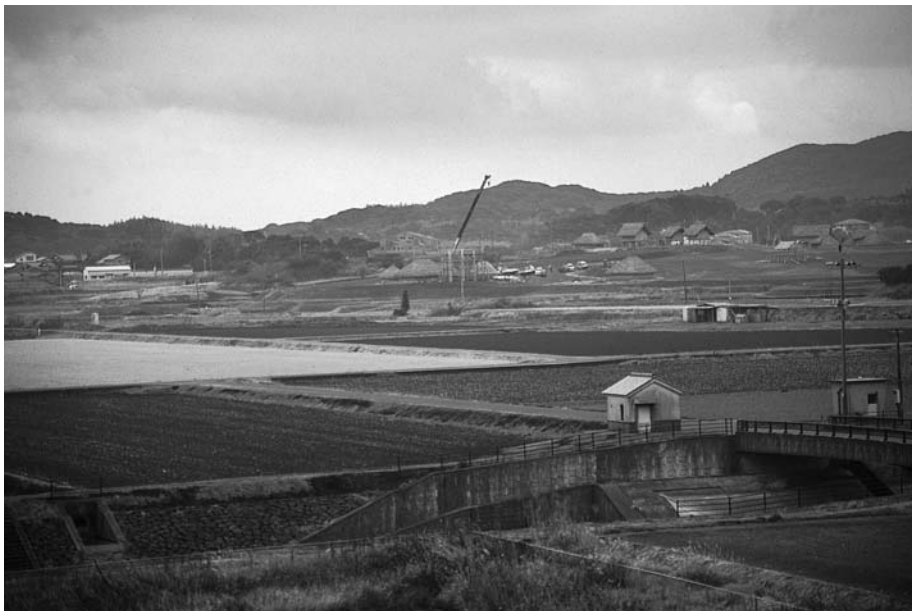


濠（93-SD1）

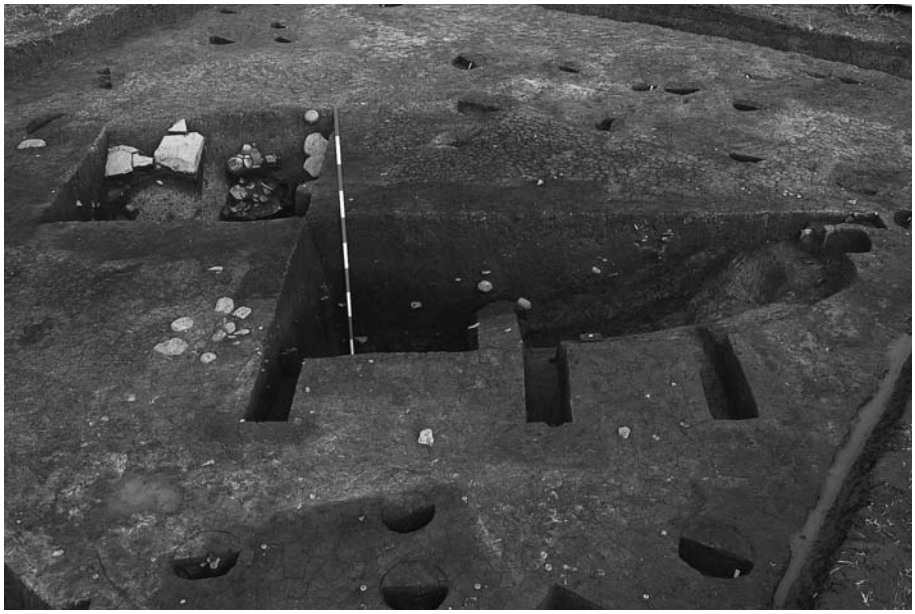
造成土（=4b層）　造成土（=4b①層）

※平面図は１/250，土層断面図は１/80

第47図　石田高原地区　濠（93－SD１）に伴う造成土の範囲



調査区遠景（北から）



溝（08－SD１）
（西から）

溝（08－SD１）
（北から）

写真２

落ち込み（08－落ち込み）５区（南東から）

落ち込み（08－落ち込み）３区（西から）

造成土（４ｂ層）の状況（４区北壁）

造成土（４ｂ①層）の
状況（４区東壁）

箱式石棺墓検出状況
（東から）

箱式石棺墓完掘状況
（東から）

第17表　2008（H20）　調査研究事業調査(国補調査)
石田高原地区調査区座標一覧

石田高原地区①	X	Y
北東杭	84130.072	23612.963
南東杭	84108.565	23617.570
南西杭	84103.969	23596.006
北西杭	84121.574	23592.332
中央南杭	84123.671	23602.051
中央北杭	84127.583	23601.204

石田高原地区②	X	Y
北東杭	84109.885	23623.953
南東杭	84104.023	23632.058
南西杭	84087.078	23619.718
北西杭	84092.867	23611.636

第18表　2008(H20)　調査研究事業調査(国補調査)　八反地区

調査区	地点	X	Y	Z	備考
1区	北東杭	84007.976	23225.162	－	1段目
1区	南東杭	84003.252	23226.713	－	1段目
1区	南西杭	83997.021	23207.679	－	1段目
1区	北西杭	84001.755	23206.117	－	1段目
2区	北東杭	83970.426	23237.399	－	1段目
2区	南東杭	83965.697	23238.952	－	1段目
2区	南西杭	83959.463	23219.934	－	1段目
2区	北西杭	83964.212	23218.393	－	1段目
3区	北東杭	83932.405	23249.839	－	1段目
3区	南東杭	83927.665	23251.378	－	1段目
3区	南西杭	83921.460	23232.355	－	1段目
3区	北西杭	83926.189	23230.807	－	1段目
1区東	北東点	84006.091	23224.186	5.587	2段目
1区東	南東点	84004.179	23224.820	5.600	2段目
1区東	南西点	84001.705	23217.220	5.560	2段目
1区東	北西点	84003.598	23216.599	5.564	2段目
1区西	北東点	84003.257	23215.629	5.531	2段目
1区西	南東点	84001.394	23216.250	5.550	2段目
1区西	南西点	83998.925	23208.670	5.570	2段目
1区西	北西点	84000.803	23208.049	5.547	2段目
2区東	北東点	83968.531	23236.474	5.516	2段目
2区東	南東点	83966.640	23237.105	5.560	2段目
2区東	南西点	83964.144	23229.490	5.417	2段目
2区東	北西点	83966.044	23228.888	5.371	2段目
2区西	北東点	83965.742	23227.909	5.336	2段目
2区西	南東点	83963.846	23228.543	5.377	2段目
2区西	南西点	83961.338	23220.947	5.302	2段目
2区西	北西点	83963.247	23220.337	5.252	2段目
3区東	北東点	83930.502	23248.904	5.518	2段目
3区東	南東点	83928.619	23249.517	5.515	2段目
3区東	南西点	83926.123	23241.929	5.492	2段目
3区東	北西点	83928.031	23241.301	5.491	2段目
3区西	北東点	83927.726	23240.356	5.506	2段目
3区西	南東点	83925.803	23240.968	5.507	2段目
3区西	南西点	83923.337	23233.353	5.507	2段目
3区西	北西点	83925.223	23232.746	5.529	2段目

２．八反地区の調査

⑴　調査概要

①平成８年度の調査概要

平成８年度の調査では，Ａ－17～18区で畦畔遺構が，Ａ－24区で濠１条が，Ｄ－１～６区で溝８条と濠１条が確認されている**〔西1998〕**。畦畔遺構は北東－南西軸で伸び，盛り土での内部には木材が入れられ，南側は矢板で補強されている。検出された遺構の西端より弥生時代前期末～中期初頭の土器が出土しているため，原の辻遺跡が集落として形成された頃の遺構となる。またＤ－１～６区で確認された溝のうち，２条の溝（Ｄ－３区の13号～14号溝）から須玖Ⅱ式に比定される土器（弥生時代中期後葉～終末）が出土している。

②平成20年度の調査概要

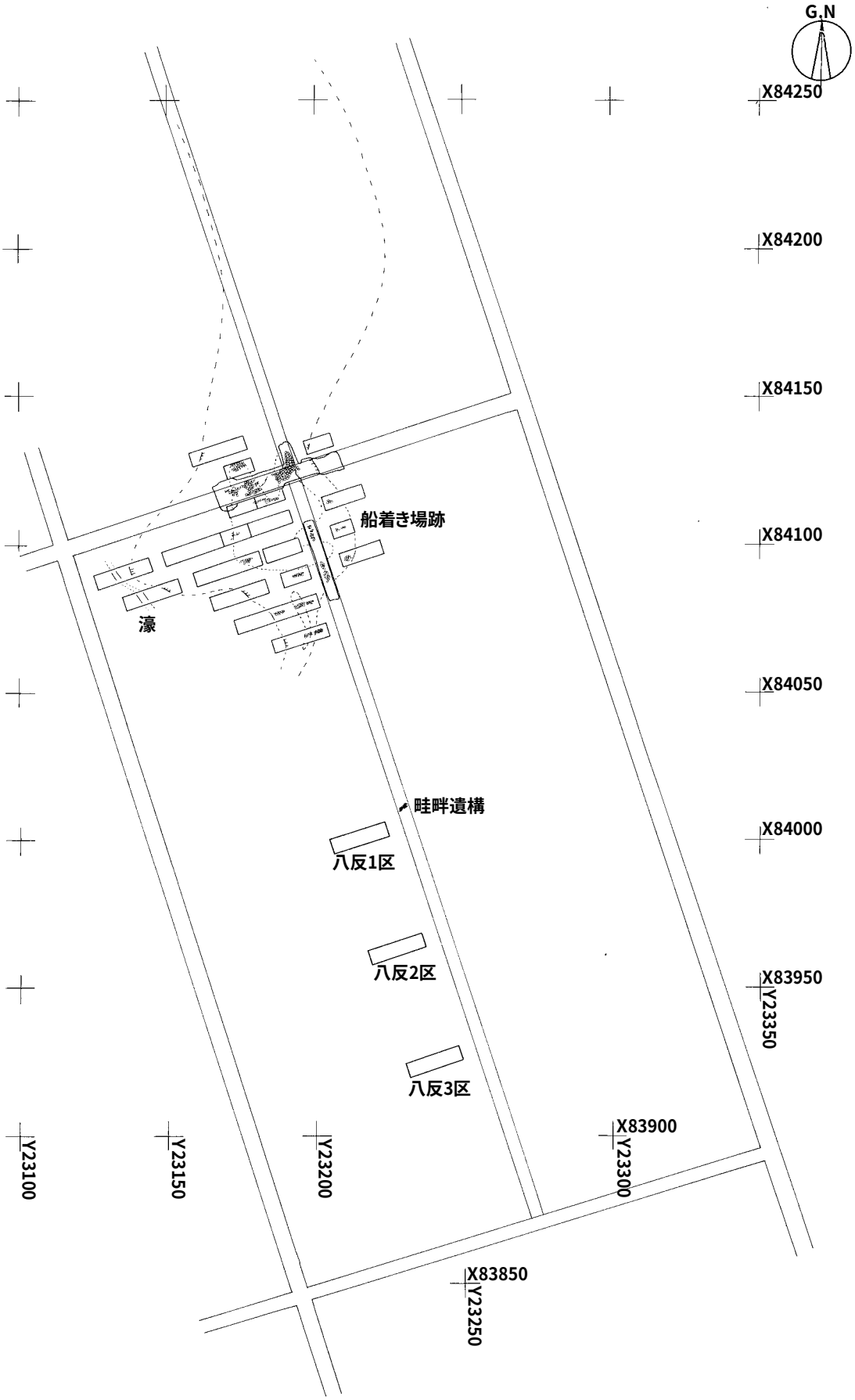
平成20年度の調査面積は300㎡で，調査期間は平成20年10月20日から同年12月15日，作業日数は26日を要した。調査区は100㎡（５ｍ×20ｍ）のトレンチを３カ所設定し，北側から１～３区とした。特に１区は平成８年度の調査で確認された畦畔遺構に隣接するように設定し，畦畔遺構の南西延長部分を確認することを目的とした。この調査地は圃場整備がなされているため，地表面と遺構面との標高差が大きくなると予想されたため，安全面を考慮して２段に分けて掘り下げた。重機で圃場造成時の客土を掘り下げた後に，16㎡（２ｍ×８ｍ）の小トレンチを各調査区に２カ所ずつ設定し，東側をＥ区，西側をW区（以下，１区であれば１－Ｅ区，１－W区）とした。

調査の結果，１区で河川跡と１号溝状遺構，４本の杭を確認した。２区においては２号および３号溝状遺構を確認し，３区で４号，５号，６号，７号溝状遺構を確認した。また，２区および３区で落ち込みを確認した。

⑵　土層

基本層序として確実に把握できるのは１層のみで，それ以外の土層では調査区によって土質や色調に若干の差違がある。これは八反地区を含む遺跡西側低地部が，河川や溝などの氾濫や蛇行などの影響で土壌の堆積が頻繁に繰り返されたためと推測される。

１区を説明する。１～２層は暗褐色土層（10YR3/3）で，１層は鉄分を多く含み，２層は１層よりも暗い色調である。ともに微量の炭化粒を含む。３～４層はにぶい黄褐色土層（10YR7/4）で，３層は鉄分が多く，２層からの踏み込みが多く見られる。４層の下部には炭化物がラミナ状に堆積する様相が見られる。５～６層はにぶい黄褐色土層（10YR5/4）で，６層に多くの鉄分と炭化物が見られる。６層は６ａ層と６ｂ層に細分したが，これは６ｂ層に白色粘土が粒状に混入するためである。７層は灰白色粘土層（10YR7/1）で，粘性が極めて強い。均質な粘土の体積で，１区東側で確認した杭の打ち込み面と思われる。８層は黒色腐食土層（10YR2/1）で，木の葉や枝などの植物が堆積して黒く腐食（または変色）している。かなり大きな丸太も見られる。下部では砂がラミナ状に堆積する様相を見せる。９層は灰白色土層（10YR7/1）で，上層からの混入か若干，砂を含むが，基本的には均質な粘土の体積である。10層は青灰色土層（10BG5/1）で，岩石の風化層のようにパサパサとしている。

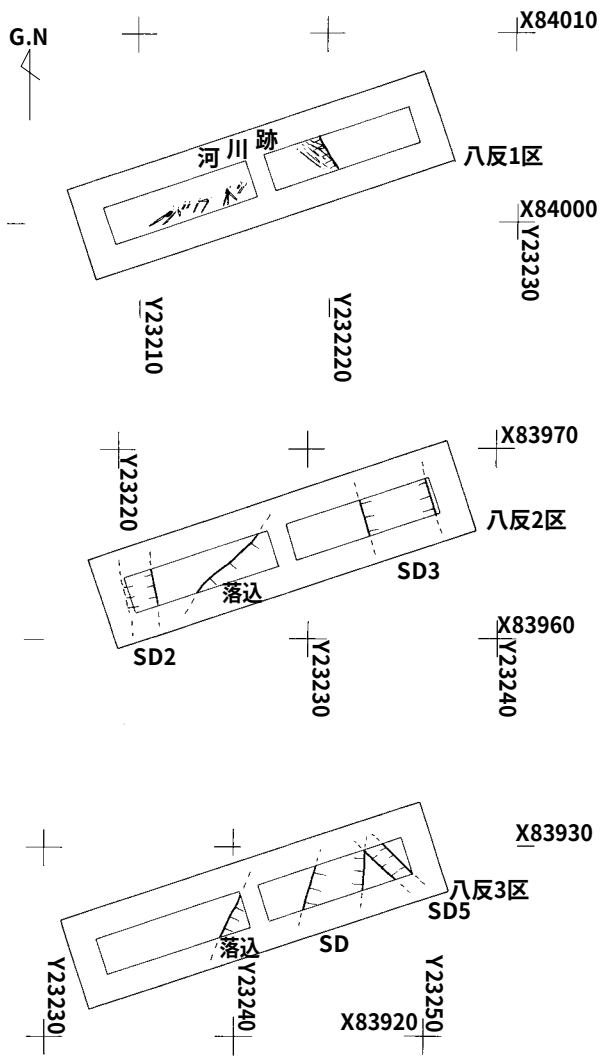


第48図　八反地区　調査区位置図（1/2,000）

検出時は青灰だが，空気に触れて時間が経つとオリーブ灰（2.5GK5/1）に変色する。なお７～８層は後述する河川跡の堆積である。

２区を説明する。１ａ～１ｂ層は黄褐色土層（10YR5/6）で，ともに鉄分を多く含み，明るい茶色を呈する。１ａ層には上層の混入（踏み込みか？）と思われる暗褐色土が不規則に混じり込む。１ｃ層は褐灰色土層（10YR4/1）で，部分的な堆積を見せる。２層は黄褐色土層（10YR5/6）で，岩石の風化層なのかパサパサとした質感で，鉄分も多く含む。１区では10層が同じ質感であるが色調が異なる。異なる断層の岩石が風下したものであろうか。

３区を説明する。１層は黄褐色土層（10YR5/6)で，炭化粒を多少含む。２層は黒色土層(10YR2/1）で，粘性の弱い黒色土がベルト状に堆積する。３層は黄褐色土層（10YR5/6）で，脆い小石を含む。パサパサしており，風化層のような質感である。



第49図　八反地区　平面図（1/400)

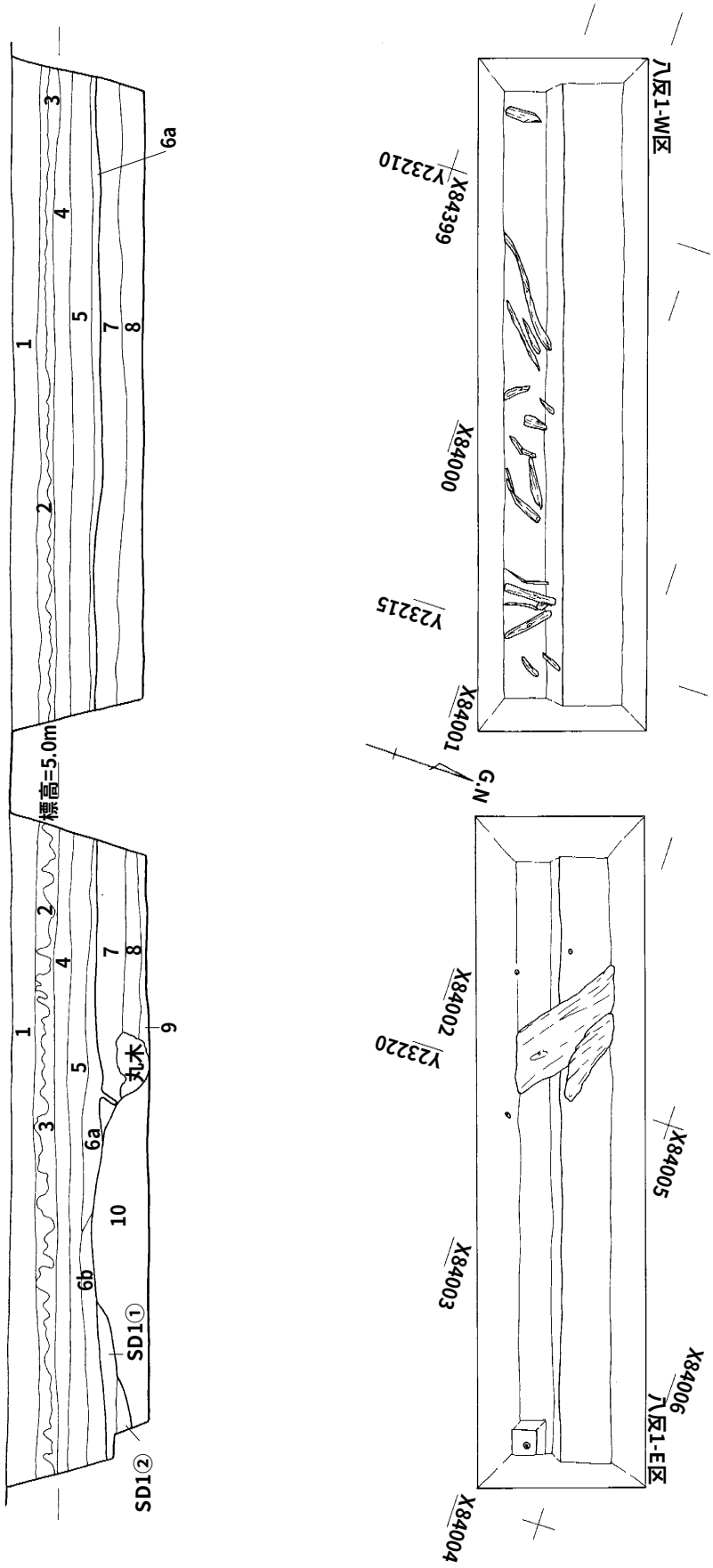
⑶　遺構

①河川跡

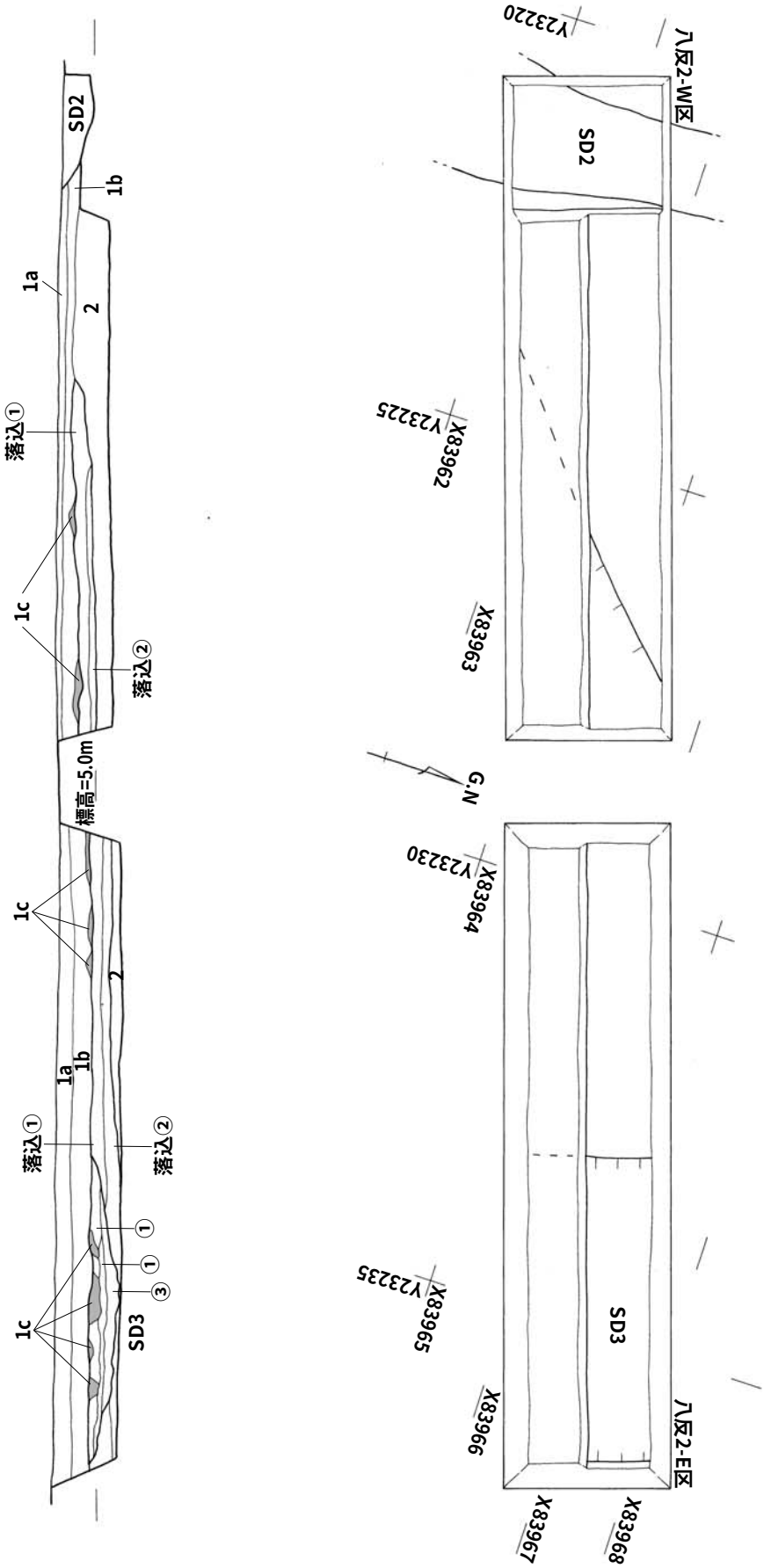
１－Ｅ区で東側の岸辺（立ち上がり）を確認した。堆積は２層で，前述の７～８層である。７層より素焼き土器片が１点出土しているが，摩滅が著しく，磁器の判別はできなかった。８層の堆積状況は平成19年度調査の八反地区（船着き場跡）で確認された船着き場跡西側河川における７層に相当すると思われる**〔林2008〕**。この７層は河川の河床となる堆積で，標高４ｍ付近で黒褐色の有機質が帯状に堆積し，丸太などの流木も含まれていた。この河川跡と平成19年度調査における船着き場跡西側河川が繋がる可能性はあるが，現状では不明である。７層が打ち込み面と思われる杭を放射性炭素年代測定にかけたところ2570±30yrBP の年代値を得た。歴年代では BC600年前後となり，縄文時代晩期に相当する。原の辻遺跡から出土する上限資料は弥生時代前期後葉であるため，それを遙かに遡る人工物であるかどうか疑問が残る。

②溝状遺構（ＳＤ）

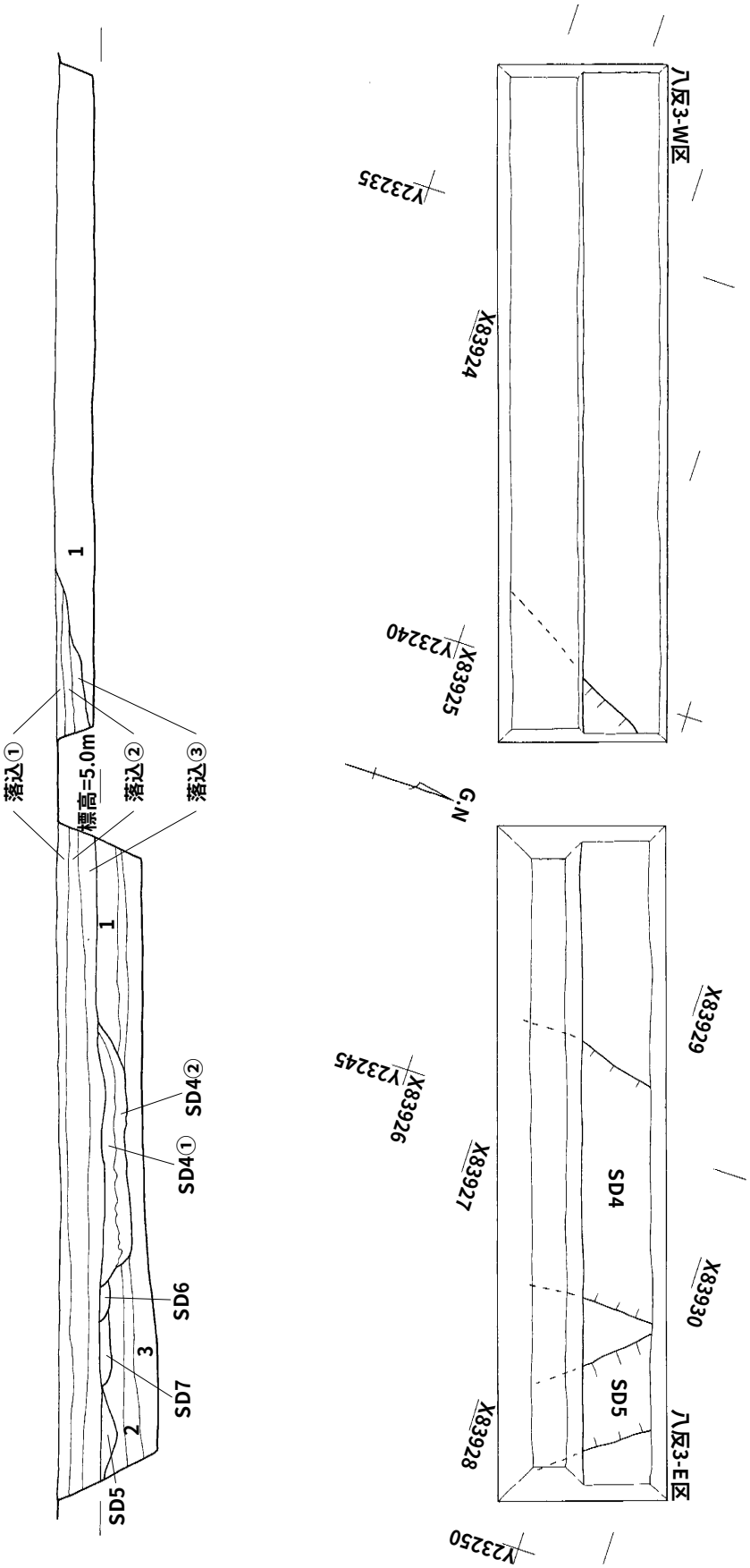
１号溝状遺構（ＳＤ１）は１－Ｅ区で確認した。東側の岸辺（立ち上がり）は確認できなかった。堆積は２層で，ＳＤ１①層は灰白色粘質土層（10YR7/1）で微量の炭化粒を含む。ＳＤ１②層は黒色土層（10YR2/1）で，炭化物を多く含んでいる。２号溝状遺構（ＳＤ２）は２－W区で確認した。堆



第50図　八反１区　平面・土層図（1/80）



第51図　八反２区　平面・土層図（1/80）



第52図　八反３区　平面・土層図（1/80）

積は１層で，ＳＤ２①層は黒褐色土層（10YR3/1）で，炭化物が多少見られるが，全体的には均質な土壌の堆積である。３号溝状遺構（ＳＤ３）は２－Ｅ区で確認した。堆積は３層で，ＳＤ３①層は灰黄褐色土層（10YR6/2）で，炭化物や白色の粘土粒などの混入物が多く，斑状となる。ＳＤ３②層は灰白色土層（10YR7/1）で，白色の粘土が薄く堆積し，上層と混じり合う所が多い。ＳＤ３③層は灰黄褐色土層（10YR5/2）で，ＳＤ３①層よりも暗い色調である。炭化物や白色の粘土粒などの混入物が多く，下部では炭化物がラミナ状に堆積する様相を見せる。４号溝状遺構（ＳＤ４）は３－Ｅ区で確認した。堆積は２層で，ＳＤ４①層は褐灰色土層（10YR5/1）で，炭化物が多く混入する。ＳＤ４②層は灰黄褐色土層（10YR5/2）で，上層よりも明るい色調で，流木を多く含む。落ち込みよりも相対的に古い層序を示すため，放射性炭素年代測定を実施した結果，2610±30yrBP の年代値を得られ，落ち込み①層よりも古い年代が得られた。５号溝状遺構は３－Ｅ区で確認した。堆積は１層で，ＳＤ５①層は褐灰色土層（10YR5/1）で，炭化物の混入が多い。６号溝状遺構は３－Ｅ区で確認した，堆積は１層で，ＳＤ６①層は褐灰色土層（10YR5/1）で，短下粒が若干混じる。７号溝状遺構は３－E区で確認した。堆積は１層で，ＳＤ７①層は褐灰色土層（10YR5/1）で，白色の粘土粒を多く含み，斑状となる。

③落ち込み

２区および３区で確認した。①層は黄褐色粘質土層（10YR5/6）で，鉄分を含む。②～③層は褐灰色粘質土層（10YR6/1）で，②層はより鉄分を多く含む。③層は炭化粒が微量ながら見られる。北西から南東へ緩やかに傾斜する様相を見せる。

遺構検出当初，この落ち込みが水田である可能性を考慮し，「水田様落ち込み」として植物珪酸体分析（プラントオパール）および放射性炭素年代測定を実施した。結論からいえば，①層，②層ともに珪酸体含有量が少なく，この遺構面での稲作を想定し得ない。また年代測定では①層が2490±30 yrBP の年代値が得られた。

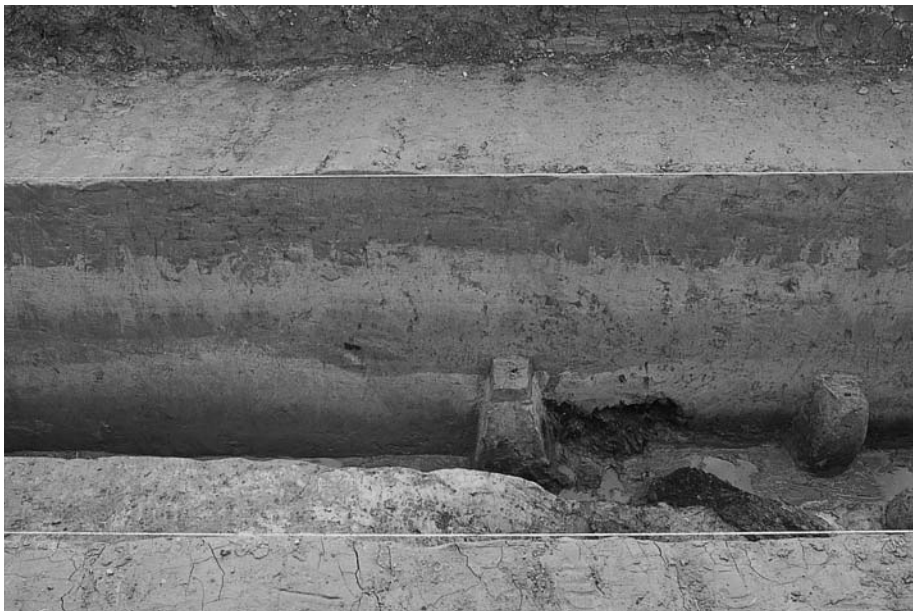
⑷ まとめ

今年度の八反地区における発掘調査では水田関連遺構は確認されなかった。確認された遺構はおそらく自然に形成された流路や落ち込みと思われ，遺跡西側における低地部での流水環境が，めまぐるしく変遷していたことを推測させるに留まる内容である。１区で確認した杭４本については，何らかの遺構である可能性を想定していたが，年代測定の結果は原の辻遺跡がまだ本格的な集落として形成される遙か以前の年代値を示していた。平成12年度の農道調査**〔杉原2001〕**で検出した矢板が2440±70年，平成15年度の県道緊急調査**〔林2005〕**における水田遺構で確認された矢板が2540±60年（β線係数法）と同様の年代値を示している点もあわせて不可解な印象を受ける。

【参考文献】

西　信男（1998）『原の辻遺跡』（原の辻遺跡調査事務所調査報告書 第４集）長崎県教育委員会
林　隆広（2005）『原の辻遺跡』（原の辻遺跡調査事務所調査報告書 第29集）長崎県教育委員会
林　隆広（2008）『原の辻遺跡』（原の辻遺跡調査事務所調査報告書 第38集）長崎県教育委員会

写真４



八反１－Ｅ区河川跡

八反３－Ｅ区溝状遺構

八反３－W区落ち込み

原の辻遺跡における放射性炭素年代（AMS 測定）

㈱加速器分析研究所

１．測定対象試料

原の辻遺跡は，長崎県壱岐市芦辺町深江鶴亀触1113-１に所在する。測定対象試料は，石田高原１区・ピット49から出土した木片（No. １：IAAA-81939），八反１区・７層から出土した木片（No. ２：IAAA-81940），八反２区水田様落ち込み・①層の炭化物（No. ３：IAAA-81941），八反３区ＳＤ４・②層の木炭（No. ４：IAAA-81942），合計４点である。

２．測定の意義

ピットや水田様遺構などの遺構の年代を明らかにする。

３．化学処理工程

⑴　メス・ピンセットを使い，根・土等の表面的な不純物を取り除く。

⑵　酸処理，アルカリ処理，酸処理（AAA:Acid Alkali Acid）により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では１Ｎの塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では１Ｎの水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。なお，AAA 処理において，アルカリ濃度が１Ｎ未満の場合，表中に AaA と記載する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では１Ｎの塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後，超純水で中性になるまで希釈し，90℃で乾燥する。希釈の際には，遠心分離機を使用する。

⑶　試料を酸化銅と共に石英管に詰め，真空下で封じ切り，500℃で30分，850℃で２時間加熱する。

⑷　液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し，真空ラインで二酸化炭素（CO_2）を精製する。

⑸　精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し，グラファイトを作製する。

⑹　グラファイトを内径１㎜のカソードに詰め，それをホイールにはめ込み，加速器に装着する。

４．測定方法

測定機器は，３MV タンデム加速器をベースとした^{14}C-AMS 専用装置（NEC　Pelletron９SDH-２）を使用する。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

５．算出方法

⑴　年代値の算出には，Libby の半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polash1977）。

(2) ^{14}C 年代（Libby Age:yrBP）は，過去の大気中^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され，1950年を基準年（０yrBP）として遡る年代である。この値は，$\delta^{13}C$ によって補正された値である。^{14}C 年代と誤差は，１桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また，^{14}C 年代の誤差（±１σ）は，試料の^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

(3) $\delta^{13}C$ は，試料炭素の^{13}C 濃度（$^{13}C/^{12}C$）を測定し，基準試料からのずれを示した値である。同位体比は，いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰）で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により$^{13}C/^{12}C$ を測定した場合には表中に（AMS）と注記する。

(4) pMC（percent Modern Carbon）は，標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C 濃度の割合である。

(5) 暦年較正年代とは，年代が既知の試料の^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ，過去の^{14}C 濃度変化などを補正し，実年代に近づけた値である。暦年較正年代は，^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり，１標準偏差（１σ＝68.2%）あるいは２標準偏差（２σ＝95.4%）で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は，下一桁を四捨五入しない^{14}C 年代値である。なお，較正曲線および較正プログラムは，データの蓄積によって更新される。また，プログラムの種類によっても結果が異なるため，年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは，暦年較正年代の計算に，IntCal04データベース（Reimer et al 2004）を用い，OxCalv4.0較正プログラム（Bronk Ramsey 1995　Bronk Ramsey 2001　Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001）を使用した。

６．測定結果

^{14}C 年代は，石田高原１区・ピット49から出土した木片（No.１）が2030±30yrBP，八反１区・７層から出土した木片（No.２）が2570±30yrBP，八反２区水田様落ち込み・①層の炭化物（No.３）が2490±30yrBP，八反３区 SD４・②層の木炭（No.４）が2610±30yrBP である。

No.３では，八反２区水田様落ち込み・①層の土壌中に含まれる複数の微細な炭化物を集めて採取している。その他は，１個体の木片や木炭で有り，その外側から採取した。No.４は小さな木炭であり，樹皮や木質の最外年輪付近を残す試料では無かった。したがって，内側の年輪部を測定したことによって，樹木の枯死年代よりも古い年代を示す結果となった可能性がある。

試料の炭素含有率は58.3～76.5%であり，十分な値であった。化学処理および測定内容にも問題は無く，妥当な年代と判断される。

暦年較正年代（１σ）から判断すれば，No.２は No.３および No.４と重複する時期を含むため，厳密に両者と時期差があるとは言えない。No.１，No.２，No.４には明確な時期差があり，それぞれ異なる年代の試料と考えられる。

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}C$（‰）（AMS）	$\delta^{13}C$ 補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC（%）
IAAA-81939	No.１	石田高原１区　ピット49	木片	AAA	−22.41±0.36	2,030±30	77.66±0.28
IAAA-81940	No.２	八反１区　７層	木片	AAA	−25.50±0.40	2,570±30	72.63±0.27
IAAA-81941	No.３	八反２区水田様落ち込み　①層	炭化物	AaA	−25.45±0.65	2,490±30	73.38±0.28
IAAA-81942	No.４	八反３区 SD４　②層	木炭	AAA	−32.30±0.75	2,610±30	72.26±0.27

［＃2569］

測定番号	δ^{13}C 補正なし		暦年較正用	1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
	Age(yrBP)	pMC(%)	(yrBP)		
IAAA-81939	1,990±30	78.07±0.28	2,031±29	88BC-77BC(6.4%) 56BC-19AD(61.8%)	157BC-137BC(3.0%) 113BC-30AD(89.4%) 37AD-52AD(3.0%)
IAAA-81940	2,580±30	72.55±0.26	2,569±29	800BC-763BC(61.8%) 680BC-673BC(6.4%)	808BC-749BC(71.7%) 688BC-666BC(12.8%) 642BC-591BC(9.5%) 578BC-566BC(1.4%)
IAAA-81941	2,490±30	73.31±0.26	2,486±30	760BC-726BC(12.9%) 694BC-683BC(4.0%) 670BC-541BC(51.3%)	774BC-506BC(92.4%) 462BC-451BC(0.9%) 441BC-418BC(2.1%)
IAAA-81942	2,730±30	71.18±0.24	2,609±30	810BC-783BC(68.2%)	827BC-766BC(95.4%)

［参考値］

参考文献

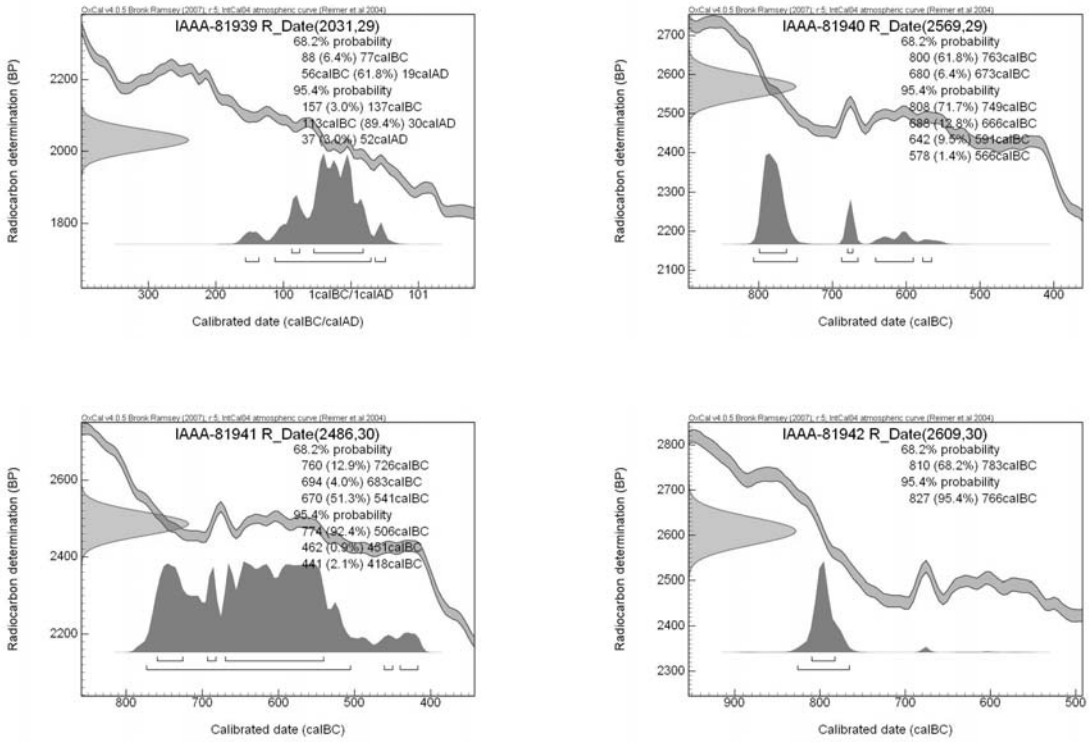
Stuiver M. and Polash H. A.1977 Discussion: Reporting of 14 C data, *Radiocarbon* 19, 355-363

Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, *Radiocarbon* 37(2), 425-430

Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon* 43 (2 A), 355-363

Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001' Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon* 43 (2 A), 381-389

Reimer, P. J. et al. 2004 IntCal 04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP, *Radiocarbon* 46, 1029-1058



［参考］暦年較正年代グラフ

原の辻遺跡の自然科学分析

はじめに

原の辻遺跡は，長崎県壱岐郡芦辺町・石田町に所在し，壱岐島南東部の深江田原と呼ばれる平野に舌状に伸びた台地を中心に立地する。これまでの発掘調査から，本遺跡は弥生時代・古墳時代を主体とした集落跡であることが知られており，環濠・道路状の遺構，高床式建物跡の柱穴跡，船着き場跡，石敷遺構，水田の畦畔遺構などが確認されている。

本報告では，石田高原地区，八反地区より採取された土壌試料，木材試料を対象に，古植生，堆積環境，柱材の樹種，水田検証に関する情報を得ることを目的として，花粉分析，珪藻分析，樹種同定，植物珪酸体分析を実施する。

１．試料

石田高原地区の試料は，土壌試料が石田高原４区より２点（弥生時代中期包含層４ｃ層，４ａ層），石田高原５区より３点（落ち込み⑥層，⑦層，⑧層）の，計５点採取されている。これらの土壌試料の中で，石田高原４区の２点を用いて花粉分析を，石田高原５区の３点を用いて珪藻分析を実施する。試料の詳細は，結果とともに表に示す。木材試料は，石田高原１区より３点（ピット内柱根 pit47，pit 49，pit50）採取されている。これら３点について樹種同定を実施する。

八反地区の試料は，土壌試料が八反２区より２点（水田様落ち込み①層，②層）採取されている。これら２点について植物珪酸体分析を実施する。

２．分析方法

⑴　花粉分析

試料約10ｇについて，水酸化カリウムによる泥化，篩別，重液（臭化亜鉛，比重2.3）による有機物の分離，フッ化水素酸による鉱物質の除去，アセトリシス（無水酢酸９：濃硫酸１の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い，物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し，400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し，出現する全ての種類について同定・計数する。

⑵　珪藻分析

試料を湿重で７ｇ前後秤量し，過酸化水素水，塩酸処理，自然沈降法（４時間放置）の順に物理・化学処理を施して，珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後，カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後，プリュウラックスで封入して，永久プレパラートを作製する。検鏡は，光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い，メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し，珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する（化石の少ない試料はこの限りではない）。種の同定は，原口ほか（1998），Krammer（1992），Krammer & Lange-Bertalot（1986，1988，1991ａ，1991ｂ），渡辺ほか（2005），小林ほか（2006）などを参照し，分類基準は，Round *et. al.*（1990）に従う。なお，壊れた珪藻殻の計数基準は，柳沢（2000）に従う。

同定結果は，中心類（Centric diatoms；広義のコアミケイソウ綱 Coscinodiscophyceae）と羽状類（Pennate diatoms）に分け，羽状類は無縦溝羽状珪藻類（Araphid pennate diatoms：広義のオビケイソウ綱 Fragilariophyceae）と有縦溝羽状珪藻類（Raphid pennate diatoms；広義のクサリケイソウ綱 Bacillariophyceae）に分ける。また，有縦溝類は，単縦溝類，双縦溝類，管縦溝類，翼管縦溝類，短縦溝類に細分する。

各種類の生態性については，Vos & de Wolf（1993）を参考とするほか，塩分濃度に対する区分は Lowe（1974）に従い，真塩性種（海水生種），中塩性種（汽水生種），貧塩性種（淡水生種）に類別する。また，貧塩性種についてはさらに細かく生態区分し，塩分・水素イオン濃度（pH）・流水に対する適応能についても示す。そして，産出個体数100個体以上の試料については，産出率2.0%以上の主要な種類について，主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また，産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として，完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析にあたり，海水生種（真塩性種）～汽水生種（中塩性種）については小杉（1988），淡水生種（貧塩性種）については安藤（1990），陸生珪藻については伊藤・堀内（1991），汚濁耐性については渡辺ほか（2005）の環境指標種を参考とする。

⑶ 樹種同定

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の徒手切片を作製し，ガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し，プレパラートを作製する。生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し，その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお，木材組織の名称や特徴については，島地・伊東（1982）や Richter 他（2006）を参考にする。

⑷ 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理，沈定法，重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム，比重2.5）の順に物理・化学処理を行い，植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後，プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し，その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下，短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下，機動細胞珪酸体と呼ぶ）を，近藤（2004）の分類に基づいて同定・計数する。

分析の際には，分析試料の乾燥重量，プレパラート作成に用いた分析残渣量，検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し，堆積物１ｇあたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物１ｇあたりの個数に換算）を求める。

結果は，植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際，100個/ｇ以下は「＜100」で表示する。各分類群の含量は10の位で丸め（100単位にする），合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。また，各分類群の植物珪酸体含量とその層位的変化から稲作の様態や古植生について検討するために，植物珪酸体含量の層位的変化を図示する。

３．結果

⑴　花粉分析

結果を表１に示す。いずれの試料においても花粉化石の産出状況が悪く，４ａ層からイネ科が，４ｃ層・４ａ層からシダ類胞子が数個体検出されるにとどまる。また，わずかに検出された花粉化石の保存状態は悪く，そのほとんどが，花粉外膜が壊れている状態で産出していた。プレパラート内の状況写真を図版に示す。

表１．花粉分析結果

種　類	石田高原４区 弥生時代中期包含層 ４ｃ層	４ａ層
試料番号	1	2
草本花粉		
イネ科	－	4
シダ類胞子		
シダ類胞子	3	4
合計		
木本花粉	0	0
草本花粉	0	4
シダ類胞子	3	4
総計	3	8

⑵　珪藻分析

珪藻化石の生態性区分や環境指標種群の説明を表２に，結果を表３，図１に示す。珪藻化石の産出頻度は，落ち込み⑥層と落ち込み⑧層が落ち込み⑦層と比較して少ない傾向があるが堆

表２．珪藻化石の生態性区分と環境指標種群

	塩分濃度に対する区分（Lowe，1974による）	
海水生種	強塩性種	塩分濃度40.0‰以上の高濃度海水域に生育する種
	真塩性種（海水生種）	塩分濃度40.0～30.0‰に生育する種
汽水生種	中塩性種（汽水生種）	塩分濃度30.0～0.5‰に生育する種
淡水生種	貧塩性種（淡水生種）	塩分濃度0.5‰以下に生育する種
	淡水生種の生態性区分	
塩分	貧塩好塩性種	少量の塩分がある方が良く生育する種
	貧塩不定性種	少量の塩分があってもこれに良く耐えることができる種
	貧塩嫌塩性種	小量の塩分にも耐えることができない種
	広域塩性種	淡水～汽水域まで広い範囲の塩分濃度に適応できる種
pH	真酸性種	pH5.5以下の酸性水域に最適の出現域がある種
	好酸性種	pH7.0以下の水域に主として出現する種
	pH 不定性種	pH7.0付近の中性水域で最も良く生育する種
Hustedt(1937－38)による	好アルカリ性種	pH7.0以上の水域に主として出現する種
	真アルカリ性種	pH7.0以上の水域にのみ出現する種
流水	真止水性種	止水域にのみ生育する種
	好止水性種	止水域に特徴的であるが，流水域にも生育する種
	流水不定性種	止水域にも流水域にも普通に生育する種
Hustedt(1937－38)による	好流水性種	流水域に特徴的であるが，止水域にも生育する種
	真流水性種	流水域にのみ生育する種

主に海水域での指標種群（小杉，1988による）	
外洋指標種群(Ａ)	塩分濃度が約35‰の外洋水中で浮遊生活するもの
内湾指標種群(Ｂ)	塩分濃度35～26‰の内湾水中で浮遊生活することからそのような環境を指標することのできる種群
海水藻場指標種群(Ｃ１)	塩分濃度35～12‰の海域で海藻（草）に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
汽水藻場指標種群(Ｃ２)	塩分濃度12～４‰の汽水域で海藻（草）に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
海水砂質干潟指標種群(Ｄ１)	塩分濃度35～26‰の砂底の砂に付着生育することからそのような環境を指標することができる種群
汽水砂質干潟指標種群(Ｄ２)	塩分濃度26～５‰の砂底の砂に付着生育することからそのような環境を指標することができる種群
海水泥質干潟指標種群(Ｅ１)	30～12‰の閉鎖性の高い塩性湿地など泥底の泥に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
汽水泥質干潟指標種群(Ｅ２)	塩分濃度12～２‰の汽水化した塩性湿地などの泥に付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
淡水底生種群(Ｆ)	２‰以下の淡水域の底質の砂，泥，水生植物などに付着生育することからそのような環境を指標することのできる種群
淡水浮遊生種群(Ｇ)	塩分濃度２‰以下の湖沼などの淡水域で浮遊生活することからそのような環境を指標することのできる種群
河口浮遊生種群(Ｈ)	塩分濃度20～２‰の河口域で浮遊生活，あるいは付着生活することからそのような環境を指標することのできる種群
主に淡水域での指標種群（安藤，1990による）	
上流性河川指標種群(Ｊ)	河川上流部の峡谷部に集中して出現することから上流部の環境を指標する可能性の大きい種群
中～下流性河川指標種群(Ｋ)	河川中～下流部や河川沿いの河岸段丘，扇状地，自然堤防，後背湿地などに集中して出現することから，そのような環境を指標する可能性の大きい種群
最下流性河川指標種群(Ｌ)	最下流部の三角州の部分に集中して出現することから，そのような環境を指標する可能性の大きい種群
湖沼浮遊性種群(Ｍ)	水深が約1.5m以上ある湖沼で浮遊生活する種群で湖沼環境を指標する可能性の大きい種群
湖沼沼沢湿地指標種群(Ｎ)	湖沼における浮遊生種としても沼沢湿地の付着生種としても優勢に出現することから，そのような環境を指標する可能性の大きい種群
沼沢湿地付着生種群(Ｏ)	沼よりも浅く水深が１ｍ前後で一面に水生植物が繁茂している沼沢や更に水深の浅い湿地で優勢な出現の見られることからそのような環境を指標する可能性の大きい種群

高層湿原指標種群（Ｐ）	ミズゴケを主体とした環境や泥炭が形成される環境に集中して出現することから，そのような環境を指標する可能性の大きい種群
陸域指標種群（Ｑ）	水中でなく，多少の湿り気のある土壌表面，岩の表面，コケなど常に大気に曝された好気的環境（陸域）に集中して生育することからそのような環境を指標する可能性の大きい種群
陸域での指標種群（伊藤・堀内，1991による）	
陸生珪藻Ａ群（ＲＡ）	陸生珪藻の中でも，分布がほぼ陸域に限られる耐乾性の高い種群
陸生珪藻Ｂ群（ＲＢ）	陸生珪藻Ａ群に随伴し，陸域にも水中にも生育する種群
未区分陸生珪藻（ＲＩ）	陸生珪藻に相当すると考えられるが，乾湿に対する適応性の不明な種群

表３．珪藻分析結果(1)

種　　類	生態性			環境指標種	石田高原５区落ち込み		
					⑥層	⑦層	⑧層
試料番号	塩分	pH	流水		1	2	3
Bacillariophyta（珪藻植物門）							
Centric Diatoms（中心型珪藻類）							
Aulacoseira ambigua（Grun.）Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-bi	N,U	2	1	―
Aulacoseira distans（Ehr.）Simonsen	Ogh-hob	ac-il	l-bi	N,U	4	1	―
Aulacoseira granulata（Ehr.）Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-bi	M,U	2	3	―
Actinoptychus spp.	Euh				―	3	―
Raphid Pennate Diatoms（有縦溝羽状珪藻類）							
Raphidineae（有縦溝類）							
Monoraphid Pennate Diatoms（単縦溝羽状珪藻類）							
Achnanthes inflata（Kuetz.）Grunow	Ogh-ind	ind	r-ph	T	―	―	1
Planothidium lanceolatum（Breb. ex Kuetz.）Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	―	―	4
Cocconeis scutellum Ehrenberg	Euh-Meh			C１	―	1	1
Biraphid Pennate Diatoms（双縦溝羽状珪藻類）							
Amphora copulata（Kuetz.）Schoeman et R.E.M.Archibald	Ogh-ind	al-il	ind	U	―	―	1
Amphora montana Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA,U	3	13	1
Amphora normanii Rabenhorst	Ogh-ind	ind	ind	RB	―	1	―
Placoneis elginensis（Greg.）E.J.Cox	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	―	―	1
Placoneis elginensis var. *neglecta*（Krasske）H.Kobayasi	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	―	1	1
Placoneis palaelginensis Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	―	1	―
Gomphonema parvulum（Kuetz.）Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	1	1	9
Gomphonema spp.	Ogh-unk	unk	unk		―	―	1
Diploneis ovalis（Hilse）Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	T	―	―	1
Navicula veneta Kuetzing	Ogh-Meh	al-il	ind	U	―	―	1
Navicula seposita var. *lanceolata* Haragushi	Ogh-ind	ind	l-ph		1	―	―
Navicula slesvicensis Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	T	―	―	1
Gyrosigma scalproides（Rabh.）Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	―	―	2
Gyrosigma sp.	Ogh-unk	unk	unk		―	―	1
Stauroneis anceps Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	T	―	―	3
Stauroneis borrichii（Pet.）Lund	Ogh-ind	ind	ind	RI	―	―	1
Stauroneis lauenburgiana Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind		―	―	13
Stauroneis phoenicenteron（Nitz.）Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O,U	―	―	1
Stauroneis phoenicenteron fo. *hattorii* Tsumura	Ogh-ind	ind	ind	O	―	―	1
Stauroneis smithii Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	―	―	1
Stauroneis tenera Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	―	―	1
Stauroneis spp.	Ogh-unk	unk	unk		―	―	1
Diadesmis biceps Arnott ex Grunow in Van Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	1	5	1
Diadesmis contenta（Grun.ex Van Heurck）D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	4	3	―
Luticola mutica（Kuetz.）D.G.Mann	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	14	44	2
Luticola ventricosa（Kuetz.）D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	RI,U	1	2	1
Caloneis aerophila Bock	Ogh-ind	ac-bi	ind	RA,S	―	―	1
Caloneis angustivalva Boye P.	Ogh-ind	ind	ind	RI	―	―	1

Caloneis leptosoma Krammer & Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	l-ph	RB	1	―	2
Pinnularia borealis Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA,U	2	―	3
Pinnularia brebissonii（Kuetz.）Rabenhorst	Ogh-ind	ind	ind	U	―	―	1
Pinnularia gibba Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	O,U	―	1	1
Pinnularia neomajor Krammer	Ogh-ind	ac-il	l-bi		―	―	1
Pinnularia nodosa Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	―	1	6
Pinnularia schoenfelderi Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RB	―	―	1
Pinnularia similiformis Krammer	Ogh-hob	ac-il	ind		―	―	2

表３．珪藻分析結果(2)

種　　類	生態性			環境指標種	石田高原５区落ち込み		
	塩分	pH	流水		⑥層	⑦層	⑧層
試料番号					1	2	3
Pinnularia subcapitata Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB,S	1	1	2
Pinnularia subcapitata var. *paucistriata*（Grun.）Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	U	―	1	1
Pinnularia viridis（Nitz.）Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	O,U	―	―	2
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk		―	1	4
Sellaphora laevissima（Kuetz.）Mann	Ogh-ind	ind	ind	U	1	―	―
管縦溝類							
Bacillaria paxillifer（O.F.Mull.）Hendey	Ogh-Meh	al-il	l-ph	U	―	―	1
Hantzschia amphioxys（Ehr.）Grunow	Ogh-ind	ind	ind	RA,U	73	109	17
Hantzschia amphioxys var. *vivax*（Hantz.）Grunow	Ogh-ind	al-il	ind		―	―	1
Nitzschia brevissima Grunow	Ogh-Meh	al-il	ind	RB,U	―	―	1
Nitzschia inconspicua Grunow	Ogh-Meh	al-il	ind	U	1	―	―
Nitzschia amphibia Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	S	1	―	―
Nitzschia parvuloides Cholnoky	Ogh-ind	ind	ind	U	1	2	―
Nitzschia cf. perminuta (Grun.)Peragallo	Ogh-ind	al-il	ind	RI,U	―	―	1
Nitzschia sp.	Ogh-unk	unk	unk		―	1	―
Tryblionella plana (W.Sm.)Pelletan	Meh				―	―	1
Rhopalodia gibba (Ehr.)O.Muller	Ogh-ind	al-il	ind	U	―	1	―
翼管縦溝類							
Surirella robusta Ehrenberg	Ogh-hob	ind	l-bi		―	―	1
短縦溝類							
Eunotia sp.	Ogh-unk	unk	unk		―	―	1
海水～汽水生種					0	1	1
汽水生種					0	0	1
淡水～汽水生種					1	0	3
淡水生種					113	194	99
珪藻化石総数					114	198	104

凡例

H.R.　：塩分濃度に対する適応性
Euh：海水生種
Euh-Meh：海水生種－汽水生種
Ogh-Meh：淡水－汽水生種
Ogh-hil：貧塩好塩性種
Ogh-ind：貧塩不定性種
Ogh-hob：貧塩嫌塩性種
Ogh-unk：貧塩不明種

pH：水素イオン濃度に対する適応性
al-bi：真アルカリ性種
al-il：好アルカリ性種
ind:pH 不定性種
ac-il：好酸性種
ac-bi：真酸性種
unk:pH 不明種

C.R.　：流水に対する適応性
l-bi：真止水性種
l-ph：好止水性種
ind：流水不定性種
r-ph：好流水性種
r-bi：真流水性種
unk：流水不明種

環境指標種群
C１：海水藻場指標種（小杉，1988）
K：中～下流性河川指標種，M：湖沼浮遊性種，N：湖沼沼沢湿地指標種，O：沼沢湿地付着生種（安藤，1990）
S：好汚濁性種，U：広域適応性種，T：好清水性種（以上は Asai & Watanabe，1995）
R：陸生珪藻（RA:A 群，RB:B 群，RI：未区分，伊藤・堀内，1991）

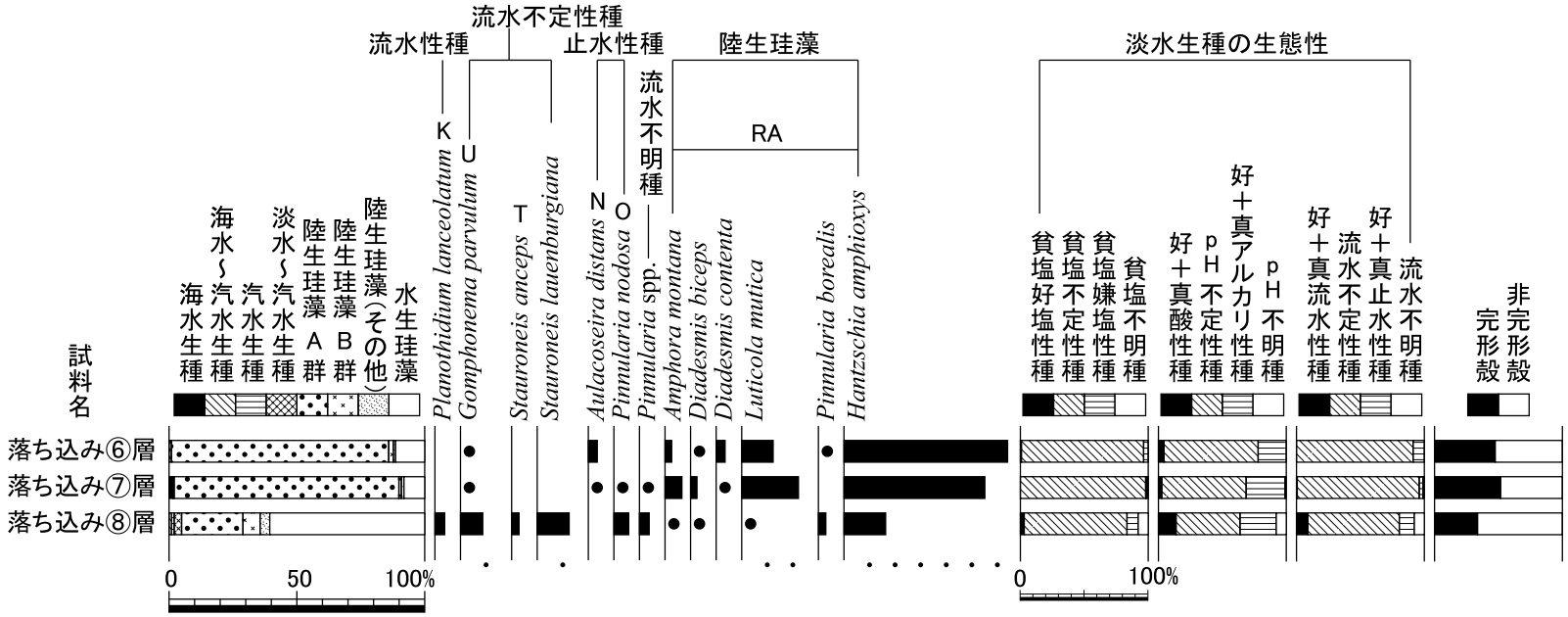


図１．石田高原５区における主要珪藻化石群集の層位分布

淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数，淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。なお，●は２％未満の産出を示す。

（環境指標種，K：中～下流性河川指標種，N：湖沼沼沢湿地指標種，O：沼沢湿地付着生種，U：広域適応性種，T：好清水性種，RA：陸生珪藻Ａ群）

積環境を検討する上で有意な量の珪藻化石が産出する。完形殻の出現率は，40-50%で，化石の保存状態は良好ではない。産出分類群数は，合計で24属54分類群である。

落ち込み⑧層は，淡水域に生育する水生珪藻（以下，水生珪藻という）が全体の約60%を占める。これに次いで，陸上のコケや土壌表面など多少の湿り気を保持した好気的環境に耐性のある陸生珪藻が約35%産出する。淡水性種の生態性（塩分濃度，水素イオン濃度，流水に対する適応能）は，貧塩不定性種，真＋好アルカリ性種，流水不定性種が優占あるいは多産する。主要種は，陸生珪藻の中でも耐乾性の高い陸生珪藻Ａ群の *Hantzschia amphioxys* が約20%，流水不定性で付着性の *Gomphonema parvulum*，*Stauroneis lauenburgiana* が約10%産出し，流水性で中～下流性河川指標種の *Planothidium lanceolatum*，止水性で沼沢湿地付着生種の *Pinnularia nodosa* 等を伴う。

落ち込み⑦層と落ち込み⑥層は群集が近似しており，陸生珪藻Ａ群が約90%と優占する。特徴は，陸生珪藻Ａ群の *Hantzschia amphioxys* が約60%前後と優占し，同じく陸生珪藻Ａ群の *Luticola mutica*, *Amphora montana* 等を伴う。

⑶ 樹種同定

樹種同定結果を表４に示す。石田高原１区より柱根は全て針葉樹のマキ属に同定された。解剖学的特徴等を記す。

表４　樹種同定結果

試料番号	調査地区	試料名	樹種
1	石田高原１区	ピット内柱根 pit50	マキ属
2	石田高原１区	ピット内柱根 pit47	マキ属
3	石田高原１区	ピット内柱根 pit49	マキ属

・マキ属（*Podocarpus*）マキ科

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで，晩材部との境界は不明瞭。樹脂細胞は早材部および晩材部に散在する。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型で１分野に１－２個。放射組織は単列，１－10細胞高。

⑷ 植物珪酸体分析

結果を表５，図２に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの，保存状態が悪く，表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。

水田様落ち込み①層での植物珪酸体含量は，約１万個／ｇである。栽培植物であるイネ属が検出され，葉部に形成される短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体が見られる。ただし，その含量は少なく，短細胞珪酸体が100個／ｇ未満，機動細胞珪酸体が約100個／ｇである。この他に，タケ亜科，ヨシ属，コブナグサ属やススキ属を含むウシクサ族，イチゴツナギ亜科なども認められる。

水田様落ち込み②層では，水田様落ち込み①層よりも植物珪酸体含量が少なく，約1,600個／ｇである，イネ属は，全く検出されない。タケ亜科，ヨシ属，ウシクサ族などがわずかに認められるに過ぎない。

表５　植物珪酸体含量　（個/ｇ）

種　類	八反２区 水田様落ち込み ①層 1	②層 2
イネ科葉部短細胞珪酸体		
イネ族イネ属	＜100	－
タケ亜科	1,600	＜100
ヨシ属	900	＜100
ウシクサ族コブナグサ属	＜100	－
ウシクサ族ススキ属	500	－
イチゴツナギ亜科	100	－
不明キビ型	1,600	＜100
不明ヒゲシバ型	600	＜100
不明ダンチク型	2,000	300
イネ科葉身機動細胞珪酸体		
イネ族イネ属	100	－
タケ亜科	500	＜100
ヨシ属	300	＜100
ウシクサ族	600	＜100
不明	1,100	800
合　計		
イネ科葉部短細胞珪酸体	7,500	600
イネ科葉身機動細胞珪酸体	2,800	1,000
総　計	10,200	1,600

含量は，10の位で丸めている（100単位にする）
＜100：100個/g 未満
なお，合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている

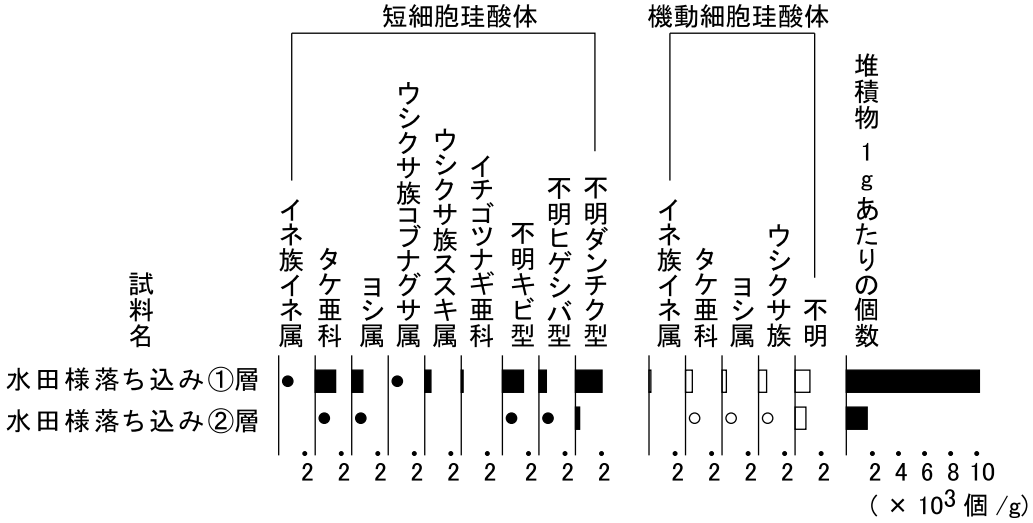


図２．八反２区における植物珪酸体含量の層位的変化
堆積物１ｇあたりに換算した個数を示す。●○は100個/ｇ未満を示す。

４．考察

⑴　石田高原４区における古植生

今回の分析の結果，弥生時代中期包含層とされる４ｃ層，４ａ層のいずれも花粉化石の産出状況が悪く，４ａ層からイネ科花粉が数個体検出されるにとどまる。花粉化石・シダ類胞子の産出状況が悪い場合，元々取り込まれる花粉量が少なかった，あるいは，取り込まれた花粉が消失した，という２つの可能性があげられる。今回，わずかに検出されたイネ科花粉は，花粉外膜が破損・溶解するなど保存状態が悪かった。一般的に花粉やシダ類胞子の堆積した場所が，常に酸化状態にあるような場合，花粉は酸化や土壌微生物によって分解・消失するとされている（中村，1967；徳永・山内，1971；三宅・中越，1998など）。このことから，堆積時に取り込まれた花粉・シダ類胞子が，その後の経年変化により分解・消失した可能性が考えられる。

過去の分析事例を見ると，石田高原地区の弥生時代後期～古墳時代初頭とされる溝覆土からは，草本花粉が多産し，イネ科が優占する群集が得られている（株式会社　古環境研究所，2003）。今回の分析結果は既存の調査事例で多産するイネ科が検出されることから，元々はイネ科を中心とする草本類主体の群集組成であった可能性も想定される。

⑵　石田高原５区における堆積環境

石田高原５区の落ち込み⑥層～⑧層の堆積環境は，珪藻化石群集の特徴から，落ち込み⑧層と落ち込み⑦層・⑥層の２つに類別される。落ち込み⑧層は，中～下流性河川指標種や沼沢湿地付着生種を含む淡水生種と陸上の好気的環境に生育する陸生珪藻Ａ群とが混在する。したがって，落ち込み⑧層が堆積する頃は水の存在が示唆されるとともに，周囲の乾いた好気的環境からは陸生珪藻を含む土壌が落ち込み内に流れ込んだことが示唆される。ただし，産出した化石の保存状態が悪かったことから，淡水生種はいわゆる地山に元々含まれていた化石に由来する可能性もある。これは，地山層の珪藻化石群集を明らかにするとともに，落ち込み層の珪藻化石群集と比較検討する必要がある。

一方，落ち込み⑦層・⑥層では，陸生珪藻が優占する。したがって，これらの層が堆積する頃には，

落ち込み内は水が無くなり，しばしば乾燥するような好気的環境に変化したと考えられる。

本遺跡は，深江田原と呼ばれる平野の中に所在し，遺跡の近くには幡鉾川が東西に流れている。今回検出された落ち込みは，下位の落ち込み⑧層では水の存在が示唆され，流水指標種なども検出されたが，上位の落ち込み⑦層・⑥層では，乾燥するようになったことが推定された。このことから，落ち込みは幡鉾川等の河川の影響を受けて埋積し，その後乾燥するようになったと考えられる。本地点における河川の影響については，周囲の堆積や切り合いの状況などを考慮して検討することが望まれる。

⑶ 石田高原１区ピット内柱根の樹種

石田高原１区のピット３基から出土した柱根は，全て針葉樹のマキ属に同定された。マキ属は，暖温帯常緑広葉樹林中に生育し，針葉樹としては比較的重硬で強度・耐水性が高い材質を有しており，柱材としては適材といえる。同定を実施した３点とも同一樹種であることから，柱材としてマキ属が選択的に利用された可能性がある。

今回の柱根のうち，pit49の試料については，同一個体で年代測定を実施しており，2,030±30ＢＰの値が得られている。原ノ辻遺跡では，これまでに弥生時代前期後葉～中期初頭とされる柱材と礎板がクリに同定された例があるが，マキ属は確認されていない（株式会社古環境研究所，1995ｂ）。今回の結果から，マキ属も利用されていたことが判明した。樹種選択に時期的な違いがあるか否かについては，今後さらに資料を蓄積することが望まれる。

なお，前出の石田高原地区で実施された花粉分析結果によれば，アカガシ亜属やシイ属－マテバシイ属などが比較的多く産出しており，周囲には暖温帯常緑広葉樹林が見られ，落葉広葉樹のエノキ属－ムクノキ，クリ，針葉樹のスギ等も生育していたと考えられている（株式会社古環境研究所，2003）。マキ属の花粉は検出されていないが，花粉分析から推定される古植生を考慮すれば，遺跡の近傍には生育していなくても，周囲には生育していた可能性がある。

⑷ 八反地区の水田検証

八反２区の畦畔遺構付近で検出された水田様落ち込みの埋積物では，水田様落ち込み①層でイネ属の植物珪酸体がわずかに認められた。稲作が行われた水田跡の土壌では，栽培されていたイネ属の植物珪酸体が土壌中に蓄積され，植物珪酸体含量（植物珪酸体密度）が高くなる。水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合，一般にイネの植物珪酸体（機動細胞由来）が試料１ｇ当り5,000個以上の密度で検出された場合に，そこで稲作が行われた可能性が高いと判断されている（杉山，2000）。この例を考慮すれば，水田様落ち込みではイネ属の植物珪酸体が土壌中に蓄積しておらず，この産状を見る限り，水田様落ち込みで稲作が行われたことを積極的に支持することは難しい。

なお，原の辻遺跡石田高原地区の北東端に位置する調査区（Ｉ区）では，弥生時代や古墳時代の遺構が検出され，植物珪酸体分析が実施されている（古環境研究所，1995ａ）。それによれば，弥生時代の遺構が構築される以前に稲作やムギ栽培が行われた可能性があるものの，これらの含量が少なかったことから耕作期間が短かった可能性が指摘された。また，弥生時代では，環濠間など調査区の広い範囲で稲作が行われていたことが想定されている。今後，当該期の堆積層における情報を蓄積し，水田様落ち込みでの稲作について検討したい。

ところで，水田様落ち込みの埋積物からはタケ亜科やヨシ属，ススキ属などの植物珪酸体が検出さ

れた。前述した植物珪酸体分析では，遺構が構築される以前に樹木の生育がうかがえ，ヨシ属などが生育する湿潤な場所が存在したこと，弥生時代の環濠内がヨシ属などの生育する湿潤な場所であったこと，遺跡周辺がタケ・ササ類やススキ属などが生育する開けた場所であったことが推定された（古環境研究所，1995ａ）。八反２区の水田様落ち込み付近でも，開けて乾いた場所に生育する種類の多いタケ亜科やススキ属，湿潤な場所に生育するヨシ属が見られたことから，周辺に乾いた場所や湿潤な場所が存在したと考えられる。

引用文献

安藤一男，1990，淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用．東北地理，42，73-88.

Asai, K. & Watanabe, T., 1995, Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom, 10, 35-47.

原口和夫・三友清史・小林　弘，1998，埼玉の藻類　珪藻類．埼玉県植物誌，埼玉県教育委員会，527-600.

Hustedt, F., 1937-1939, Systematische und okologische Untersuchungen uber die Diatomeen-Flora von Java,, Bali und Sumatra. Archiv fur Hydrobiology, Supplement, 15:131-177, 15:187-295, 15:393-506, 15:638-790, 16:1-155, 16:274-394.

伊藤良永・堀内誠示，1991，陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用．珪藻学会誌，６，23-45.

伊藤良永，2007，珪藻分析の歩みと動向．PALYNO No.５，パリノ・サーヴェイ株式会社出版刊行会，61-66.

古環境研究所，1995ａ，原の辻遺跡の植物珪酸体分析．長崎県文化財調査報告書124集　原の辻遺跡　幡鉾川流域総合整備計画（圃場整備事業）に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅰ，長崎県教育委員会，221-232.

株式会社　古環境研究所，1995ｂ，原の辻遺跡出土木製品の樹種同定．長崎県文化財調査報告書124集　原の辻遺跡　幡鉾川流域総合整備計画（圃場整備事業）に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅰ，長崎県教育委員会，263-273.

株式会社　古環境研究所，2003，長野県，原の辻遺跡（平成14年度調査研究事業）における自然科学分析．原の辻遺跡調査事務所調査報告書　第26集　原の辻遺跡　原の辻遺跡調査研究事業調査報告書，長崎県教育委員会，173-187.

小林　弘・出井雅彦・真山茂樹・南雲　保・長田啓五，2006，小林弘珪藻図鑑．第１巻，㈱内田老鶴圃，531ｐ.

近藤錬三，2004，植物ケイ酸体研究．ペドロジスト，48，46-64.

小杉正人，1988，珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用．第四紀研究，27，１-20.

Krammer, K., 1992, PINNULARIA. eine Monographie der europaischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND 26. J. CRAMER, 353 p.

Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1986, Bacillariophyceae. 1.Teil: Naviculaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band 2/1. Gustav Fischer Verlag, 876 p.

Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1988, Bacillariophyceae. 2.Teil: Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band 2/2. Gustav Fischer Verlag, 536 p.

Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1991 a, Bacillariophyceae. 3.Teil: Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band 2/3. Gustav Fischer Verlag, 230 p.

Krammer, K. & Lange-Bertalot, H., 1991 b, Bacillariophyceae. 4.Teil: Achnanthaceae, Kritsche Ergaenzungen zu Navicula(Lineolatae) und Gomphonema. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band 2/4. Gustav Fischer Verlag, 248 p.

Lowe, R. L, 1974, Environmental Requirements and pollution Tolerance of Fresh-water Diatoms. 334 p. In Environmental Monitoring Ser. EPA Report 670/4-74-005. Nat. Environmental Res. Center Office of Res. Develop., U. S. Environ. Protect. Agency, Cincinati.

三宅　尚・中越信和，1998，森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態．植生史研究，６，15-30.

中村　純，1967，花粉分析．古今書院，232ｐ．

Richter H. G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E.（編），2006，針葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト．伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部　久・内海泰弘（日本語版監修），海青社，70p. [Richter H. G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P. E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].

Round, F. E. ., Crawford, R. M. & Mann, D. G. 1990, The diatoms. Biology & morphology of the genera. 747 p. Cambridge University Press, Cambridge.

島地　謙・伊東隆夫，1982，図説木材組織．地球社，176ｐ．

杉山真二，2000，植物珪酸体（プラント・オパール）．辻　誠一郎（編著）考古学と自然科学３　考古学と植物学，同成社，189-213.

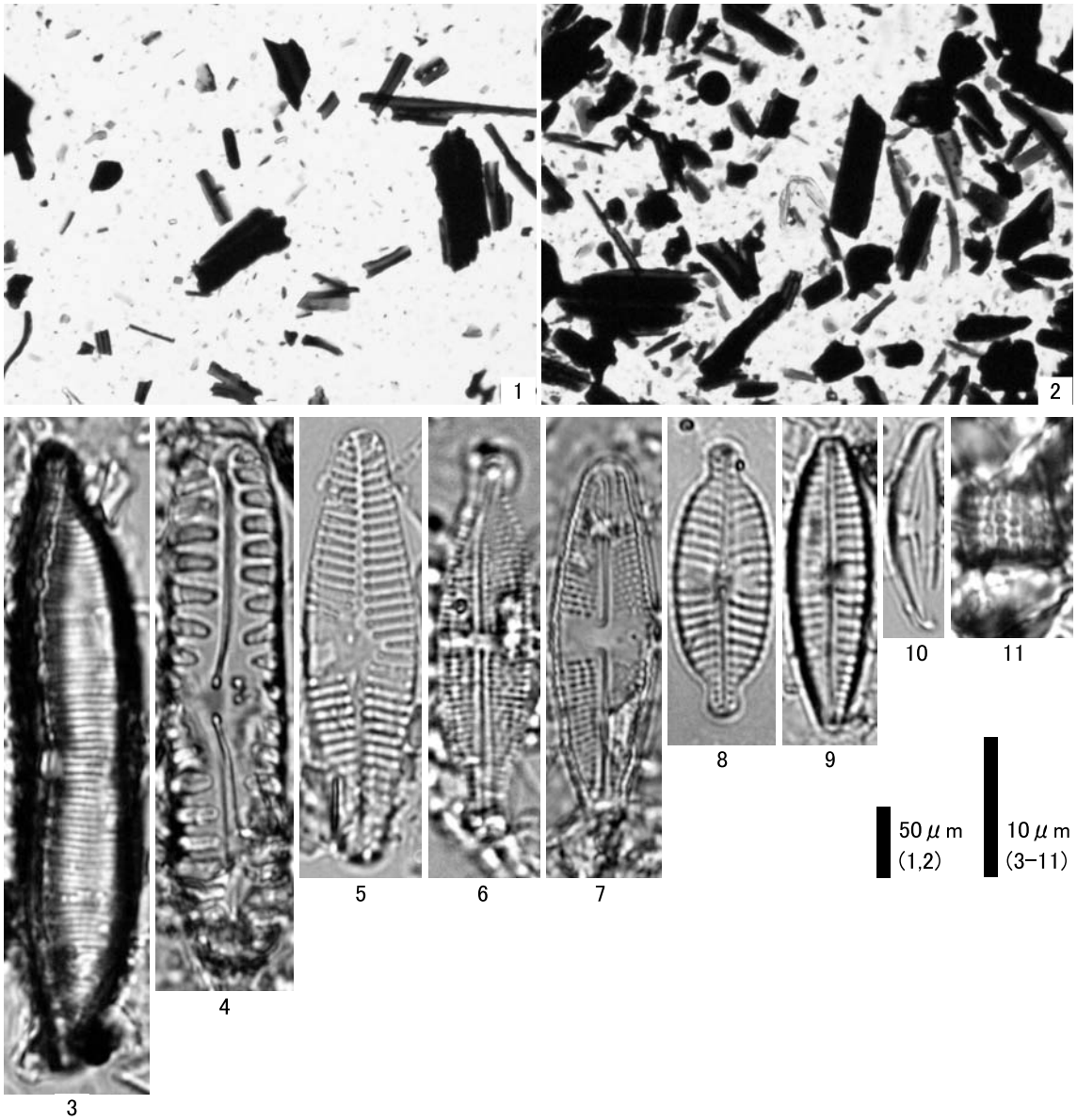
徳永重元・山内輝子，1971，花粉・胞子．化石の研究法，共立出版株式会社，50-73.

Vos, P. C. & H. de Wolf, 1993, Diatoms as a tool for reconstructing sedimentary environments in coastal wetlands; methodological aspects. Hydrobiologica, 269/270, 285-296.

渡辺仁治・浅井一視・大塚泰介・辻　彰洋・伯耆晶子，2005，淡水珪藻生態図鑑．内田老鶴圃，666ｐ．

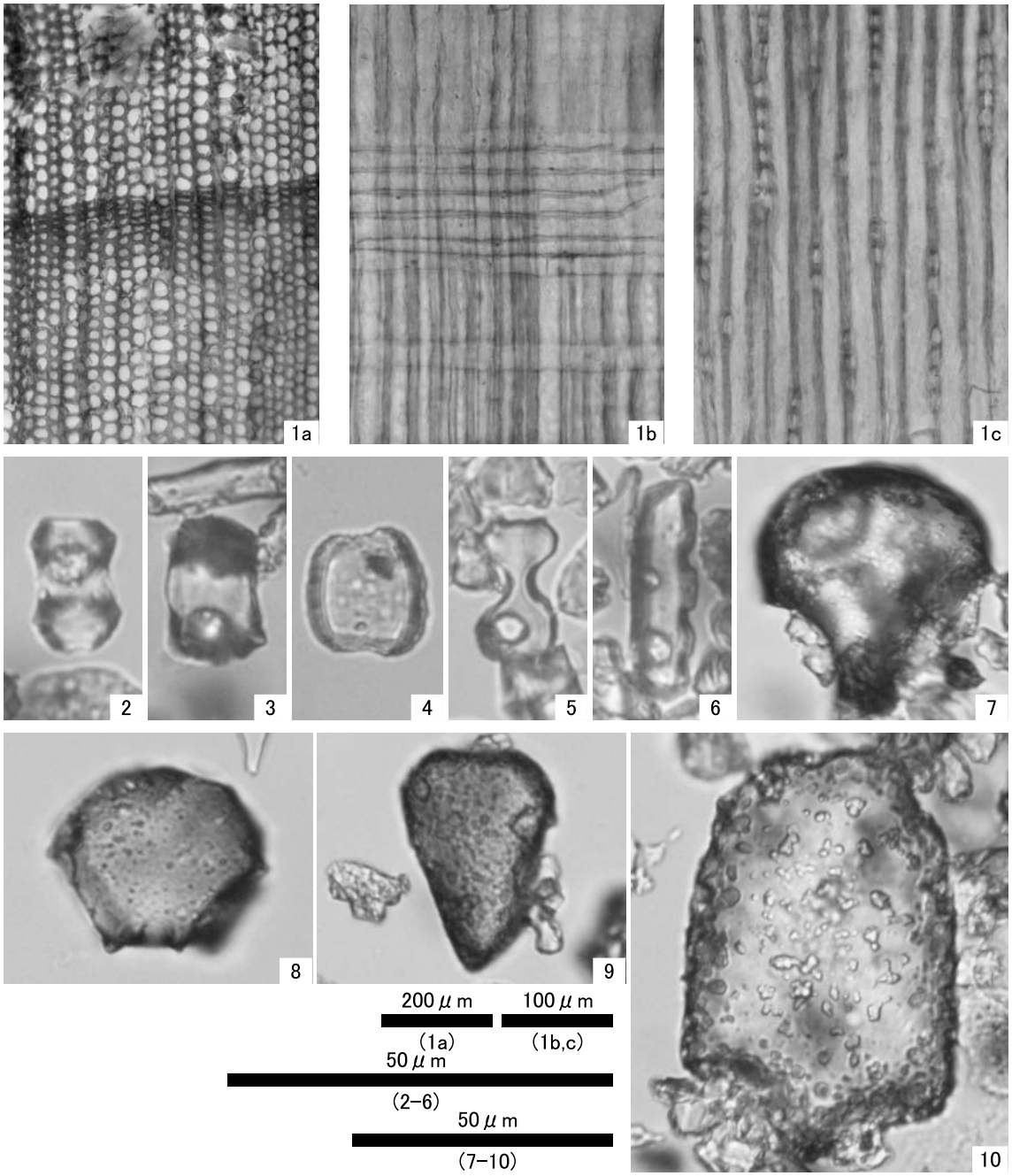
柳沢幸夫，2000，Ⅱ-１-３-２-⑸計数・同定．化石の研究法－採集から最新の解析法まで－，化石研究会，共立出版株式会社，49-50.

※）本測定は，当社協力会社・パリノ・サーヴェイ㈱にて実施した。



図版１　花粉分析プレパラート内の状況・珪藻化石

１．プレパラート内の状況（石田高原４区；弥生時代中期包含層４c 層）
２．プレパラート内の状況（石田高原４区；弥生時代中期包含層４a 層）
３．*Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow（石田高原５区；落ち込み⑥層）
４．*Pinnularia borealis* Ehrenberg（石田高原５区；落ち込み⑦層）
５．*Planothidium lanceolatum* (Breb. ex Kuetz.) Lange-Bertalot（石田高原５区；落ち込み⑧層）
６．*Stauroneis lauenburgiana* Hustedt（石田高原５区；落ち込み⑧層）
７．*Luticola mutica* (Kuetz.) D. G. Mann（石田高原５区；落ち込み⑦層）
８．*Placoneis elginensis* (Greg.) E. J. Cox（石田高原５区；落ち込み⑧層）
９．*Gomphonema parvulum* (Kuetz.) Kuetzing（石田高原５区；落ち込み⑥層）
10．*Amphora montana* Krasske（石田高原５区；落ち込み⑥層）
11．*Aulacoseira distans* (Ehr.) Simonsen（石田高原５区；落ち込み⑥層）



図版２　木材・植物珪酸体

１．マキ属（石田高原１区；ピット内柱根 pit47） a：木口，b：柾目，c：板目
２．イネ属短細胞珪酸体（八反２区；水田様落ち込み①層）
３．タケ亜科短細胞珪酸体（八反２区；水田様落ち込み①層）
４．ヨシ属短細胞珪酸体（八反２区；水田様落ち込み①層）
５．ススキ属短細胞珪酸体（八反２区；水田様落ち込み①層）
６．イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体（八反２区；水田様落ち込み①層）
７．イネ属機動細胞珪酸体（八反２区；水田様落ち込み①層）
８．タケ亜科機動細胞珪酸体（八反２区；水田様落ち込み①層）
９．ヨシ属機動細胞珪酸体（八反２区；水田様落ち込み①層）
10．ウシクサ族機動細胞珪酸体（八反２区；水田様落ち込み①層）

報告書抄録

ふりがな	はるのつじいせき
書名	原の辻遺跡
副書名	原の辻遺跡調査報告書
巻次	
シリーズ名	第40集
編著者名	川畑敏則・林　隆広・宮﨑貴夫
編集機関	長崎県教育庁原の辻遺跡調査事務所
所在地	〒811-5322　長崎県壱岐市芦辺町深江鶴亀触1092番地１　TEL0920(45)4080
発行年月日	西暦2009年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
原の辻遺跡（はるのつじ）	長崎県壱岐市芦辺町深江鶴亀触	42424	72-92	33°45′30″	129°45′55″	2008.8.25 ～ 2008.12.16	740m²	原の辻遺跡調査研究事業（国庫補助事業）

収録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
原の辻遺跡	集落	弥生時代 古墳時代	濠・落ち込み・水田跡	弥生土器・土師器・三韓系瓦質土器・陶質土器・敲石・砥石・鉄鎌・ガラス管玉	・新たな環濠の検出

原の辻遺跡調査事務所調査報告書第40集

原の辻遺跡

2009. 3. 31

発行　長崎県教育委員会
長崎市江戸町２番13号

印刷　株式会社　昭和堂